
アイケン

霞川悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイケン

【Nコード】

N8714H

【作者名】

霞川悠

【あらすじ】

私立創世学園愛研究部。通称アイケン。主人公、台場海斗^{だいばかいと}は入学初日に愛研究部に無理矢理入部させられてしまう。自分以外は全員女子生徒。しかも全員エロい…。さらに、そこで起きるHな事件に巻き込まれたりする。ラブコメというかエロコメな霞川悠の第2作！ストーリー性には期待しないでください。登場人物はクールで毒舌な先輩、サディスティックな先輩、お姉ちゃんぶる変態先輩、主人公の嫁を自称する同級生、はじめての相手の先生、変態実姉、ゴーストエロメイド…など他にまだ出てくる予定です。「アイケン外

伝だいばけ」もここに連載されます。

アイケン（前書き）

どうも霞川悠です。

正直な話、この小説はストーリー性など多分ありません。
ラブコメみたいでエロコメみたいなコメディ連載です。

ではどうぞ。

アイケン

「あん…」

「ん…」

「ちょっ…」

室内に艶かしい声が響く。

何をやっているか知らないが、これは愛の研究なのだろうだ。中に入りたい衝動を抑え、立ち止まる。

ここで入ったら「奴ら」の思う壺だ。

入ったら入ったで、俺にも何かをされてしまうに違いない。

「んんっ…!」

「…」

気になる。すっげえ気になる。

だが、先人たちは儚くも散っていったという。

愛の女神に魅せられた先人たちは、二度と女性に近づかなかったという…

それは一体どういことなんだ？

学園創立以来、何故かずっと存続している部活…

その女神の愛によって守られている部活…

それが…愛研究部^{アイケン}

その女神の領域に踏み込んだ俺もまた…散っていった。

それから60年後：
アイケン
愛研究部はまだ学園に存在していた：

アイケン（後書き）

更新スピードは夏休みよりは遅くなるでしょう…

ちょっと待って！俺を殺さないでください！（前書き）

アイケンスタート。

まだまだ過激じゃないですね…

ちょっと待って！俺を殺さないでください！

桜の花びらが舞う。そんな季節：つまり4月。今日はどうしても天気もよく、運勢もいい。こんなについている入学式は中々ない。

俺、台場海斗だいはるかいとは今日から私立創世学園に通う1年生である。創世学園：そう、名前はものすごいのだが、実際は創立者がインパクトのある名前を付けようと考えたらしい。多分創立者はア○エリ○ンとは何も関係がないと思われる。

それはともかく、俺は晴れてこの学校の1年生となれたのだ。思えば去年、受験で死ぬほど苦勞し、苦勞し、毎週読んでた週刊少年ジヤ○プを読むのを諦めるほど頑張った。それほど去年はすごく勉強をした。

思春期の男子に訪れるムラムラ感も出来るだけ我慢我慢し、ついに手に入れた自由！すなわち幸福！

俺の人生は今日からまたハッピーなものになる：そう確信しなければいけないかった。

まだ学校にも行ってないのだが、俺はもう浮かれに浮かれて緩みきっていた。

部活や友達との交友：そしてムフフな展開！全てに期待しまくりだ！

「オイ、ボスどうします？」

「フン：殺せ」

「ん？」

俺は桜の木の隣で立ち止まる。

何やら人が話しているようだ。しかも結構物騒な：

「じゃあこいつは？」

「関係ない。刃向かうものはみんな殺せ」

「?!」

これ、ヤバイんじゃないか?! 桜の季節に似合わない単語が死ぬほど聞こえてきたんですけど!!
俺は頭を抱えながらどうするか迷った。

「おいそこのお前」

「うえっ?!」

み、見つかった?!

俺に黒ずくめの服装の二人組みが近づいてくる。

「今の話、聞いたか？」

「ええ?! 何のことですか?!」

な、なんでこんなことになってるんだよ俺は!!

今日は運勢も良くて：ハッピーな一日になるはずじゃあ：

「何も聞いていないの？」

声的には女性だ。しかし、サングラスのおかげで俺はビビりにビビりまくっている。

「そ、そうです！僕は貴方達がどなたかも知りませんし、さっきこ

ここを通ったばかりなのです！」

「そう。じゃあちよっとこっちに来なさい」

「ええ?! だ、だから僕は…」

「来なさい」

「は、はい!!」

俺は声を裏返しながら返事した。だって怖いし。

「こ、ここまでですか？」

俺はその女と2歩ぐらいの距離で立ち止まる。

ここでナイフとか拳銃とか出されて…うわああああ!!

「もっと近くだ。吐息のかかるぐらいの距離でもいいぞ? 少年」

「ええっええ?!」

どうすればいいんだ?!

とりあえず言われたとおり近づかなくちゃ…殺される!!

俺はゆっくりと近づき、とうとう半歩ぐらいの距離まで来た。

「いい子だ。手を出して」

「て、手？」

俺は混乱した。どういうことだ？

「右でも左でも両方でも。さっさとしなさい」

「は、はい！」

俺は左手を出した。失うならせめて利き手じゃないほうで…!!
俺は泣きそうになりながらも我慢した。

「さて…」

女は俺の左手を取った。

ほ、本当に斬られる?! 撃たれるのか?!

女はその俺の手を自分の胸に当て…胸に当て…

むにっ

「?!」

俺は硬直した。

な、何が起きたんだ?! い、いや分かるけど…分かるけど…

「揉んだわね？」

「ひ、ひいーっ!!」

今度こそ殺される! 何で俺は指を曲げてしまったんだ!!

「い、命だけはお助けください!」

俺は土下座しそうな勢いで頭を下げた。

「ならばこれに自分の名前を書きなさい」

「は、はい!!」

俺は無我夢中でその紙に自分の名前を書いた。
いったい何の紙だったんだ？

「そう…台場海斗というのね？」

「は、はい!!」

女が少し微笑んだ。これは助かるかもしれない…

「…っしゃあ!!!!」

「やりましたね!!」

「しっかりと揉んだシーンは写真に収めました」

「え? え?」

何か突然俺を脅してきた女はガッツポーズをし、隣にいた人は自分のことのように喜び、草むらの影から出てきた女の子はカメラを片手にVサインしていた。

「な、なんですか？」

「ふっふっふ…台場海斗よ! 創世学園愛研究部へようこそ!!」

「は、はあ?!」

俺は、突然サングラスと黒いコートを脱ぎ捨て先ほどまで俺を脅していた女性を見つめた。

素顔は結構美人だったとかそんなことを考えている場合ではない。

「キミは今、入部届けにサインしただろう? 証拠がここに!」

そして俺に見せてきたのは、先ほど俺が名前を書いた紙だった。

「な、なんなんすかその愛研究部って!」

「奈緒美ちゃん、新入部員が興味深々よ」

どうやら俺を先ほどまで脅していた女の名前は奈緒美と言うらしい。

「愛研究部っていうのはね…」

「愛研究部っていうのは…?」

「次回説明しよう!」

「次回かよ!」

「だって早くしないと入学式遅刻だぞ?」

「うわあ!」

俺の学校性活はこうして始まった
ん? 誤字じゃないのかって?

じゃあそういうことにしよう。

ちょっと待って！俺を殺さないでください！（後書き）

まさかこれを執筆してしまうとは…
随分と血迷ってしまったようです。

登場人物紹介

台場海斗

創世学園新入生。超ラブコメ体質。まあ説明しなくても分かります
よね…

家族構成は祖父、祖母、父、母、姉、妹、弟。自分は長男。現在は
一人暮らし。

一人称が安定せず、俺と僕を場合によって使い分ける。

ええ?!これって脱ぎたてなんですか?! (前書き)

サブタイトルで釣ってみます。
でも脱ぎたてですよ。

ええ?!これって脱ぎたてなんですか?!

入学式といえば桜!桜といえいろいろ思い浮かぶけど...(CC、DC、FS、CB、NM...)どちらにせよ、華やかで明るく、楽しいイメージだ。(ちなみに具体例の中には例外が複数存在)

いやあワクワクしますなあというこの感じが良いのだよワトソン君みたいな感じになるのだよ。

その心地好い気分を味わうために入学式に来ているといっても過言ではない。そうさ、人間は入学式に己の存在意義を懸けている人があるといっても過言ではない。

だから俺はリングよりも入学式にかけたいと思う。

いや、長々語ってしまって申し訳ない。つまり、何が言いたいのかというと、俺は初日から気分は憂鬱だということだ。

「やあ。台場君。中学ぶりだね」

「あ、ああ。堀井君」

そんな憂鬱な俺に話しかけてきた男は堀井^{ほりい}といって、中学の同級生である。

別にあんまり仲良くなごない。

「僕は滑り止めでここに「特待」で入ったんだけど…君は大変そうだったじゃないか」

「そ、そうですね…」

この堀井とか言う男は自分の才能に酔っているらしい。
ことあるごとに人に自分の頭のよさを見せ付けるのが好きだ。まあ

こういう奴だから中学では結構嫌がられてた。
まさかよりにもよって俺と同じクラスとは：

「ま、留年だけは気をつけるんだよ」

「そうですね」

俺は適当に返事をした。

「何だよその生返事は。まあ、成績面での心配事には事欠かなそうだからね、君は」

「…」

そう言うところ堀井はさっさと自分の席に戻っていった。
俺はそんなことを気にせず、別のことを考えていた。もちろん今朝のこと。

「愛研究部とは…」

「愛研究部とは…？」

「次回説明しよう！！」

って今が次回だから説明してもらわないと困るよ！！

俺は帰りのHRが終わった後、先生に部室の場所を聞いて、部室に入った。

その際、先生方が妙に俺を怪訝そうな目で見ていたのだが、どうしてだ？

「1年の台場です。失礼します」

俺は軽いノックの後、部室の中に入っていった。

「あら？あなたは今朝の新人部員」

「え？新人？」

何か俺ってもうこの部活の部員扱い？

俺の目の前でパソコンを弄っている少女がそんなことを言った。

「ちょっと待ってね。副部長は今仕事をしてるから」

「？」

俺は首をかしげる。しかし、本当に仕事してるんだな。何してるかわからない部活だけど…

「あ、自己紹介するわね。私は幕張^{まくはり}アクア。あなたの一つ上の高校2年生よ。アクアさんと呼んで。アクアでもいいわ」

「あ、どうも。台場海斗です」

どうやらまともそうな人だ。真面目そうだしな…俺は胸を撫で下ろした。

「副部長が来るまで暇でしょ？ゲームをしましょう？」

「はい？ゲーム？」

俺は真剣な目のアクアさんを見る。さすがに呼び捨てはまずい。

「そ。負けたら勝った人のいうことを何でも聞かなくちゃいけないというルールで」

「え…」

それってよくあるゲームだけど…

「ぼ、僕は遠慮しようかな…？」

「じゃあじゃあ始めるわね」

「聞けよ?!」

しかし、彼女は紙に何かを書き始めた。

「ゲーム名は耐久しりとり。言葉は10文字以上。制限時間は10秒。しりとり「り」から。ヨイスタート」

「ぼ、僕から?!」

「そうよ」

「り、陸軍本部長」

「やるわね。海は広いな大きいな。はい」

「ええ?!それアリなのかよ!?!」

海は広いな大きいなって歌詞じゃないか?!

「な、ながされて○○島!」

「へえ。また「う」で来るとは…中々のサドね。失われた小銭への怒り（ベートーベン）」

「な、なんだそれは!」

「ピアノ曲よ。ほら。急がないと」

「り、り、り…」

「はい。終了」

「うわああ!!」

何だよこの変則しりとり! しかも結構ずるいの言わなかったか?

「じゃあ何を命令しようかしら…そうね、あなたは今日一日これを着なさい」

「はい?」

そう言って俺に見せてきたものはスクール水着(女性用)

「せ、せめて別のものに変えてくれませんか!？」

「…しょうがないわね。じゃあこれ」

今度は女子用の制服を渡してきた。

「え。え。えええええ?!」

「早く着なさいよ」

「いや、でも…」

俺は少しためらう。が…

「そう。じゃあ例の写真をばら撒いてもいいのよ」

「着ます!」

俺は仕方なしに制服を着ることにする…はあ…

「何してるの? あなた男子の制服の上から着る気? 邪道よ。ちゃんと脱ぎなさい」

「エエエエエエエ?！」

「早く」

何かすごく視線と声が怖かった。俺は言われるがままに制服を脱いで…

「あの…何で見てるんですか?」

「興奮するから」

「普通に言わないでくださいよ!!!」

俺は隠しながらズボンを脱いでスカートを穿いた。…言っておくが女装癖なんか全然ないぞ。

「ねえ。さすがにトランクスを脱げとは言わないけれど…ブラジャーぐらい着けなさい」

「ほわぁい?!」

「何でも命令聞くんでしょ?」

「ひいいい!!」

何か今この人殺氣みたいなの発したような気がしたんですけど!!
俺は震えながらも頷いてしまった。

「…そうね…ブラジャーは準備していないから…」

そう言って彼女は自分の胸元に手を突っ込み…

「はい。私の脱ぎたて貸してあげる」

「な、何やってるんですか!!」

「着なさい」

「うぐ…」

俺はそのブラジャーを持つ。

それはかすかにぬくもりがあり…

って俺は何変態みたいなのをやっているんだ!!これは仕方なく
だ仕方なく!!

俺は無心になってブラジャーを装着し…

カシャッ

「え?」

突如フラッシュが焚かれた。

「ま、こんなものね」

「何写真撮ってるんですか?!」

「いいじゃない。減るもんじゃないし」

「減ります!」

そうして彼女にブラジャーを返す。

カシャッ

「うわあ!! 変なシーン撮られた!!」

ガラガラ

「いいい?!」

そして突如開けられた扉。そこにはニヤニヤした顔で残りの二人の部員がたっていた。

ちなみに、後ろでアクアさんはVサインを出していましたとさ。

「何がとさだああ!!」

俺の絶叫が部室内に響き渡ったのであった。

ええ?!これって脱ぎたてなんですか?! (後書き)

登場人物紹介

まくはり
幕張アクア

偽名。この名前は小説家になろうで使っているペンネーム。

身長は160センチ。スリーサイズは：要望があつたら書きます。

ヘアバンドと後ろの大きいリボンがチャームポイント。

言うまでもなく、変態。そして美少年好きで、アイドルオタク。

性知識が豊富すぎる。が、あまり表に出さない。

性格はクール系であるが、本人曰くデレもありますとのこと。だが、たまにヤンもあるらしいです。

やめてください少佐、セクハラです（前書き）

セクハラタイムがスタート。

いずれは海斗も…？

やめてください少佐、セクハラです

「さて、早速だが、愛研究部について説明しよう」

「それは前回言うべきだったのでは?!」

突然テンションが高くてすいません。状況の説明なしにそんな会話を交じらせてしまつて申し訳ありません。決してわざとではないのですよ。

今、俺の格好は普通の制服の格好である。つまり、着替えました。そして、部員は俺を入れて4人…というか俺は無理矢理入れられた脅しで。

それでやつと愛研究部の活動について聞けることになったのだ。とか前回ブラジャーのせいでそんなことが出来なかったからな…

「その前に自己紹介だ」

「そ、そうっすね…」

そういえばまだ向こうの名前を聞いていなかった。俺は第一話で俺を脅してきた女性を見た。

「私は渋谷奈緒美^{しやや なおみ}。副部長で3年生。奈緒美様かご主人様と呼べ」

「はい?!」

「返事したな。呼べ」

「今のは返事じゃないっす!!」

「1000000000歩譲って奈緒美先輩だ」

「譲りすぎです奈緒美先輩」

「というか俺も適応率高いな……」

「私は……」

すると今度は俺の後ろから声が聞こえてきた。

もう一人の部員だ。

「川崎聖子かわさき せいこって言います。私のことは聖子お姉ちゃんって呼んでね？」

「な、何で?!」

「私、血の繋がらない弟が欲しいから」

「何だよその理由！」

「えー。お姉ちゃんって呼んでよ」

「…」

何だこのドキドキとするオーラは……まさか俺って弟属性なのか?!
いや、待とう。確かに俺には姉がいる。しかしっ! 妹もいる! つま
りっ! 俺は兄属性でもあるんだよ!!

……結局何が言いたいのかよく分からない。

「ほらほら…お姉ちゃん、もう我慢できないよ…って言うてよく！
ああ興奮する！」

「…」

ここの部活って変態の集まりなのでは？俺は無意識にそんなことを
考えてしまった。

「それで、部長はどなたですか？」

俺は全員を見る。

するとみんな頷いて、一斉に俺を指しやがった。

「何で妙に息のあった連携を見せてるんですか！！ていうかそうい
うツッコミじゃねえ！！何で俺が部長なんですか！！」

「だってもう書類にそう書いちゃったし」

「うわぁ！近年漫画やラノベやアニメとかにしか出てこなさそうな
ひっでえ部活だ！！」

いやいや、これも一応小説ですから。

おい！誰だ？今俺に話しかけてきたのは！！

「ま、現実問題、そんなところはどうでもいい」

「流された？！」

「それよりも部員が4人しかいないことが問題なのだ！！」

「あ、そうですか…」

この人たちにとっては俺よりもそっちの方が重要らしい。
気持ちは分かるけど…悲しい限りだ。

「だから海斗！」

「部長を呼び捨て?!」

「お前、新入部員を勧誘して来るんだ! 4月中に見つけてこないと同好会にされてしまう! このままじゃアイケンをアイドウと呼ばなくてはいけない!」

「そっちの方が問題なの?! ていうかそれでもアイケンって呼べるし!! あと、部費とかはどうでもいいの?!」

「そっちは顧問が何とか出来るからいい」

「顧問つええ!!」

「だ・か・ら・頼んだぞ?」

「…はい」

返事するしかない状況ってあるんですね。俺はしみじみとそんなことを思ってみた。

そして頭の中を整理しよう…ん?! 何かまだ重要なことを聞いているような…ま、いいや。

副部長は奈緒美先輩、あとアクアさんに、聖子先輩…これってハーレムか?!

いや、落ち着くんだ海斗。落ち着くんだ、ま○つく海斗。これはハーレムと呼べるのか?!

状況的にそうだけど、立場的には俺って虐められてね?!これってリンチだよ!

「どうしたのかしら?」

「い、いえ…」

アクアさんに何かを勘付かれそうだったので、俺は本心を隠した。俺にはまだ救いがありそうだ。

「じゃあまず第1回目の活動をスタート。今日は何について話す?」

「いつものとおり子作りについてでいいよね?」

「はい?!いつものように?!」

この人たちはいつも何を話しているんだ?!

「じゃあ海斗に質問するわ。子作りに愛は必要かしら?」

これって…一応まともなのか?

「ま、まあ必要じゃないですか?」

「答えはノーよ。必要なのは精子と卵子。これだけで子供は出来るわ。そんなことも知らないの?」

「いやいや!予想外に生々しい話でびっくりしているんですよ!」

何だこの人たちは！羞恥心とか知らないのかよ！！

「じゃあ仕方ないわね。貴方に質問。あなたは子作りしたことある？」

「な、ないです」

「弟君って童貞なんだ」

「誰が弟ですか！」

俺は聖子先輩にそんな切り返しをした。

「好きな女性のタイプは？巨乳？貧乳？」

「これってセクハラですよね？！ねえ？！」

しかし、誰も俺に味方してくれるものはいなかったのである。
何というか…合唱。

漢字違うだろ！グダグダに終わらせるなよ！！

ではまたセクハラは次回に。

次回やるのかよ！もう最終話にしようぜ？！

やめてください少佐、セクハラです（後書き）

なんていうかもうエロしかないみたいですねー

まあそれだけのしょうせつなんです

登場人物紹介

しぶや なおみ
渋谷奈緒美

創世学園3年生でアイケンの副部長。

サディストで、人を虐めるのが大好き。というかセリフがほとんど言葉攻め：

言うまでもなく、変態。そしてバイでもある。

身長は169センチで、結構高め。スタイルは抜群。（詳細は省く）
海斗のことは面白いおもちゃのように思っている。

何てことだ…奪われた俺の初めて…(前書き)

ああ…とうとう…

何てことだ…奪われた俺の初めて…

「第一回子作り談義」

デカデカと部室の黒板にそんなことを書き出してある。

俺はこの学校に入ったこと自体が間違いのような気がしてならない。よくよく考えれば、ゲーテが言っていた。「もっと光を」

…いや、今の言葉、使うところ違くね？先人の言葉を浅知恵で使っちゃまズくね？

「さて、前回はいいところで切れてしまった。今回からセクハラ…もとい、海斗の性癖チェックを行なおう！」

「うわぁ！もうセクハラを隠す気もねえのか！」

「第1問。巨乳と貧乳はどっちがすき？」

「い、いや…別に普通で」

「つまらん。第2問」

…折角答えたのにひどい仕打ちだ。

「ストライクゾーンの年齢範囲は？」

「えーと…上下2歳くらいで…」

「普通だ。つまらん」

「面白さを求めてるのかよ！」

「第3問。SとM、どっち？」

「し、知らないよ!!」 ↑現在は若干Mモードな感じです。

うわぁ!! 何かセリフの横に余計なことを書かれた気が!!

「反応的に若干Mだな」

「:もう勝手にしてください」

「第4問。オ○○ーするときの手はどっち？」

「うわぁ!! 恥ずかしげもなくこの人は淫語言ってるよ!!」

「で、どっちだ？」

何かこの人の息が荒くなってるんですけど!!

「弟君。ちなみに私は右手だからね」

「あなたが何を言っているのか僕には分からないな。アハハハ…」

それにしても何で俺はこんな部活にいるんだろ？

「で、どっちだ?!」

この人たちは親父かい!!

「み、右手です！」

「左は使わないのか？私は使えるぞ？」

「この会話を誰か止めてー！」

「第5問。よく見るAVの種類は？」

「し、知りませんよ！！！」

「なるほど。雑種か。ゲイも見ているのか」

「そ、それ以外で！！！」

「それ以外はよく見ているのね」

「うわぁ！揚げ足を取られた！」

アクアさんにがっちり上げ足をとられてしまった。
俺に救いなどなかったのだな…助けてジーサス。

「第6問。私たち3人の誰かと子作りする場合、誰とがいい？」

「な、なんだこの質問？！」

「言葉の通りよ」

「私は弟君と子作りしたいな。ああん！弟君激しすぎる〜！そんなに縛らないでよ〜！興奮しちゃうよ〜！」

：選べないんだけど。何かどれを選んでも地雷。俺的にはアウトな気がする。

誰か助けて…

「さあ誰だ?!」

奈緒美先輩がニコニコ…いや、ニヤニヤしていた。何てSな人間だ。

「私を選んだらムフフな展開があるかもよ」

アクアさんにはもう騙されないぞ。絶対買だ。これに引っ掛かるものか!

「あん! いいよ!! 私としようよ!!」

：聖子先輩は一人で妄想の世界の中らしい。ダメだこの人…早く何とかしないと…

「俺は…右手でいいです」

「…」

「…」

「…」

そしてその場に静寂が訪れた。何かまずいこと言ったか?

ガラガラ

「？」

そのとき、部室の扉が開いた。俺的にはここの扉を躊躇なくあける人物にびっくりなのだが。

「集まってるね若者達。お、新入部員じゃない」

俺以外の3人の部員はみんなこの人に頭を下げて挨拶していた。
この人は一体何者？！

あの3人が頭を下げて挨拶するなんて！！

「彼女は顧問よ」

「あ…」

そうですよね。普通に考えればそうですよね。

「私は山手^{やまて}なつめ。この愛研究部、略してアイケンの顧問だ！！」

その女性教師は偉そうにふんぞり返って名乗った。
そして俺に近づいてきた。

「では新入部員に挨拶せねばな」

「え?! んぐっ!!」

俺はいきなりこの顧問の先生にキスされた。

「んんっ!!」

俺の口の中に先生が舌をいれ、嘗め回す。
頭がおかしくなりそうだ。
その状態がしばらく続き…

「さて、挨拶も終わったことだし」

「…先生。彼が失神しています」

「あ、長く息を止めすぎたかな？」

俺のファーストキスはこうして奪われた。
悲しすぎる…

…ちょっと！どこまで見てんのよ！

何てことだ…奪われた俺の初めて…（後書き）

登場キャラ紹介

川崎聖子

海斗より二つ年上の3年生。

血の繋がらない弟を欲しがる、言うまでも無く変態。

身長は162センチで、スタイルは普通。だが、かなりの変態。と
いうか多分一番だと思われる。

奈緒美とは親友で、肉体関係もある。

海斗を誘惑することに今はハマっている。

目の前が真っ白!?!わざとじゃないんだ! (前書き)

さて、真っ白なのは何でしょうね…

目の前が真っ白!?! わざとじゃないんだ!

「お前の高校生活、大事にしろよ」

頭の中に祖父の言葉が響く。

「高校生活と言うのは人生で一度きりだ。そこでする様々な経験は生涯大事になる」

祖父の言葉が頭に響き続ける。

「だから、精一杯楽しめよ」

「おじいちゃん!!」

どうやら夢で昔を思い出しているようだ。

「ワシは…ワシは…」

「おじいちゃん!!」

布団の中のおじいちゃんは俺の手を握る。

「お前の高校入学式を見たかった…」

「おじいちゃん!!」

「すまん海斗…ワシは…ハワイにバカンスに行ってくるからのう
!!」

「おじいちゃんひどっ!!」

そうそう…俺のおじいちゃんは確かそう言ってバカンスに行って…
うわああ!! 何てひどいじいちゃんだ!!
俺は夢の中である意味泣きたくなった。

「はあ…」

「どうしたんだいため息なんか吐いて」

教室で憂鬱な気分に入っていると、もっと憂鬱になりそうな奴が話しかけてきた。

まあ堀井だよ。言わなくても分かるべ？

「いや…」

「そうかそうか。確かに心配だね。この学校じゃ君は落ちこぼれだもんね」

「…」

何か落ちこぼれの方がまだマシな気がする。

だって俺は…あんな部活の部長となり、さらに新入部員も探さなきゃいけないんだ！！

さすがに堀井は除外。多分奈緒美先輩に殺される。主に俺が。

「ま、分からないことがあったら僕に訊けばいいさ。ハッハッハ」

堀井は僕に背を向けて廊下に出た。

…あいつは学校になじめるのか？

「おーい。台場君」

「ん？」

そのとき、名前も知らないクラスメートの男子が俺を呼んだ。

何の用なんだ？

「何か女子の先輩が呼んでるよ」

「げ！」

廊下にいたのはアクアさんだった。これは早く行かなければまずいことになりかねない。

「ど、どうしたんですか?!」

「新入部員、勧誘してる？」

「し、してますとも!!」

俺は焦りながらもそう答える。この人も何をしでかすか分かったものじゃない。

「私も探してあげるわ。いくらなんでも無茶だと思うからね」

「あ、ありがとうございます!!」

ああ…実はこの人っていい人なんだなあ…とか、思ってしまった。

「水臭いこと言わないで。下着を共有した仲でしょ？」

「…」

俺の幻想が一発で崩れたのは言うまでも無い。

「何か勧誘しにくいわね」

「今気がついたんですか?!」

数分後呟いたアクアさんの言葉に俺は驚く。
愛研究部に入りませんか? って何か宗教勧誘みたいだし!

「こうなったら色仕掛けしかないかしら?」

「え?!」

アクアさんは俺に胸の谷間を見せる。

「ダメですよ! 女の子が!」

「嫉妬してるの？」

「そ、そういうわけじゃなくて…」

「安心して。色仕掛けはあなたにしか使わないわ」

「あ、それはそれでどうかと…」

「フフフ。お持ち帰りしたいくらいのかわいさね」

「ど、どうも…」

それって褒めているのか？

「あ、危ないです～～～!!」

「ん？」

そんなとき、後ろから声が聞こえた。

「キャアアア!どいてくださーい!!」

「うおっ!」

彼女は何故かすごい勢いで滑ってこっちに向かってきた。
何だこの無理な設定は?!日和じゃないんだぞ?!

そんなことをしている間に彼女と俺の差は一気に詰まり…

ドン!!

「おわあ!!」

「ぎゃあ!」

思いっきりぶつかってしまった。

「イテテテテ…」

俺は仰向けに倒れていた。

「大丈夫…ってえ?!」

目の前に見えるのは純白のパンツ。

「痛いです」

「あ、ああああああの…」

俺はテンパる。こういうとき、どんな顔をすれば良いか分からないの…。笑えば…よくねえよ!!

「ああ!!」

彼女は俺の胸元に尻餅をついている自分に気がついた。

「パ、パンツ見ちゃったですか?!!」

「い、いや…」

目の前が真っ白!?!わざとじゃないんだ! (後書き)

今まで一日二話更新だったのを一日一話を二作更新にしたのですが
…実質変わらないじゃん!!

パンツ丁だよー!もうやめようぜー! (前書き)

眠い…

パンツ一丁だよ！もうやめようぜ？！

残酷な天使のように俺は神話になれるかもしれない。

意味不明ですいません。つまり俺は今現実逃避をしている。

エヘヘとか笑いながら俺と腕を組んでいる名前も知らない女子生徒。

そして何故か鋭いアクアさんの視線。奈緒美先輩のニヤニヤ笑い。

そして聖子先輩は何か多少怒っている。

この部室内の状況：あまりよろしくない。

「彼女が新入部員？」

幾分か静寂が続いていたが、とうとう奈緒美先輩がそれを破った。とても彼女らしい。

「希望だそうです」

「エヘヘヘ」

「…」

しかし彼女は頷きもせず、ただ俺の右腕にずっと掴まっていた。

「海斗。彼女の名前は？」

「え…」

よく考えれば俺は彼女の名前を知らなかった。何でだよ？！

「えーと…君、名前は？」

「私はね、町田^{まちだ}歩^{あゆみ}って言うんですよ。歩って呼んでくださいです」

「だ、そうです」

俺の方しか見ない彼女に、アクアさんは特に怒り心頭だ。

「えーと…あの…そろそろ離れてくれないかな…？」

「だって私達は将来を誓い合った仲でしょ？」

「いやいや誓い「合って」はいない!!」

聖子先輩の視線が厳しくなる。

「私も弟君の腕を掴むの…！」

「うわぁ！」

そして彼女は俺の左腕にしがみついた。

「モテモテね」

奈緒美先輩は他人事のようにニヤニヤしている。

「それで！あなたはどうして入部するの?!」

「エへへへ。旦那様の腕暖かいです」

「聞きなさいよ!!」

アクアさんが珍しくかなり怒っているぞ。これはあれか、後輩の舐めた態度のせいかな。

「えーと、歩ちゃん!!」

「え…」

俺は歩ちゃんを真剣な目で見る。

「そんなに見つめられると…感じちゃう…」

「だああ!! そうじゃない!! 周りに先輩がいるんだからきちん
と挨拶しなきゃダメだろ?」

「あれあれ?! 女性の方たちがこんなにです」

「気がつかなかったんかい!」

彼女は重度の患者だ。病院を手配した方がいいのでは?

「それで、君はアイケンがどんな部活か知ってるの?」

ちなみに俺はよく分かりません。

「いいえ。でも入ります! 旦那様と…麗しいお姉様たちの楽園です
から!!」

そう言って彼女は俺の手を離れて他の三人の女子に抱きついた。
…こいつ、百合でもあるのか…キャラ設定が濃すぎるぞみんな…

「ウフフ…可愛い子猫ちゃん…私が調教してあげるから、ベッドに行かない？」

「はいです…」

奈緒美先輩の誘惑にうつとりして歩ちゃんは付いていってしまった。
もうこの部活ダメだ…

「それで…何かSMプレイを行なっている二人は放っておくとして…」

「これで何とかアイケン存続だね…！」

「…」

だからアイケンって何だろうね…

「じゃあ3人になったことだし、やっちゃおう？」

「そうね」

二人が俺をジッと見る。心なしか目がエロい気がする。
一体何をするんでしょうか、この二人は…

「じゃあそうね、まずは彼の身体検査ね」

「はい?!」

「特にパンツの中は要チェックよ! なぜなら拳銃を隠し持ってるかも!」

いや、鼻息が荒いんで、説得力がないですよ。

「まずは捕獲!!」

「ええ?!」

俺は聖子先輩が装備していた縄に囚われた。
というか装備してんじゃない!!

「さあまずは上半身を要チェック!!」

「ひい! これはもう犯罪レベルだぞ!!」

俺はジタバタするが、縄で縛られ、無駄だった。しかも上手い。
聖子先輩は重度の変態だ:

「さあ上半身を全て脱がしました!」

「うおおい! もう止めようぜ? な? な?」

そして彼女たちは俺の上半身に息を吹きかけ、舐め始める。

「うわああ!! 本当にやめないか?!」

「何言ってるのよ弟君。これから最後までするんだよ!」

「ええ?! 最後ってどこまでさあ?!」

「最後は最後よ」

「次はどうとう下半身ね」

二人は顔を真っ赤にし、さらに鼻息がさらに荒い。
何でこんな部活に俺が入っちゃったんだよ!!!

「必殺、ベルト裂き!」

「はあ?!」

アクアさんが指一本でベルトを外した。
何この神業?! セクハラ技にもほどがあるよ?!

「はい、弟君、脱ぎ脱ぎしましょうね?」

「うわああああ!!!」

俺はいつの間にかパンツ一丁にされてしまった。

「ま、マジでやめて…頼む…」

俺は最早半泣きだ。

「…分かったわ」

「アクアちゃん？」

聖子先輩が首をかしげる。つうかアンタは一番変態だろ。

「さすがにここまで嫌がられるとね…男だから喜ぶものだと思っていたのだけれど、違ったわね」

「そうかぁ！じゃあこれでまた実験成功だね！」

「はい？実験？」

アクアさんはパソコンに何かを打ち込んでいた。

「そうだよ弟君。男の子はどういうことすれば喜ぶのかな？っていう実験」

「はい？」

「だから、アイケンなんじゃない！愛を研究してるんだから！」

「それがアイケン…じゃあ俺はサンプルってことですか…？」

俺は拳を震わせた。

「まあ端的に言えばそうかもね」

「ふ、ふざけんな…！！！！」

俺は頭を抱えて理解した。

俺が強引に入部させられた訳ってこういうことかよ…

「まあ裏を返せばあなたも私達を好きにしていってことよ」

「ええ?!」

この部活は愛研究部…だが実際は…公然セクハラ部。

パンツ一丁だよー!もうやめようぜー! (後書き)

眠い…

やばい！18禁になるからやめて！（前書き）

またもや釣りタイトル…

やばい！18禁になるからやめて！

「アイケン活動第2回、人の死」

黒板にそんなことを奈緒美先輩が書いた。
何だか随分と重い議題だな…

「今日は人の死について研究しようと思う」

「随分真面目ですね」

俺はこの議題に驚いた。

まさかこんな真面目なことを討論することになるとは夢にも思わなかった。

「時に海斗、キミは人の死を見たことはあるか？」

「ええまあ…」

ウチの祖母は3年前に亡くなった。結構な早逝だ、

「例えばもしキミが死んだでしょう」

「うわあ！ヒドイ例えだ！」

「死んだ後、お前には何かが残されている」

「え、それって思い出とかそういう…」

「何を言っている？精子に決まってるだろ？それともお前は去勢してあるのか？」

「結局下ネタかよ！しかも去勢してない！！」

「では確かめないと弟君」

「そうですよ旦那様！」

聖子先輩と歩ちゃんが俺に近づいてくる。
すごいニヤニヤした顔で。

「と、とにかく俺のその…あれが残されたから何だっていうんです？！」

うう…俺って結構恥ずかしがりやなんだよな…
未だにオッパイを口に出来ない…

「いやいやキミの生殖器を確認するのが先だよ。もしかして実は女でしたら、みたいな何とか高校ホスト部的な展開があるかもしれん」

「無いですよ！しかもそんな展開だったらこの小説にガールズラブを追加しなくちゃいけないですよ！！」

「追加は嫌か？」

「そういう問題じゃない！」

何で俺達は、自分達の行動を小説の登場人物の行動として考えているのかは謎だな。

「じゃあ何だ？ハーレムキーワードが消えてしまうからか？」

「いや、それはあんまり関係が…」

何で俺達はこちらも自分達を小説の登場人物として会話してるんだ？！

「まあでもハーレムが過ぎるのは良くない。ネット上に某アニメの最低主人公のように海斗氏ねとか書かれるかもしれんしな」

「話が脱線しすぎというか飛躍しすぎです！」

「じゃあ最初に戻そう。人の死を見たことはあるか？」

「そこまで戻すのかよ！そこはもういいよ！」

「つまりキミは下ネタの話題に戻したいのだね？」

「ああ！しまった！策士だ！この人策士だ！」

俺は頭を抱える。この人たちと話すにつれて自分が壊れていく気がする。

「例えばキミが今、突然心臓麻痺で死ぬとする」

「ええ？！俺はデ○ノートで殺されるの？！」

「そうそう」

「いや、俺は犯罪者じゃないし！」

「で…」

「うわぁ！流された！」

「その場合、キミは誰とも子作りをしていない。するとキミの子孫が未来に残らないじゃないか」

「…そうですね」

またこの人は何を企んでいるのやら…

俺は奈緒美先輩をジト目で見る。

「残念だが私はSだからそんな視線でも興奮しないぞ。歩ちゃんに向けるんだ」

「ジト」

俺は視線を歩ちゃんに移した。

「あぁん！そんな目で見ないでー！！」

何だこの変態集団は。

しかも歩ちゃんはまた俺に擦り寄ってくる。

「それでだ」

奈緒美先輩が話を再開する。

「キミは今すぐ精子を提供するべきだ」

「何ですかそれ！最早人の死とかどうかじゃなくて単なる下ネタじゃねーか！！」

「アイケンは下ネタが無ければ連載できないぞ！！」

「うおっ！そこを突かれると痛い！痛すぎる！」

「それで、採取方法はどーするの？」

アクアさんが奈緒美さんに尋ねる。

そのときのアクアさんの顔が興奮しているのがやけに印象深い。

「そうだな…強制的に…」

「うわぁ！！それって逆レイプじゃねーか！！」

「何を言ってるんだ？強制的にタマを切り出すに決まってるだろう？」

「そっちだったら逆レイプの方がマシです！！」

「へえ…弟君ってそっちが好みなんだ」

涎をじゅるりと垂らしそうな聖子さんが俺に近づいてくる。
もうこの人たちはみんなダメだ。早く何とかしないと…

「と、とにかく、ここは校内なんですよ！」

「残念だな海斗。今私達がいる場所が校内とはどこにも書いてない」

「な、なんだってー!?!」

確かに、この話にはどこにも書いていなかった。

「さて、どう頂く?」

「ふ…ふふふふ…」

「?」

俺の不敵な笑いに4人が哑然と俺を見る。

「甘いな。甘いぞ!もし18禁展開を小説を読もうに掲載したら、ペナルティとして作者IDが消されてしまう可能性があるのだよ!」

俺は最終兵器を4人にぶつけた。

残念だが、そうなればアイケンはもう連載できない。

「作者の都合など知ったことか。それにこの話からアイケンをノクターンノベルズに掲載すればよい!」

「そ、その手があったか!?!」

「では早速…」

「うおおおおお!?!」

俺の叫びと同時に生活指導の先生がこの部屋に入ってきたのは同時だった。

怒られたのはもちろん半裸の俺。

…ひでえ…ひでえよう…

俺は入学早々、自宅謹慎処分を食らったのであった。

やばい！18禁になるからやめて！（後書き）

このオチは既出ですね。

夜はお姉ちゃんにお任せです！(前書き)

新キャラが登場します。

題名的に分かると思いますが。

夜はお姉ちゃんにお任せです！

「やっほ」

俺は家で姉ちゃんからの電話に対応していた。ちなみに名前は台場^{だいば}真紀^{まき}である。

そしてこの姉ちゃんはかなりのブラコンで、俺や弟をかなり溺愛している。

ただ、この姉には：

「どうしたんだ？」

「これからカイくんちに行くからね」

ちなみにカイくんというのは姉ちゃんが俺を呼ぶときの呼称。海斗だからカイくん。…まあ一応合っているような。

「え？いつ？」

ピンポン♪

「まさか?!」

「もう家の前だよ」

「早すぎだろ!!」

俺はドタバタと玄関に向かう。

一応マンションだから下の人に迷惑かかるかもしれないけど、まあ

いいや。

「おはよう！」

「あ、ああ…随分早いね…」

まだ日曜日の早朝である。

今日はアイケンの活動が無いため、ゆっくり出来そうだったのに…

「そりゃそうだよ！始発を1時間も前に走らせたんだから！」

「何強制的に運転させてんだよ！」

「運転させたんじゃないくて、私が運転したんだよ！」

「うわぁ！さすがは姉ちゃん！考えることが逸脱してるぜ！」

この人にも常識は通用しないんだな。

「そう？嬉しいな。カイくんがいなくなってからもう夜が寂しくて寂しくて…」

「弟がいるだろ！」

「何言ってるの？陸斗はまだ精通が始まってない小学生だよ？射精してくれないじゃない」

「おわぁ！何言ってるんだ姉ちゃん！」

すいません。うちの姉ちゃんは変態です。

「何って…射精について…」

「分かった分かった！それで姉ちゃんは何しに来たのかな？」

俺は息が絶え絶えになりながら言う。

「ちょっと。息切らすの早いよ。これから私と繋がるのに…」

「また俺を犯しに来たのかアンタは……！！」

ちなみに俺と姉ちゃんは血が繋がってるくせにいろいろヤバイ関係です。

何とか行為までは至っていないものの、毎日のようにセクハラを仕掛けてくる。

しかも両親は見てみぬフリ。

「当然でしょ！」

「自慢するな！」

ああ…俺の休日が…というか姉ちゃんを何故俺は家に入れてしまった…？

しばらく会っていないからすっかり気を抜いてしまったか…

「じゃあ…受験勉強のせいで夜な夜な一人エッチも出来なかったカイくんを、又かせてあげたのは誰？」

「う…」

去年は受験のストレスでつい…

うう…おかげで姉ちゃんに弱みを握られてしまった。

おかげで、実の姉を性欲の捌け口にする鬼畜弟というレッテルが貼られそうになったことが何度もあった。

「と、いうことで今日もよろしく。じゃあまずズボンを脱ぎ脱ぎして…」

ガチャッ

「おわっ!!」

そのとき、突然ウチのドアが開けられた。
こんなときに一体誰ですか?!

「警察だ」

「警察?!」

そして警察は姉ちゃんに手錠をかけた。

「勝手に電車を走らせた罪で逮捕する。台場真紀」

「あー。ばれちゃった」

姉ちゃんはテヘッといった感じで笑っていた。
何で笑えるんだ?!この状況で?!

「台場海斗…」

「あ、はい…」

ガチャッ

「ええ?!」

そして俺の手首にも手錠がかけられた。
何だこれは?! 俺は何もしていないぞ?!

「姉に対する強制わいせつ罪で現行犯逮捕だ」

「何でだ〜〜〜〜〜!!」

俺と姉ちゃんはそのままだとパトカーで警察に連行された。

「俺は何もしてないんだ〜〜〜〜〜!!」

拘置所内で俺の声が響き渡ったのだった…

「お兄ちゃんの鬼畜」

「妹よ…誤解である」

後日、妹からのお怒りの電話が俺に届いた。

あ、一応誤解が解けたので、俺は出所してますよ。

夜はお姉ちゃんにお任せです！（後書き）

世の中の人間ってみんなエロイです…

そんな風に感じてくれたら嬉しいです。

小道具を使ってやりましょう(前書き)

どんどん過激になっていく話…

危険だったら言ってください。

作者はどこまでがR15か分かりませんので…

小道具を使ってやりましょう

今日は部活紹介の日である。

最初に言っておく。俺は憂鬱だ。この小説の題名を台場カイトの憂鬱に変えてもいいくらいに憂鬱だ。

「やあ台場君。キミは部活、どこかに入るのかい？」

そんなとき、俺をもっと憂鬱にする存在が登場した。
もう言わなくてもいいよね？

「まあどこかには…」

言えない…！

俺、愛研究部に入ってますなんて言えない！

「へえ…キミは暇なんだね。僕は塾と家庭教師と勉強で忙しいからね。キミと違って」

「ハ、ハハハハ…」

さて、俺は愛想笑いが上手くできているでしょうか？

「まあキミは暇でいいね。本当に羨ましいよ」

いや、多分俺の方が寝る間がないと思われます。
それに、ストレスもあなたより溜まりますよ？

「ま、部活はじっくりと考えてくれたまえ」

そう言って奴はこの世を…ではなくこの教室から去った。
はあ…憂鬱ですよ。

だって部活紹介って…俺がやるんじゃない？みたいな気が…

「部活紹介？ そんなものに出るわけないだろう？」

「で、ですよ〜」

何と、奈緒美先輩の口からそんな言葉が出た。
つまり、俺はそんなことをしなくていいということだ。
助かった！助かったぞ！

「だが：その時間にはアイケンに来てもらう」

「何ですか？」

「活動だ。フッフ：」

「は、はあ：」

奈緒美先輩の最後の不敵な笑いが非常に気になった。

俺は部活動紹介の時間、アイケンを訪れた。

先生の目を盗むのは非常に大変であった。

さて、これから何を始めるんだろう…

「さて、アクアたん。テレビをつけてくれたまえ」

「はい」

アクアさんは奈緒美先輩に言われたとおりテレビをつけた。

「さあ我々の部活動紹介を始めるとしよう」

「はい？」

俺は首を捻る。歩ちゃんも捻っているけど。

「さて、部活動紹介が始まったぞ」

テレビには現在行なわれている、部活動紹介が映っていた。
一体この人たちは何をする気だろうか？

「THE妄想タイムをスタートしよう。なかなかシンプルなシリーズだろう？」

「THEをつけただけでしょうが！」

そうして部活動紹介が始まった。
最初は野球部だ。

「なあ聖子」

奈緒美先輩が聖子先輩に質問する。

「バッドを入れたことはあるか？」

「さすがにバッドは無理だよ。だって膜が破れちゃうし。でも口の中に含んで舌使いの練習はしたなあ…でも金属アレルギーになっちゃったから今はやってない」

「そうか」

「…」

この人たちが何の会話をしているのか、俺にはさっぱり分からないぞー。

そして次はバスケットボール部だ。

「聖子。シュートされるんだったら中と外、どっちがいい？」

「私はどっちでもいいよ。中でも外でも私は満足だよ。ね、弟君？」

「俺の名前を意味深に呼ばないでください」

俺は聖子先輩から少し距離を取った。

すると隣のアクアさんと接触してしまった。

「まったく…海斗ったら…甘えたいならそういえばいいのに」

アクアさんが俺の頭を撫で始める。

「私も中と外、どちらでもいいわ。海斗なら」

「ヒィィ…」

俺はアクアさんとも距離を取る。

そして次はテニス部だ。

「なあ聖子。テニスラケットでオ〇〇ーするか？」

「そうだねえ…他人のでするとゾクゾクするよね」

「そうか。私はテニスラケットよりは手を選ぶな」

「もう…奈緒美ちゃんは手の使い方が上手なんだからしょうがないよ…」

「そうだなお前を30秒でイカせることが出来るな」

「それはまた今度してね」

「そうだな」

俺は耳栓が欲しくなった。

この状況を羨ましいと思う人はいるのでしょうか？

俺はもう帰りたいです。

そしていつの間にか文化部の紹介に移った。
まずは吹奏楽部だ。

「聖子、一番吸われたいところは？」

「普通は乳首だね。でも下もイイと思うよ。あ、でも意外と首筋もいいかも。弟君、今度首筋吸ってね？」

「返事は出来ませんね」

聖子先輩がキラキラした目で俺を見る。

俺はもちろん無視した。

そして次は化学部が映されている。

「そうだ！アクアちゃんって今、媚薬持ってる？」

聖子先輩がアクアさんにとんでもないことを訊いた。

「バッグの中にある。今使うの？」

「うーん…部室汚すのはちょっとマズイかな？でもちょっと今は我慢が出来ないかもしれないのよね」

聖子先輩が俺の方を見る。

何か変な雰囲気になっていないか？

「お、俺は用事を思い出しました！」

「待って」

「ヒィ!!」

俺は聖子先輩に腕を掴まれた。

俺は初めて聖子先輩を怖いと思った。

「首筋吸うだけでいいから…お願い…」

「うわあああ!!」

俺は急いで立ち上がって部屋を出ていった。

さすがにここがもうリミットブレイクだろう。

「おいお前!」

「うわ!」

廊下で突然背後から大声が聞こえた。

俺が後ろを振り向くと、生活指導の先生が俺を睨んで立っていた。
まさか…これってアレですか?

「今お前は部活動紹介を見に行っているはずなのだが…」

「ト、トイレですよ!!」

「残念だが、こっちの方向にトイレは無い!」

「な、なんだってー!!」

俺は大げさに驚いた。

「さ、先生とじっくり話し合おうな」

「うわああああ…」

実は首筋を吸ったほうがよかったというオチでした、ハイ。
じゃあ次も見えてね、ジャンケンポン！

ひどいオチだ…

小道具を使ってやりましょう（後書き）

とりあえず言っておきますが、作者は変態じゃありませんよ？
本当ですよ？

手を繋いで、デートして、キスをして、それから…（前書き）

主人公がハーレムすぎる…

手を繋いで、デートして、キスをして、それから…

「アイケン活動第3回、多数派と少数派」

まーた何かまでもそんな題名をつけてるんですけどー。

俺はアイケン部室の黒板の文字を見てそんなことを思った。

「さて、海斗にいきなり問題だ」

奈緒美先輩が俺を見て言った。

「多数派と少数派、強いのはどっち？」

「えー…」

これは下ネタでは無いのか…？

「適当に…多数派…いや、徳川家康的に少数派ですかね…」

「まあ答えはどちらでもない。ただ、私も少数派の方が強いと思う」

「え？」

俺は奈緒美先輩と真面目な会話…というかチョイ哲学チックな会話をしているのに驚いた。

「かの有名な哲学者、ミッシェル・フーコーがそう言っていたからな！」

「何でそれだけで少数派支持?!」

「だって凄い人じゃん」

「だからってそれだけで自分の答えを決めるのは…」

「ラ○アーゲームでも少数決ゲームでは少数派の方が強かったぞ」

「それはそういうゲームだからじゃないですか!この作品とはなんら関係ありません!」

「むむむ。私に反論するなんて万死に値するような行為だな」

「…」

この人は単に自分の意見を人に受け入れさせたいだけじゃん。

「弟君」

「なんですか。聖子先輩」

俺はもう弟君と呼ばれることにした。

だっていくら言ってもこの人たちは聞く耳持たないし。

「奈緒美ちゃんの言いたいことが分からないの?」

「はい?」

奈緒美先輩の言いたいこと…?

「さすがの鈍さね。それがラブコメ主人公の特徴よ。まあ誇りを持ちなさい」

「あんまり持てないんですが」

「そうかしら？モテてはいるわよ」

「？」

アクアさんの妙な物言いが俺には分からない。

「それで奈緒美先輩の言いたいことって…」

「旦那様は多数派ですか？少数派ですか？そういうことです」

「え…話が読めない…けど、この流れからすると、少数派ですかね…」

「ほれ見ろ聖子！やっぱり少数派じゃないか！」

「うーん…だから私っていつも男に逃げられちゃうのかな」

聖子先輩は服を脱ぎながらそんなことを言った。

「って脱ぐな！」

「それで、海斗の言いたいことをまとめるとこうなる。俺は女4人同時に性交渉するよりは1対1の性交渉を求めている、だな」

「うわぁ！すっげえ勘違いだよ！しかも結局下ネタかよ！」

「あれ？勘違いということは、複数の女生徒同時に性交渉をしたいと…」

「うわぁ！何かもう嫌だ！俺がしゃべると揚げ足取られる……！」

「足だけでなく、ベルトも取ってあげるわ」

「いや、いいです。…って言った傍からベルトを切るな！しかも一瞬で切るな！」

アクアさんの神業により、俺のベルトは真っ二つになる。

「私の前ではベルトなど無意味よ」

「変態技ばかり鍛えてるんじゃない！」

「さて、次は何の技がいい？」

「いや、もう技とかいらないから！」

どうせ変態技しか無さそうだし。

「そうね元〇玉とかどうかしら？」

「ひどい！今あなた、「たま」の前に「ん」を言いましたね？！某バトル漫画の必殺技を汚さないでくださいよ！」

「じゃああなたの下半身は元気かしら？」

「俺は用事を思い出しました」

「旦那様、用事は今無くなりましたよ」

「何でだよ?! 早いぞ無くなるの!! しかも無くなってねえだろ!」

「ですが新しい用事がありますよ、旦那様。私との子作りです。あなた、何人子供欲しい?」

「うわぁ! 最後のセリフに若干ときめいちまった俺!! すんげえ自分が男だということを感じましたよ!!」

「じゃあ何で私達との性交渉を断るの?」

聖子先輩が下着姿で俺に迫ってきた。

「いや、そのですね…そういうことは、まず手を繋いで、デートして、キスをして、それから…」

「うっわ…今どき珍しいプラトニックな男…」

何か奈緒美先輩が俺の発言に若干引いている。

「悪いですか!! 俺はとっても純な子なんです!」

「いや、純なら自分で純って言わないですよ、旦那様」

「そ、そんなことはどうでもいいんだ…!!」

俺は大声で喚きたてた。

「フフフ。ならば、手を繋いで、デートをして、キスをすれば良い訳ね？」

「ぐあっ！また揚げ足を取られた！！」

アクアさんが怪しく微笑んでくる。

「じゃあ早速だけど…海斗、明日デートしましょ」

「あ！アクアさんだけズルイです！私もお願いします！！！！！！旦那様！！！！！！」

「そうだよ！弟君！ズルイズルイ！」

「じゃあこの5人で明日はデートだな！」

最後に奈緒美先輩が止めを刺したようにそんなことを言った。

「お、俺は…にげる！」

「にげられない！」

「何?!相手のほうが「すばやさ」が高かったのか?!」

「じゃあ今日は…」

みんなが俺のことを見る。

「性交渉がダメならヌードだな」

「うわーん!!」

結局俺がこの日、裸にされたかどうかは…神のみぞ知ること
で。

「海斗って結構なサイズだったな」

「うわぁ！何しゃべってるんですか!!」

手を繋いで、デートして、キスをして、それから…（後書き）

削除されませんように…

ローアングルから見よう！
(前書き)

連日更新は疲労します。
もう疲れたよ。

ローアングルから見よう！

学校がこんなに厭らしいところだとは思わなかった。

学校がこんなに疲れるところだとは思わなかった。

学校にこんなに変態がいるとは思わなかった。

学校にこんなに変人がいるとは思わなかった。

そして俺は今、モーレッツに後悔している！！

アイケン存続から1ヶ月経った。

俺は毎日のようにセクハラを受けている。

女の子に囲まれるのは嬉しいのだが、全員が変態だと意味合いが変わってくる。

というか全員変態はさすがに耐え切れない。

部室は常にアウェーであり、彼女たちにとってはホームである。部活辞めようとか、部活出たくないとか行動すると、後が怖い。

何故か知らないが、生徒会から強引に部費を徴収し、教師達を黙らせるこの部活。

だから今日はアイケンの秘密を俺は突き止めてみようと思う。

この部活にはきっと何かがあるに違いない。

「よし、やるぞ！」

「こんなところで私と交わろうだなんて、ケダモノね」

「うおおおい！！アクアさん！いつからそこにいましたか？！」

俺の隣にはいつの間にか、俺の下半身をジッと見ているアクアさんがいた。

つうかアンタはドコを見てんだよ。

「ずっといたわ。あなたがアイケンの秘密を突き止めよう、って考えているあたりから」

「全然ずつとじゃないじゃん！というか何で心を読んでるんですか！」

「貴方の考えていることは分かるわ。長年連れ添った仲でしょ？」

「俺達は熟年夫婦じゃねえよ！ていうかあなたと連れ添った経験なんてありませんよ！」

「あの夜のことを忘れてしまったなんてひどい人…」

「事実を曲げる方がひどいです！」

「ならばこれから事実になれば問題ないわ」

「何するんですか！」

「具体的に早速ここで交わって、その後に私はあなたにお持ち帰り。そして私は強制的に結婚させられ…」

「何か俺が悪者になってねえか?! おい!!」

「それはともかく、あなたは何を考えているの？」

「ともかくって…」

何故か知らないが流されてしまった。

「アイケンの秘密を探ろうだなんて…ハッキリ言って頭がおかしいわ」

「おかしでもあやしでもぞなむやか連体こそ已然でも何でも言ってくれ。俺は何とかその秘密を突き止めて、部活内の立場を…」

「それを私に白状するあなたの愚かさ」

「うわあ! 日本一！」

「ともかく、面白そうだから私も協力してあげる」

アクアさんがニツコリと笑いながらそんなことを言った。

「な、なんで？」

「報酬は体で。主に下半身」

「せめて上半身で」

「仕方ないわね…」

ていうか俺は今、上半身を捧げるって言ったのか？
どっちにしろダメじゃねえか！！

「じゃあまずどうするわけ？何を知りたいの？スリーサイズ？上から…」

「いや、それはいいです」

「せっかく読者のために…」

「読者？」

「いえ、それで何が知りたいの？」

「アイケンは何で廃部にされないのか、とか」

「その一つがかなり重要ね」

「はい？」

アクアさんが微妙に困っていた。

「それは中々難しいわね…顧問の先生にでも訊いてみる？」

「結構です」

あの顧問は俺のファーストキスを奪いやがった。

俺はあの人にはあまり会いたくない。

「じゃあこうなったら生徒会に隠しカメラでも仕掛けてみようかしら」

「おいおい…」

アクアさんなら本当にやりかねない。

「じゃあ一晩でやり遂げるわ」

「あなたはジョオンニですか」

アクアさんはそう言って本当に一晩で隠しカメラを仕掛けたいらしい。

翌日、俺はアクアさんと一緒にビデオを見ていた。
もちろん生徒会室に仕掛けたカメラの映像だ。

「…すみません。一ついいですか？」

「何？」

「どうしてカメラがローアングルに設置されてるんですか？！」

「どうせなら見たいでしょ？」

「あなたの頭の中が親父過ぎます！！」

「全国の親父に失礼よ。手始めに山田さんに謝りなさい」

「誰だよ！山田って誰だよ？！」

「ほらほら、パンツが見えるわよ」

「うっ…」

俺はついモニターを凝視してしまう。

何で俺はこうも男なんだ…やはりこれが俺の性なのか?!

「大きくなってきたわね」

さわさわ

「ってドコ触ってるんですか?!」

「固くなってきたわ」

「さ、触らないでくださいよ!!」

ジー…

「開けないでくださいよ!!」

さわさわ

「や、やめてください!」

「ごめんなさい。一度だけ」

「はい?!一度でも良くないですよ!!」

「…じゃあいきましょう」

「それは二重の意味ですか?!」

この計画自体がアクアさんの罠だと気づいた俺であった。

「随分と溜まっていたわね」

「もうお嫁にいけない…」

翌朝、落ち込む俺の姿が部室で発見されたそうなの…

ローアングルから見よう！（後書き）

疲れたよ（＊、Ｑ、＊） Ⅱ 3

4人で海斗とやってみよう！(前書き)

体が何かに蝕まれていく…

うぐああああ！

何やコレ。

4人で海斗とやってみよう!

GWに突入した。

俺は学校に行かなくて済むのだ。

こんなに嬉しいことはない…!!

だってアイケンに顔を出さなくて済むのだから!!

ピンポーン♪

「…」

俺は今、寒気がした。気のせいかな?

俺は今、冷や汗を掻いた。気のせいかな?

俺は今、嫌な予感がした。気のせいかな?

ピンポーン♪

「…」

さすがに出ないとまずいか…?

「はい!」

「宅急便です」

宅急便?何でいきなり?

何か頼んだかな…?

俺は半信半疑に扉を開けた。

「はい」

俺の前にいたのはアクアさんだった。

「元気にしてた？ 弟君？」

「聖子先輩まで?!」

「私もいるぞ」

奈緒美先輩も存在を表した。

「Mキャラもいますよ」

「自分で言うな!!」

歩ちゃんもいた。

何で俺はドアの向こうを確認せずに開けてしまったんだ？

今や扉はしっかりと奈緒美先輩に固定され、締められなくなっていた。

「あの…何か用ですか？」

「「「特に」」」

「じゃあ帰ってください!!」

「「「嫌」」」

「アンタらの息合いですよ!!」

どうして休みの日もアイケンの人たちと顔を合わせなければいけないのか…

「よし、まずは家に入れろ」

「へいへい…」

断ったらとんでもないことになりそうだなので、仕方なく俺は4人を家に上げた。

「ほう。一人暮らしか」

「まあ」

「じゃあ女の子と夜中にズコバコしても大丈夫だねっ!!」

「聖子先輩!そういう恥ずかしいことを大声で言わないでください!!」

この人はもう…羞恥心の欠片もない。

「で、奈緒美様。どうするんですか」

歩ちゃんが媚びたような声で言う。

つうか奈緒美様ですか…

「まずはみんなでアダルトビデオ鑑賞会だ」

「却下です!」

「あ、一人で見たいのか？ならばGW終わったら返してくれよ？」

「そういうことじゃないです！！」

「あ、弟君のベッドの下から何か出てきたよー！」

「うわぁ！！」

聖子先輩が嬉しそうに本を見ていた。

「「全てを縛って、ご主人様」、「愛くるしい妹とのドキドキ生活」、
「淫乱教師、あなたに教えてア・ゲ・ル」…本当に好きね」

「うわぁ！！読み上げるな読み上げるな！」

「「ド○ゴンボール大全」、「兄と妹のBROTHERHOOD」、
「HUNTER×HUNTER」…ちゃんとしたものも読むんじゃない」

「何かおかしなものも混じっていたようですが」

「気にしないで」

アクアさんと聖子先輩はベッドの下に夢中のようにだ。
何か弄られすぎたせいかな、耐性が出来ているようだぞ。

「ああ！だんな様の枕！お持ち帰りしたーい！！」

「…」

ベッドの上では歩ちゃんがゴロゴロしながら俺の枕を抱いていた。
何だこの光景は。

「さて、ゴミ箱の中でも漁るとしうか」

「何しに来てるんですか!!」

やってることがもうメチャクチャ。

というか普通の人間だったら耐えられないことだと思う。
それに耐えてる俺って…

「ん? ゴミ箱がイカ臭くないぞ。まさか…お前はイン…」

「失礼なことを言わないでください!!」

「ん? まだ私は何も言ってないぞ?」

「し、しまった…」

俺は冷や汗を再び掻いたようだ。

「さて、何を想像したのかな?」

「インザライフです! インザライフです!!」

「どこらへんが失礼なんだ?」

「すみません。見逃してください」

俺は土下座した。

奈緒美先輩はそれを満足そうに見た。

「舐めなさい」

「へ？」

いきなり奈緒美先輩は俺に足を差し出してきた。

「舐めれば許してア・ゲ・ル」

「え…あ…その…」

これってやるべきなのか？

い、いや、落ち着いて考えてみる。

これをしてしまったら何か大事なものをなくしてしまうかもしれない。

「私が舐めますー！！」

「おう。そうか」

そんなとき、歩ちゃんが嬉々として奈緒美先輩の足にしがみついた。

「ご奉仕させてください」

「うむ」

歩ちゃんが一心不乱に奈緒美先輩の足を舐め始めた。

…これはエロイ…エロすぎるがな！

俺は顔をそっぽに向けて別のことに集中することにした。
後ろからピチャツとかクチュツとかいやらしい音が聞こえる。
心頭滅却だ海斗！お前はやれば出来るんだ！！
何とかして考えないようにしなければ。

「弟君も大変だね」

「はい」

俺は適当に返事した。

「でも結構嬉しいでしょ？」

「はい」

「弟君もエッチな気分になった？」

「はい」

「じゃあ私が弟君を気持ちよくさせたい」

「はい」

「じゃあ触るよ」

「はい…って何触ってんですか！！」

俺が急いで目を開けてみた光景は、下半身全裸の俺だった。
集中しすぎた…

その後、海斗がどうなったのか知る者は誰もいなかった：

「はい、海斗はあのまま…」

「アクアさん！余計なことはいいいから！！」

4人で海斗とやってみよう！（後書き）

レッツ妄想タイム！！

お姉ちゃんが何でもしてあげます！（前書き）

妄想の果てに生まれたエロ姉。

それが台場真紀なのである。

お姉ちゃんが何でもしてあげます！

プルルル…♪

G W 最終日、早朝：午前3時に家から電話が掛かってきた。
つうか迷惑です。こんな時間に電話は迷惑です。

「もしもし。あら海斗」

「何で電話に出てねえのに声が出てんだよ！しかもアンタがかけた
んだろ！母さん！」

声の主は母さんだ。

特徴として、勝手に電話を繋げることが出来る能力を持つ。

何その能力…いらねえな…

まだゴミを木に変える能力や、手ぬぐいを鉄に変えたりする方がS
F 的には面白い。

つうかこれはSFじゃないか…

「ねえ海斗、あまり言いたくないんだけどね…」

「え…」

何を言うんだ？このお方は。

「真紀がそっちに向かったかもしれないの」

「さ、今日はホテルでも借りるか」

俺は荷物をまとめて出て行く準備を整える。

「もう遅いかもしれないわ。真紀なもの」

「…まだ大丈夫だ」

ピンポン♪

「だああ！！この家族は夜中に人様の迷惑を考えないのか！！」

「うっせえぞ！！」

隣の部屋から怒鳴り声が聞こえた。

「…どうやら海斗にも受け継がれているようね」

「黙ってください」

俺は仕方なく玄関に向かった。

「あの、どなたですか？」

「あなたの夜のパートナーです！」

「…警察に捕まらなかったの？」

「脱獄してきた」

「…」

この姉貴は脱獄クイーンと呼ばれ、犯罪社会では有名な存在らしい。
一説にはヤクザと繋がりがあるとかないとか：

「それでえ…早く入れてくれる？」

「分かったよ」

「やった！今日は交わってくれるんだね！」

「そっちじゃない！」

俺達は一応小声で会話している。

「姉さんはモラルとかそういうの…考えるわけないか」

「当然でしょ」

「そうだよな…小学生の頃は万引き常習犯だったもんな…」

「そうそう。中学の頃は潮吹き常習犯だったもん」

「あえてそこには触れず、何しに來たんですか？」

俺は出来るだけ怖い目で姉を見た。

「ナニをしごきに」

「さ、お帰りはあちらでゝす」

「ちよっとお！ノッテよ少しは」

「ノッたらマジにするくせに」

「あ、分かる？」

「どれだけ長い付き合いだと思ってるんですか」

「そうだね。今の私達は70年間毎日、夜に頑張る熟年夫婦みたいだもんね！」

「せめて熟年夫婦だけでいいだろ！！しかも違うし！！」

この姉さんも下ネタばかりだな…嫌になりそうだぜ。

「それで…ん？」

「…別の女の匂いがする」

「?!」

姉さんは俺のベッドなどの匂いを必死に嗅いでいた。

「これはあれね…ギリギリ交わっていないけど、Hなことを少し女の子としちゃった匂いね」

「?!」

な、なんだこの人…エスパーか?!

「白状しなさい！何をしたのかな？」

「ひいひい…」

姉の手が俺の股間に触れる。

「つうかドサクサに紛れて何やってんだよ!」

「弟の生態観察。あ、日記もあるよ」

「消せ!それは失せさせろ!」

なんつーものを書いてるんだ。この姉は。

俺は荷物を持って外に出ようとする。

もうここにはいられない。いや、いたくない。

「どこに行くのかな?」

「コ、コンビにだよ」

「そんなに大きな荷物で?」

姉さんがさり気なく通せんぼをしている。

「大きくするのはここだけで充分だから」

姉さんが俺の股間にまた触れようとする。

「うわぁ!いい加減にしてよ!」

「なでなでしてあげる」

俺は姉さんに押し倒された。
マズイ…やられる…?!

「あー。熱いわね」

姉さんはそのとき、そう言いながら服を脱いで下着姿になった。

「ちよっ!!」

「優しくしてくれなきゃ。ダメよ」

「うおおおお!!」

ガッチャーン!

そのとき、うちの窓ガラスが割れた。

「な、なんだ?!」

そこに機動隊が入ってきたのだ。

「ええ?! 何で機動隊?!」

「台場真紀。飛行機を勝手に運転した罪で逮捕する」

「姉さんある意味すげえよ!!」

そうして姉さんの手首に手錠がかけられた。

「あー。ここまでか」

「台場海斗：姉を襲うとは何たる鬼畜な！お前も逮捕だ！」

「えええええええええええ？！」

俺はこの日、2度目の逮捕を味わった。
何でこんなことになるんだああああ：

「お兄ちゃんの制服プレイ好き」

「うおお！何故それを知ってる？！妹よ！！」

後日、妹からそんな電話が掛かってきた。
あ、誤解は解けてるんでもう出所しますよ。

お姉ちゃんが何でもしてあげます！（後書き）

さーてこのオチはどこかで見たぞ、とか言わないでくださいね。

食いつきすぎ!大きくするな! (前書き)

何か連日更新はもう限界と言う感じだな。
夏休み終わったし、ストックもほとんど無い。

食いつきすぎ！大きくするな！

眠いなあ…

俺は欠伸をした。

昨夜、たまたま見つけたオンラインゲームにはまってしまい、夜遅くまでやってしまったのだ。

これについては自業自得としか言いようがない。

やっぱりゲームは人間をダメにするのかね…

「おーい、海斗」

「ん？」

そんなとき、クラスメイトの一人が俺を呼んだ。

名前は…梁瀬くんだったか？

その梁瀬くんが雑誌を持って俺のところに来て来た。

「何かさ、ハイジャック犯、台場真紀容疑者って書いてあるんだけど…」

「ブッ！」

俺は咽そうになった。

「でさ…ってやっぱりこの人ってお前の親戚か？！」

「いやいや違うって！苗字が同じだからビックリしただけだよ」

俺は何とか誤魔化する。

絶対姉さんの弟だということはばらしたくない。恥ずかしすぎる。

「そっか。悪かったな。それにしてもこの人美人だよな」

…でも変態です。

「じゃ、それだけだから」

そう言って梁瀬くんは俺の近くから立ち去った。
迷惑極まりない話だ。

「やあ台場君」

そんな嫌な気分浸っているときに、さらに嫌な奴に遭遇した。
まあメンドイから紹介は省くぜ。

「もうすぐ中間テストだよ」

「?!」

「なのにそんなに眠いなんて…キミのことだから遊んでいたんだろ？」

く…凶星だけに言い返せない…。
だが、認めるのも癪だ。

「いや、昨日家でラップ音がしてさ」

「はい？君の家は幽霊屋敷か何かなのかい？」

こいつ：話に乗ってきやがった。
俺はこの話題を出したことに後悔した。

「いや、そうじゃないと思ったんだけどね…」

「ふーん。今度僕にもその音を聞かせてよ」

いいいいいい？！

しまったぜ：どうすればいいんだ：？！

「僕の知的好奇心が君の家に向けられたんだ。光栄だろう？」

「は、はあ…」

嘘なんてつくものじゃないな、うん。

人間は正直が一番だな、うん。

「さて、早速今夜だけど…」

「あああ！あのさ、実は家に親戚が泊まるんだよ」

「へえ。ラップ音の家に？」

「ま、まあな…」

「丁度いい！僕もお邪魔するよ！でもすぐに帰るから安心したまえ
！親戚との交流に水を差す無粋な真似はしないよ」

あなたが家に来る時点で無粋なんですよ。気づいてくれませんか？

「え、えーと…」

「じゃあ今夜9時ごろにお邪魔するからね！」

「お、おい…」

そう言って堀井は去っていった…

やばい…やばすぎる…

「ど、いうことがありまして…」

俺はアイケンの部室で部員達に相談をした。

「ウソはよくないぞ。ウソは」

奈緒美先輩が俺に責める視線を送ってくる。
全く以ってその通りなのでございますが。

「仕方ないよね？ 弟君？」

聖子先輩は俺の頭を撫でながら慰めてくれている。
この人って変態じゃなければいい人なんだけどな…

「旦那様の家に行くなんて羨ましいです」

歩ちゃんは少しずれた発言をしている。

この娘は当てにならないな。

「それで、具体的に私達にどうして欲しいの？」

アクアさんが真面目に俺の話を聞く。

何だかんだいってもこの人が一番真面目…変態だけどな。

「その堀井って奴を諦めさせたいんです」

「消せ」

「奈緒美先輩怖いです」

「ならば殺せ」

「何か第一話を思い出すよ?!」

聖子先輩が俺に耳打ちする。

「追い返したらご褒美に童貞を捧げてくれる？」

「あなたは不純な動機がないとダメなんすか！」

「え〜。やる気の問題だもん」

「そう言って服を脱いで四つんばいになるのはやめてください」

聖子先輩のいつもの行動は一応放っておこう。

「追い返すっていつでも…あ！力づくは？！」

歩ちゃんが外見とは合わないことを言う。

歩ちゃんが力づく発言…？

「どうやって？」

「いつも私を押し倒しているみたいに…」

「海斗！私に黙って何てことを…！」

アクアさんが歩ちゃんの発言によって俺に噛み付いた。

「違う！歩ちゃんの冗談だよ！」

「あのときの旦那様はもう…ん…あん！」

「ほほう。海斗、お前もやるな」

奈緒美先輩が興奮気味に言う。
何故興奮？

「え〜〜〜!! 弟君! 貞操は?! まさか…うわ〜〜〜〜ん!!」
「」

聖子先輩がマジ泣きしてしまった。
こんなことで思いっきり泣かなくても…う、罪悪感が。

「…という夢を見たんですよ。エヘヘ」

「早く言え!!」

歩ちゃんはそう言って再び俺に寄り添う。

あ、そういえば歩ちゃんは怒られ願望を持っていたっけ…

「それで…」

アクアさんが多少冷たい目で俺を見る。
どうして…?

「力づくにするの?」

「いや、それは難しいと思う」

あいつのことだ。諦めないだろう。
そしてさらに俺にねちっこく絡んできそうだ。

「はあ：こうなったら創世のアクアリオンと言われた私の出番ね」

「初めて聞いたよ！！」

アクアさんがため息を吐きながら呟いた。

「あのね、逆の発想をしない？」

「ギャグの発想？」

「海斗、アンタがボケたら罰則よ」

「ひどっ！俺ってボケ禁止かよ！」

アクアさんにボケ禁止令を出された。

これって俺はずっとツツコミをしてろっていうことか？

「私達でラップ音を出したりして、存分に堀井という奴を怖がらせ
ばいいのよ」

「そ、その手があったのか！！」

「さすがはアクアたん。私の嫁だけあるな」

「残念。私は海斗の嫁よ」

あの、俺ってアクアさんの婿？

「でもアクア先輩は天才です。今度私を調教してください！」

「そうね。それはいつか」

アクアさんはそう言って俺の方を見て、体全体をやらしい目つきで眺めた。

「な、なんですか…」

俺は少し体が震える。

「さ、「いつものプレイ」やろうね？」

「何の話だ〜〜〜〜!!」

俺はその後、アイケンメンバーに美味しくいただきましたとさ。
…ウソです。何とか逃げました。

「後編へ続く!!」

「続き物?!」

食いつきすぎ!大きくするな! (後書き)

2話完結ものは初めてです。

暗闇の中でのあーん、パチン！（前書き）

くあ wせ d r f t g y ふじこ p

明日から連休に突入。

しっかり休んで気を溜めます。

暗闇の中でのあーん、パチン！

いえにほりいがやってきた。

おれたちはすでにしたじゅんびをおえ、たいきしていた。

うちあわせどおり、おれたちはほりいにらっぷおんをきかせるのだ。

「やあだいばくん。ぼくがわざわざきたんだ。たのしませてくれるんだろう？」

ほりいはきょうもうざかった。

いつものことだとわかっていても、これはどうもかんにさわる。

つうかおまえもいいかげんじぶんのさむさにきづけ。

「ははは…」

おれはあいそわらいをした。ほんとうにはっぽうびじんなやつだ。
いや、おくびよーものか？

「ふーん。ま、きみにはおにあいのいえだね」

ほりいはあんまりきれいではないおれのあぱーとをみて、はなでわらった。

「さ、どうぞ」

おれはほりいのはっげんをながして、へやにあらせた。

：

……

もうひらがなひょうきはやめようぜ？！

「ふふふ」

「?!」

そんなとき、押入れから声がした。
アクアさんののだが、俺も驚いた。
この人は才能あるな…お化けの。

「そういえば親戚の人たちはどうしたんだい？」

「?!」

そ、そういえばそんなこと言ってしまった記憶が…
だが、言い訳は作ってある。奈緒美先輩とかが。

「電車の脱線事故で家族が死んで、お通夜です」

「何でキミは行っていないんだい？」

しまったあああああああ!!

何だこの穴だらけの言い訳は~~~~!!

しかもこの言い訳の話、どこかで聞いたような…

「今のは冗談ですよ。何か爆弾で…」

「これはは○しのゲンかい?!」

堀井の奴、何でそんなのを知っている?!
意外と漫画詳しいじゃねえか!

というかこんなので言いくるめられるわけねえだろ!!

俺の後ろの方でククククと奈緒美先輩が笑っている。

あの先輩め……!! わざとやってたな……!!

「冗談はもういいよ。それで?」

「えー…突然のハワイバカンスで…」

俺のじーちゃんのことだけど、この際言い訳に使ってしまおう。

「ふーん。ま、別に興味なかったけどねー」

何で訊くんだよ!!

畜生…段々とイライラしてきたぜ…

パチン!

「?!」

俺たち二人は突然音を聞いた。

ラップ音を奈緒美先輩達が出しているのだ。

「今の音がラップ音だ」

「そうなのかい?」

堀井は半信半疑だ。

パン!

「あん！」

「?!」

おい、押入れの中で何をやっているんだ？

何か音がした後、女性のあえぎ声が聞こえたんですけど。

「今、人の声しなかったか?!」

「へ？」

しかし、堀井がかなりびっくりしている。

お、まさか結果オーライか?!

「なんだか唸り声が…」

「…」

そんな声はしていないと思うのだが…

パチン！

「お、またラップ音だ」

「こ、この部屋はまずくないかい?!」

堀井が本気で怯え始めている。

クックック…日頃の復讐を今果たすとき…到来…!

「そうかな? まだ分からないぞ?」

「いや〜ん…」

「…」

何やってるんですか、押入れで。

「い、今…女性の声で…」

しまった…!!

人によるものだとばれてしまったか?!

「う〜ら〜め〜し〜や〜! って聞こえなかったかい?!」

「…え？」

そんな風には全然聞こえてないと思うんだが。

ただ、嬌声を誰かが上げたただけだ。まったく…

パチン

「「?!」」

その音と同時に電気が切れた。

「う、うわあああああああ!…!!」

堀井は急いで俺の部屋を出て行った。

これは作戦通りなので、俺は驚かない。

クックック…なんでこんなに快感なんだ?

「上手く行きましたね、海斗さん」

「そうだな」

俺はそう小さい女の子…暗いのでよく見えないが、多分歩ちゃんにそう言った。

「行った？」

「ああ」

俺はアクアさんにそう返事した。
すると、電気が点いた。

「ふう…ありがとうございます…」

俺は押入れから出てきた3人に挨拶した。

「あれ？歩ちゃんは？」

「はい？あなた、何言ってるの？」

アクアさんが呆れた顔をする。

「彼女、用事があるからって今日、来なかったでしょ？」

「え…」

じゃ、じゃああのときの女の子って…

「う、うわあああああああああ!!!」

今度は俺が悲鳴を上げる番になったのであった。

「どうしたの？ 弟君は」

「さあな。私達の押入れでのプレイに興奮したのかもな」

ちなみに、その女の子の正体は分からずじまい。

そして聖子先輩のお尻には鞭跡があったそうなの無いですな…

暗闇の中であーん、パチン！（後書き）

今日の睡眠時間は3時間とれます。
良かった…

絶望した!この部活に絶望した!チート軍団に絶望した! (前書き)

中身が無いとはこのことを言うのだな…

絶望した！この部活に絶望した！チート軍団に絶望した！

中間試験の結果が返ってきた。

いや、俺はいろいろ最近忙しかったんですよ。

アイケン部員達に家に押し入られたり、姉さんがハイジャックしてここにやってきたり、家で肝試しもしたり…

まあとにかく忙しかった。あー忙しかった。本当に忙しかった。誠に忙しかった。真に忙しかった。かなり忙しかった。すごく忙しかった。超忙しかった。果てしなく忙しかった。究極的に忙しかった。働きバチ並に忙しかった。

しつこい？ 上等。言い訳してなんぼだぜ。

いや、別に何かをひたむきに隠しているわけじゃないんですよ？

全然何も隠してませんってば。いやいや、隠すようなことなんてありませんよ。

隠し事なんて…ねえ？ 俺は主人公だし、する必要も無いって言うか…察されるというか…

と、とにかく！ 全然隠し事なんてしていないんだからね？！

うっわゝ。俺キモ…すんげえ…キモ…でもま、これで何とか誤魔化せたでしょう。

「海斗って勉強が全然出来ないのね」

「うっわぁ！！」

アクアさんが俺の上から登場する。

「気をつけろ！上から来るぞ！」

続いて歩ちゃんも俺の上から降下。パンツ丸見え。

「今日は旦那様のために勝負パンツです」

「言わなくて良い事実もあるんだよ!!」

「実は少し透けます」

「そんなものを学校に穿いてくるな!!」

そんな会話をしている俺たちの横で、アクアさんが熱心に俺の解答用紙を見ている。

つまり、俺の成績を見ていることと同義であり…

「英語30点。数学25点…」

「絶望した!! 隠していることを公開させられる今の世の中に絶望した!!」

閣僚に次々と不祥事が発覚。

WIOYによって個人フォルダがネットに流失。

酒〇容疑者が覚せい剤を服用。

KA〇―TUNのKとAの確執。

ふか〇りょうの親戚のとある人。

h〇deの身長。

ダ〇ヨウ倶楽部の熱くない熱湯。

その他大勢のズキャンダル。

「海斗、貴方の週刊誌的報道に絶望したわ」

アクアさんから鋭い指摘を受けられた俺。

あ、少し事実と違うこともあるかもしれないよ？

「それはともかく、貴方ってこれだけ勉強が出来ないなんて…ねえ？」

「そうですね」

歩ちゃんは俺の2倍いや、科目によっては3倍以上の点数を取っていた。

予想外に頭が良いんだな…

「アクアさんは?!」

「私はいつも通り学年トップ」

「ええ?! 何ですかそれ! チートですか?!」

「チートでもプロ○クシヨンリプレイでも無いわよ」

アクアさんの顔は自信に満ち溢れていた。

なんだかもう自分が情けなくて情けなくて…

「そ、そうだ!!」

俺はアイケンの部室に入り、奈緒美先輩と聖子先輩にも成績を訊くことにした。

そうだそうだ! 一人くらい成績が悪い人がいてもおかしくない!

「部室に行こう!!」

俺たちは部室に行くことにした。

「私か？いつものとおり学年トップだ」

「はいはいはいはい？！」

奈緒美先輩の口から信じられない言葉を聞いた。

「さすがだね奈緒美ちゃん。私は2位だよ」

「そうだな聖子はいつもルージュだな」

「だったら奈緒美ちゃんはマ○オになるよ？」

「いや、ワ○オよりは良いと思っている」

何だこの人たちは：

会話のレベルは正直アホみたいだが、侮れない奴らだ：
何というチート軍団！！

全盛期のSSラ○イオやヴェ○ディ川崎、阪○タイガースみたいな奴らだ：

「それよりも童貞少年」

「その名前を口にするのは部室だけでお願いします」

「お前ってまさか：落ちこぼれ？」

「ガーンOTL」

直接的に言わないでよく。

まあ奈緒美先輩らしいけどさ。もっとオブラートに頼むよく。
隠れたバ○アリンの4分の一でもみせてよく。

「大丈夫！私が弟君を手取り足取り腰取り見てあげる！」

「ハアハアしながら近寄らないで！！」

聖子先輩の目は完全に猛獣だった。

ダメだこの人たち：早く何とかしないと。

「じゃあ次の話の内容は決まったわね」

「はい?!」

次の話って…アクアさんは何を言ってらっしゃる？

「海斗のドキドキ勉強会。アイケンメンバーによるイイコト教えてア・ゲ・ル」

「うわぁ！その言い回しは俺のベッドの下からかよ!!!」

何て記憶力のいい人たちだ。

「じゃあ報酬は前払いで」

「こうなることも予測済みだあああああああ!!!!!!」

このあと海斗を見たものは誰もいなかった…

「何だよ!!!」

俺は全裸で地の文にツツコミを入れたのだった…

絶望した!この部活に絶望した!チート軍団に絶望した! (後書き)

本当はもっとストーリー性のあるものを執筆したかったけど、労力の問題が…

クックック…ハーハッハッハッハッハ!!!(前書き)

何このタイトル…

というか隔日更新がきついです。
すいませんが、更新スピードはさらに落とします。

クックック…ハーハッハッハッハッハ！！！！

さて、前回のお話。

中間試験が見事に返還され、俺は爆死をした。

俺は慰めのために、アイケンの部員達の誰かが俺より成績のが悪かったり…と考え、部員達と比較してみた。

しかし、結果は予想の斜め上をいくものとなる。

そう、実はアイケン部員達は成績面はチートであったのだ。

俺の希望は呆気なく碎かれ、むしろ周りから落ちこぼれ扱いされる羽目に…

そして俺は…

「っておい！ 字数稼ぎのためにあらすじを本文でやってるんじゃない！」

「アニメはすぐに原作に追いつくからしょうがないわ」

「これはアニメじゃない！」

アクアさんとそんな会話を繰り返す。

ちなみに、俺達は今、アイケンの部室で勉強会を行っている。誰のためなのかは敢えて言わない。言わぬが華というもの。

「ところで何の科目を勉強する？ 保健体育？」

聖子先輩が下着姿で尋ねてくる。

「というかアンタはまともに服を着なさい！」

「それなら実習も兼ねて教えられるわね」

アクアさんが頷く。

「普通に英語とかでお願いしますよ」

「何だその態度は。お願いします、ご主人サマだろう？」

「何でいつの間にか奈緒美先輩の召使に?!」

「三千院家の執事やメ○ちゃんの執事でも見習ってみろ!」

「何で貴方はリアルとバーチャルを混合させている?!」

「とりあえず、旦那様。一応勉強スケジュール作ってみました」

歩ちゃんが俺にスケジュール表を見せてきた。

ありがたやありがたや。

「サンキュ。歩ちゃん」

俺はそれを見してみる。

「ねえ。カレンダーの日付についているこの赤いマークは何?」

「あ、それは安全日です」

「…それで、何をまずやればいいんでしょうか?」

歩ちゃんの発言はスルーしておき、俺は話を続ける。

次は何をするべきだろうか。

「そうねえ…」

聖子先輩が真剣な表情で考える。

「お。聖子が珍しく真面目モードだ」

奈緒美先輩が驚きながら言う。

「どうかアイケンメンバーは基本的に不真面目です。あ、俺は除きます。」

「弟君の苦手なのは英語と数学でしょ？ 私は英語が得意だからそっちを教えるとして…」

「数学は私がやるわ」

アクアさんが俺の数学教師に立候補した。

「あなたに教えてア・ゲ・ル」

「もうそのネタはいいです！！」

「それで旦那様。安全日は私とどうします？」

「何故に安全日限定？！」

歩ちゃんも会話に加わる。

「そうしないと私、妊娠しちゃいますよ」

「いや、俺は何もしませんから！」

「シてくれないんですか…？」

「悲しそうな目をするな！俺は勉強がしたい！！」

「心にも無いことを…」

奈緒美先輩がボソツと呟く。

「いえ。今の俺はやる気に満ち溢れています!」

「ほほう。ならばそのやる気を私に見せてみろ」

「何をすれば?」

「まず私を押し倒して…」

「誤解しすぎだろ! どこをどう勘違いすればそんな思考に?!」

「私と全くそういうことはしたくないと…?」

「う…」

奈緒美先輩は美人だし、全くというわけではないが…
やっぱりこういうのは順番を守って…

「ふ。私も真面目モードになるか。アクアたん。例のブツを」

「かしこまりました」

アクアさんは畏まって部室の奥へと消えていった。

「一体何を…?」

例のブツっていったい何ぞや?

「はい。究極学習剤マルコメX」

「何それ?!」

アクアさんが俺に渡してきたのは、何やら一錠のカプセル。

「これを飲むと一時的に頭の回転をウルトラアップさせることが可能。しかも知識は薬が切れても持続。依存性なし。ただ、副作用として、薬が切れたら即睡眠」

「覚せい剤の一種くさくね?!」

「大丈夫よ。さ」

「うぐっ!」

俺はアクアさんに無理矢理口に入れられた。

「飲みこみなさい」

「い、いや! こんな怪しいクスリを一気に飲み込めるわけ…」

「しょうがないわ。キスをするしかないわ」

アクアさんは頬を上気させ、ハアハアしながら近寄ってくる。ちなみに眼は完全にイってしまっている。

「わ、分かりましたから!!」

俺は急いでクスリを飲み込んだ。

「…変化なしなんですが」

俺はポツリと呟いた。

「まだ飲んだばかりよ」

アクアさん…他三人が俺を見る。
すると、段々頭に血が上ってきた。

「うぐ…」

俺は頭を抱える。

「大丈夫?!」

聖子先輩が俺に近寄ってくる。

「…ククク」

「?」

俺の笑いにみんなが疑問符を浮かべる。

「クククク…ハーハッハッハッハッハ!!」

俺は高笑いを始めた。

「最強だ! ふはははは!! 素晴らしいぞこの力っ!!」

「な、何を言ってるんだコイツは？」

部員達みんなが俺を異端視する。

「この黄金○騎士になった俺に、勝てぬものなどいない!!」

「せめてスーパー○イヤ人に…ていうか頭の回転を早くするクスリじゃなかったの?！」

アクアさんはパッケージを確認する。

「はっ!このクスリは…単なる興奮剤?!」

「アクアたんらしからぬミスだな。だが、それがいい」

「萌えるな!」

奈緒美先輩がうっとりし始める。

「さて、その4人。最初の相手は誰だ？」

「夜の相手なら大歓迎です」

歩ちゃんが俺に近づいた。

「危ない歩ちゃん!」

アクアさんたちの引きとめも虚しく、歩ちゃんは俺に無防備に近づく。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄あ！！！！」

「いつのまにバトル小説に?!」

聖子先輩の驚き虚しく、歩ちゃんは俺の攻撃を受ける。
格ゲーで言えば∞コンボみたいな感じ。

「…旦那様。実は私、史上最強のヨメなんです」

「何い?!」

しかし、歩ちゃんは俺の攻撃を全て防いだ。

「さあ!必殺!パンツの中身!!」

「何?!」

歩ちゃんは自分のパンツを脱いで、スカートをたくし上げた。

「ウボア!!!!」

俺は大量の鼻血を出して倒れた。

「ふっ。この技に耐えられぬ者など、ここにはいない…」

歩ちゃんのウィンクが格好良かった。

「まあこんな展開もありかな、と」

「何これ?! 妄想かよ!!」

アクアさんが全てを自白した。

「無理な展開ではあるけど、ユーモアはあるわ」

「というかどこまでが本当?!」

「ここからが本当」

「うわ、ヒデェ! 何て話だ!」

ガラガラ

そんなとき、扉が開き、奈緒美先輩が部屋に入ってきた。

「いいものを持ってきた。究極学習剤マルコメX」

何だ…この既視感…

クツクツク…ハーハツハツハツハツハ！！！！
(後書き)

今回も中身がありませんでしたね。

押し倒されたか弱き乙女、アクア（前書き）

今日、小説家になろうがまさかのリニューアル?!

何かいろいろ変わって大変です。というかアクセス解析が見れないんですけど。

押し倒されたか弱き乙女、アクア

「アイケン活動約10回、現実と空想の間」

アイケン部室の黒板に奈緒美先輩がそんな文を書いた。

つか約10回と書いている時点でこの部活のやる気の無さが浮き彫りになっている。

「さて、愛…それは形の無いもの。それは儚いもの。それは美しいもの…」

奈緒美先輩が恍惚な表情を浮かべながら言った。
ついでに目もイった。

「しかし、愛とは中々得難いものである」

何か真面目な話をしているようなのだが、怪しい。

何かを覆い隠している気がするのは気のせいだろうか？

「だから人は空想するのだ。愛を求めて。すなわち妄想。自分勝手に物事を捉え、考える。それが妄想」

「…」

何か話に変な方向にずれてきたぞ。

「さて、海斗」

「う…」

また下ネタが来るか…?!

「お前はどんな妄想が出来る？」

「へ？」

どうやら下ネタ一直線ではなかったらしい。
変化球も使えるようだ。

「いや、俺はあんまり妄想なんて…」

「これだからゆとりは」

「あんたらだってゆとりだろう?!」

「フッフ。海斗をからかうのは面白いなあ。つい癖になる」

「…」

何で俺はこんな部に所属してるんだろう？

「今日は海斗の妄想力を鍛える活動だ」

「はいいいい?!」

すると、俺以外の部員の4人が俺を囲い込んだ。
何する気でやりますか？ アンタらは。

「大丈夫だ。今日は直接的なセクハラはしない」

「間接的か?!」

「まあ聞け。私達とお前が性行為をするという妄想をお前がしろ」

「何でだよ?! R18になるぞ?!」

そんなことをしたらアイケンは…

「作者も分からないらしいのよ。どこからがR18なのかが」

「作者って何?!」

アクアさんの口から変な言葉が飛び出した。

「だから、今回はどこまでがR18なのか、検証を試みよう、ということだ」

「ちょっと待ってよ! 確か18禁は、直接的な性描写、性器の名前が書かれている場合らしいですよ!」

「何故お前がそれを知ってる?」

「そ、それはともかく! とにかくそういうことですから! バーチヤルでもそんなことは出来ません!」

説明口調有難うございます、俺。

「じゃあどこまでが18禁じゃないんだ?」

「俺の口から言わせるんですか?!」

「女の子にお前はそれを言わせるのか?」

「今更なんでそんなことを気にするんだよ?!」

「いやいや、いいから教えてくれよ」

奈緒美先輩にじわじわ壁へと追い詰められる俺。
あれ? 何で俺、追い詰められてんの?

「じゃあ私が詳しく説明するわ」

「ア、アクアさん…」

アクアさんがスクツと立ち上がって黒板の方へと向かった。
どうやらマジで説明するらしい。

「じゃあねえ…私と海斗で妄想するわ」

アクアさんの妄想が始まった…

かいと「俺、台場海斗。女の子とHするのが大好きな学生だぜっ！
イイ女はいねえがあ？！」

そのとき、一人の女子生徒が通りかかる。

か弱き乙女アクア「はぁ…働いたら負けよね…」

かいと「ウホッいい女！」

かいとはアクアに近づく。

かいと「やらないか？」

か弱き乙女アクア「え？ 何をですか？」

かいと「男と女がやることなんて決まってるだろ？」

か弱き乙女アクア「え? ……社交ダンス?」

かいと「違う違う! もっと気持ちのいいことだ」

か弱き乙女アクア「気持ちいいこと? ……あ」

かいと「気づいたかい?」

か弱き乙女アクア「スカイダイビング!」

かいと「何でだよ?! 別に男女混合の必要ないじゃん!」

か弱き乙女アクア「はあ……じゃあ何でしょう?」

かいと「とりあえず、俺の部屋に來い」

妄想一時停止。

「まあここまでは大丈夫よね」

「ちょっと待て!! 何で俺がケダモノ化してるんだよ! アクア
さんもキャラ違うよ!!」

理不尽な妄想に俺は横槍を入れる。

「海斗。お前はバカか? それなら妄想の必要は無い」

「何?!」

「実際ありえないことを妄想したほうが面白いに決まっているだろ
?」

「な、何てことだ…」

妄想って思ってた以上に奥が深い…
って騙されるな!!

「では続きを頼むアクアたん」

アクアさんが再び妄想を開始した。

かいとの部屋に連れてこられたか弱き乙女、アクア。

純粋な娘アクア「それで、どうしてここへ連れて来たんですか？」

かいと「今から教えてやるよ」

純粋な娘アクア「え？」

アクアはかいとに押し倒された！！

純粋な娘アクア「キャッ！」

かいと「へっへっへ…さっきから俺のマグナムが抑えきれねえんだよな…」

純粋な娘アクア「な、何をするんですか?!」

かいと「ショータイムだ」

かいとはアクアの服を破った。

妄想一時停止。

「アクアさん！　これはマズイです！　もう少し純愛チックにして下さい！　これは強姦です！　犯罪です！　強姦は最低な犯罪行為です！」

ついでに作者の声も言ってあげた。

…は？　作者？

「そうね。でも純愛だちょっと有り得ちやうかもしれないでしょ？」

アクアさんが潤んだ瞳で俺を見る。

「え…」

俺とアクアさんの視線がぶつかった。
何を訴えているんだ？ この瞳は？

「…」

「…」

俺とアクアさんが見つめ合う。
そういえばアクアさんって結構端正な顔立ちしてるんだな…
そんなとき、グイッと顔の向きを何者かに変えられた。

「え？」

目の前に見えるのは奈緒美先輩の顔だった。

「な、何ですか？」

「い、いや…何となくむかついただけだ」

「何にですか？」

「そうだな…あれ？ 何で私はイラッときたんだ？」

アクアさんはそんな奈緒美先輩を見て笑った。

「何だアクアたん？」

「いえ、副部長って結構鈍感なんですネ、と」

「は？」

奈緒美先輩はポカンとする。

「いえ。何でもないわ」

「な…!!　そう言われると逆に聞きたくなる!!」

奈緒美先輩が不利な立場になるなんて珍しい。
アクアさんは何かを知っているのだろうか？

「そういえば聖子先輩と歩ちゃんは？」

俺は言い合いをしている二人に訊いた。

「そうね…二人は奥で…」

「レズってる」

「…」

この部活のダメさは世界一の自信がある。
そんな意味のない誇りを得た瞬間だった。

押し倒されたか弱き乙女、アクア（後書き）

何か最近続き物が多くなってきた気がする。

次回の更新は10月中です。

実はR18バージョンのアイケンを執筆しようとしたのですが、断念しました。

ちょっとまだ自分には早かったようですね…

瞳を閉じて、君を妄想するよ。それだけでいい。(前書き)

何か凄いリニユールっぷりですね。

マニユアル読まないと…うわぁ…活字だ…

瞳を閉じて、君を妄想するよ。それだけでいい。

「アイケン活動約10回 現実と空想の間リロード」

どうやら今日の議題は前回の続きのようだ。

またどこまでが18禁なのかを検証するつもりのようだ。
そして、奈緒美先輩が俺を見る。

「さて海斗。言いたいことは分かるな？」

「つうか何で俺なのか、少し理解が不能です」

「お前がゆとりだからだ」

「それアンタもです！しかもそのネタは既出です！」

「本当は私もこんなことはしたくないんだ…」

「ウソつき」

奈緒美先輩が眼を伏せて悲しそうな素振りを見せる。

絶対演技だ。口元が笑っている。

「それにこんなことをしたら聖子先輩と歩ちゃんの出番がありません！」

「問題ない。二人とも放置プレイされて喜んでる」

「エエエエ?! 何て人たちだ！」

「早速妄想を開始するわ」

アクアさんが眼を閉じて精神を集中し始めた。
どうでもいいことのために本気を出す部活…アイケン。

純な美少女アクア「わたし…あなたのことが好きなの！」

かいと「俺もだよ。アクア…」

純な美少女アキラ「かいと…」

かいと「アキラ…」

二人の顔が徐々に近づき、顔を赤らめながら二人は口付けを交わした。

純な美少女アキラ「んっ…」

アキラはあまりの激しい口付けに声が出てしまう。

彼女のファーストキスは、甘く激しいものであった。

純な美少女アキラ「もっど…して…」

あくあ「いいぜ…何度でもしてやるぜ…」

二人は再びキスをする。

彼女たちの間に塞がるものなど、何もなかった。

「とまあとりあえずここまで」

アクアさんがうつとりしながら俺を見る。

「ていうか何で相手が俺？」

「妄想しやすいからよ。喜ばない」

「素直に喜べない」

奈緒美先輩が俺たちの会話に口を挟む。

「というかこんなの15禁ですらないぞ」

「まあそうですね。恋愛小説によくある展開ですね」

「というか読みきり恋愛小説みたい」

アクアさんが自分で自分の妄想を批評する。

ここまでくればある意味大したものだ。

「まあこれからの展開に期待するといいわ」

「いや、あんまり期待が…」

「じゃあ妄想リスタート！」

アクアさんが目を閉じて妄想を再開した。

かいと「な、なあ…」

純な美少女アクア「な、何？」

二人っきりの部屋で彼女たちは寄り添い合っていた。

ついさっき結ばれたばかりの二人は少し緊張していた。

これから何が起こるのか、互いに理解しているのだろう。

これから起こることを知っているのに、純なっておかしくない？ア
ダッ！

妄想の邪魔しないで。

コホン。

かいと「その…えーと…」

かいとは言葉が震えていた。

こういうことは共に初めてなのかもしれない。

かいと「して…いいか…？」

純な美少女アクア「…うん」

かいとはアクアの服に手を掛けた。

「焦らすの好きだな。アクアたん」

奈緒美先輩が話す。

「この焦らし具合がたまらないわ」

アクアさんが恍惚そうな表情を浮かべる。
それ、奈緒美先輩のキャラですから。

「さあここからは諸事情によって検証タイムに変えるわ」

「そろそろ危ないってことですか」

「ええ」

アクアさんが黒板の前に立つ。

「じゃあこれからどうなるか書くわよ」

かいとがアクアの服を脱がす。

←

「アクアたん。かいとが服を脱がすのはやっぱり違和感が無いか？」

「まあね…でも私の妄想力を馬鹿にしないで。今、私は頭の中で1回絶頂を迎えたわ」

「早いなアクアたん」

「まあ体質上感じやすいのよ」

「なるほど」

「…」

会話についていけない…
というかついていきたくないな。

「じゃあ続きを書くわ」

かいとがアクアの服を脱がす。

←

下着も脱がすかいと。

←

「ここまでは何もしていないから18禁じゃないわね」

「ところでアクアたんのスリーサイズは？」

「目測して」

「84・57・79！」

「む…近いわ…」

奈緒美先輩は女に対しても変態さを発揮出来るらしい。
というかもう帰りたいなあ…

「じゃあ続き」

かいたがアクアの服を脱がす。

←

下着も脱がすかいと。

←

かいたも服を脱ぐ。

←

「ここは別に大丈夫よね。じゃあ次」

かいたがアクアの服を脱がす。

←

下着も脱がすかいと。

←

かいたも服を脱ぐ。

←

「何か」を開始。

「アクアさん！これ以上はまずいです！」

「限界は性的行為の1歩手前ってところね…」

アクアさんと奈緒美先輩は考え込む。

「じゃあ妥協しよう」

すると奈緒美先輩は手をポンと叩いて、黒板に何かを書き始めた。

← かいとがアクアの服を脱がす。

← 下着も脱がすかいと。

← かいとも服を脱ぐ。

← 「エロいこと」を開始。

← 違うエロいことをスタート。

← 二人とも準備完了。

← 何かの本番を開始。

「これでどうだ！」

奈緒美先輩は自慢げに胸を反らせる。

「確かに大丈夫くさい…!!」

「ふ。私を甘く見るなよ」

その後、奈緒美先輩は何かを書き加えた。

何かの本番を開始。

←

かいと、早くも離脱。

「何それ?!」

「お前が早く離脱するだけだぞ」

「何かイヤなんですけど?!俺がそー…そー…」

「お前、早漏だろ?」

「違います」

「ほほう。では試してみるか?」

「しまった…!! また策略に引っ掛かっちゃった!!」

奈緒美先輩が俺にまたじわじわと近づいてくる。

「え、えっと…今回はアクアさんの妄想の中身を大公開! (表現にモザイク有り)」

「逃げたな…」

カーテンコール。

瞳を閉じて、君を妄想するよ。それだけでいい。(後書き)

次回はR18にならないとは思いますが、際どいです。

だって〇〇〇しちゃってるもん。

自主規制始めました。(前書き)

なんだこれは。

結構ギリギリじゃないですか。

あ、何がギリギリなのかは言いませんよ。

自主規制始めました。

ドクン…

俺の胸が高鳴る。

こんなおいしい状況…夢でしか見たことがない。

目の前には無防備な女の子。

これって夢なのか？

そんな言葉が頭に浮かぶ。

相手の女の子は頬を軽く染めて俺を見つめる。

すでに女の子はベッドに横になり、何かを待っているようだった。

この状況、逃げたら逆に男が廃るもの。

逃げてはいけない。逃げちゃダメだ。逃げちゃダメだ。逃げちゃダメだ。

「やります」

俺は意を決して彼女に近づく。

「キス…するぞ？」

「ん」

彼女は軽く頷き、眼を閉じた。そんな彼女の唇に自分の唇を近づける。

こんなに胸が高鳴るのは人生で初めてだろう。

そして、俺はゆっくりと口付けを交わす。

「んっ…」

俺たちは唇を貪り合った。初めてなのに、舌も入れ、彼女の口内を掻き回す。

彼女もそれに答えるように俺の舌に自分のを絡ませる。

口の中で俺たちは交わっていた。絡み合っていた。

そしてそのうち、自然と唇が離れる。酸素が足りなくなったためだ。しかし、俺たちの唇の間には淫靡な銀糸が名残惜しく結ばれていた。おそらくどちらともまだ足りないであろう。

「んっ」

そしてまた、俺たちは口付けを交わす。

もう何度そんなことをしていたか分からない。

自らの唾液は相手に。彼女の唾液は俺に。俺の口の中は彼女でいっぱいになっていた。

「そろそろ…いいか？」

俺はもう自分を抑えきれない。興奮の度合いが限界を突破し、カウントオーバーの域にまで達していた。

今はただ、彼女を求めている。

「…うん。あなたと合体したい」

俺は彼女のセリフが終わったと同時に、彼女の服に手を掛けた。

「あ…先に電気…消してよ」

「分かった」

俺は彼女の望み通りに電気を消し、ついでにカーテンも閉めた。

「ありがとう…」

頬を染めながら言う彼女は、とてつもなく可愛かった。

俺はさらに興奮度がアップした。

「じゃあいくぞ」

今度こそ俺は彼女のワイシャツに手を掛けた。

ゆっくりとした動作でボタンを外し、俺はまず、彼女のワイシャツを脱がした。

そして、彼女の自主規制のふくらみを覆い隠す自主規制が露になった。

俺のドキドキが収まらない。下手をすると彼女に聞こえているかもしれない。

次に、スカートに手を掛ける。

彼女は少し恥ずかしがりつつも、すぐに俺の求めに応じてくれた。

彼女は下着姿になる。恥ずかしそうにする彼女の仕草は可愛かった。何よりももう全てが愛しく感じてしまう。

「触る…ぞ？」

俺は彼女の自主規制に触れた。

「ん…」

彼女は少し顔を強張らせるも、徐々に緊張が解けてきた。

それを確認した俺は、さらに行為をエスカレートする。

しかし、それに飽きた俺は、彼女の自主規制を剥ぎ取ろうとする。

「あ…」

しかし、彼女はビクンと震えてしまった。

「悪い…早まったか？」

「う、ううん…ちょっとビックリしちゃっただけ…」

彼女は真っ赤な顔で俺を見つめる。

「じゃあいくぞ？」

俺は彼女の自主規制に手を掛け、彼女を自主規制にした。

「あ、あんまり見ないで…」

「う…」

そんなことを言われたら余計に凝視したくなります。
俺はジッと彼女の自主規制を見つめる。

「視線がやらしいよお…」

「で、でも…綺麗だからさ…」

「うう…恥ずかしい…」

彼女は恥ずかしそうに俯く。
だが、俺の心に偽りなど無い。

彼女の自主規制も、自主規制も、自主規制も全てが綺麗であった。

「じゃ、じゃあちよつと自主規制するぞ」

俺は彼女の自主規制を自主規制した。
とても自主規制だった。

「(好きな言葉を入れてください)」

彼女はビクリしつつも、俺の自主規制を受け入れてくれた。
そして俺の自主規制は徐々に下へと行き、彼女の自主規制にたどり着く。

「そこは汚いよ…」

「いや、綺麗だよ」

俺は彼女の自主規制に触れ、俺の自主規制で彼女の自主規制を自主規制した。

最初は怖がっていた彼女も声を上げるようになった。

そして随分と彼女の自主規制も自主規制されたらしい。

もう我慢は出来ない。

「そろそろ自主規制するぞ？」

「優しく…お願い」

「分かった」

俺は自主規制になり、自分の自主規制した自主規制を彼女の自主規

制に自主規制した。

随分と自主規制な感覚であったが、それでも自主規制であった。

彼女の自主規制はひどく自主規制であったが、随分と自主規制だ。

「痛…」

「あ、悪い…」

つい夢中になってしまった。彼女は初めてなのだ。

自主規制から自主規制が自主規制され、彼女はとても自主規制だった。

「慣れるように頑張るから…」

彼女の声が俺に届く。

少し反省した俺は、自主規制を優しくすることにする。

すると彼女は自主規制になり、自主規制が自主規制し、俺も自主規制だ。

「（好きな言葉を入れてください）」

彼女の自主規制が俺に聞こえた。

どうやら結構自主規制だったらしい。

俺は少しずつ自主規制を自主規制する。

「（好きな言葉を入れてください）」

彼女の自主規制が大きくなった。

どうやら彼女は自主規制らしい。

俺は嬉しくなり、さらに自主規制する。いや、自分が自主規制する

ためでもある。

結局男は自主規制と言うことか。

「(好きな言葉を入れてください)」

俺は彼女に質問した。

「(好きな言葉を入れてください)」

彼女は俺の質問にそう答えた。

俺は自主規制を自主規制し、彼女の自主規制に自主規制を自主規制した。

「(好きな言葉を入れてください)」

彼女がひととき大きな声を出す。

それと同時に彼女は自主規制しながら、自主規制した。
俺も同時に自主規制した。

「(好きな言葉を入れてください)」

俺と彼女は自主規制が自主規制だった。

とうとう自主規制してしまった。

だが後悔など全く無く、嬉しかった。

しかし、俺の自主規制はまだ自主規制であった。
上へジャンプし、ループ状態に突入した。

「これっていいのか?!」

俺はアクアさんの自主規制に驚く。
これはヤバすぎではないのか?!

「一応自主規制。読者の皆様が危ないと思ったら警告してくるわよ」

「それで、これはどういう意図で製作したんですか？」

「文章の配布よ」

「は？」

アクアさんは算盤を取り出し、何かを計算し始めた。
で、これがR18だと思った方は、評価・感想欄か、私書で警告し
てください。
マジでお願いします。

自主規制始めました。（後書き）

この文章は脳内変換用です。

あ、何を規制したのかは想像にお任せです。

予告は活動報告にアップします。

お食事にしますか？ お風呂にしますか？ それとも…（前書き）

新キャラ登場の回。

お食事にしますか？ お風呂にしますか？ それとも…

「長かった…」

雷が外で轟く間に、真っ暗な部屋で少女が微笑む。

「ついにやって来ました…このときがっ！」

その威勢の良い声とともに雷が鳴る。

「思えば封印されて約50年！ ついに私の時代がやって来ましたっ！！」

そう少女は言い放つと、フッフッフと笑いながら暗闇に消えた。

ある時代、ある場所、乱れた学校の片隅、俺は身を守るために処世術を覚えていった。

そんなことを繰り返していたある日、俺は体に軽い倦怠感を感じた。

「どうかされたのですか？ 旦那様」

「あ、いや…」

歩ちゃんに心配され、俺はどう言うか考えた。

何せ、体がダルいだけなので、言うほどのことじゃないと俺は感じた。

「何でもないんだ」

そう言って俺は周りを見渡す。

薄暗い部屋の中には俺と歩ちゃんの二人しかない。
ちなみにここは部室です。

「二人…ですね」

「そうだな」

歩ちゃんが意味ありげな視線を俺に送るも、極力無視することにする。

「二人っきりですね」

「そうだな」

歩ちゃんが俺に体を寄せる。

だが、何で俺をここまで気に入っているのか理解しかねるのだが…

「旦那様は好きな人っているんですか？」

「Likeなら。Loveはいない」

「まさか旦那様って…同性好き？」

「違う！！ それは断じて違う！！」

そんなことは周りから思われたくない。

愛の形は人それぞれなのであるが、それが周りの人達が異質だと感じれば異質なのである。

「でも私達があれだけ言い寄っても、あまり反応しませんよね？」

「そりゃあ君達が俺をからかって誘惑しているからだろぅが」

「…」

突如黙り込んだ歩ちゃん。

何やら複雑そうな顔をしている。

「どうしたんだ？」

「旦那様は私達に魅力を感じないんですか?!」

「はい？」

俺は首を傾げる。

「だっておかしいじゃないですか！」

歩ちゃんが俺に詰め寄る。

「本当に何とも思わないんですか？！」

妙に必死そうな歩ちゃんを見て、俺はため息を吐く。

「いや、みんな魅力的だと思うけどさ、俺はもっと普通に良いんだよ。それに、今は恋愛にそんなに興味が無い」

俺は本心を言うことにした。

大体俺に何を求めているんだ？

「そうなんですか…今流行りの草食系男子って奴ですね！」

「まあそうなんのか？」

「では早速です！ 家に泊めて下さい！」

「何でそうなる？！」

「草食系男子なら安心です！ だから泊めて下さい！」

「意味が分からんし、断る！！」

俺の平穏な生活は無いのか〜！

「じゃあ仕方ありません…」

あれ？ 意外と楽に引き下がったぞ。

「今日は誰も来ないようなので帰りましょう」

「そうなのか？」

「だって今日は部活は休みです」

「早く言え〜〜〜〜！！」

俺達は学校を出て、それぞれの帰路についた。歩ちゃんも呆気なく引き下がったので、楽だった。
さあ、後は家でまったりするだけだ。

「お帰りなさいご主人様」

「……………は？」

呆気を取られるとはこのことを言うのだろう。

俺は家に帰り、ドアを開けたときのそのセリフに固まった。

目の前にはメイド服を着た一人の少女。

しかも正座しながら頭を深く下げるといいう格好。

なん だ これ は ？

「夕飯はもう作ってあります。食事にしますか？ お風呂にしますか？ それとも…」

「せ、説明が先だろうがああああ！！」

俺は近所迷惑なくらいに大きな声で彼女を怒鳴り付ける。

そもそも俺は彼女なんて知らない。

でも向こうは俺のことを知っているようだ。

「あん！！ そんな…大きすぎますわ…」

「声がだろ?! 主語を抜くな!!」

「ご主人様は私にどんな体位をお望みなのですか？」

「誰もそんなことは言ってない！ まず君は誰?! どうしてここにいる?!」

俺は頭を抱えなくなる気持ちを抑えながらも、言葉を言い切った。

「あ、言い忘れていました。私はナギサと申します。今日から自主的に海斗さんのお世話をさせていただきます」

「ナギサ…っていうか自主的?! 爺ちゃんに言われたとかじゃない?！」

「まあそれはいいじゃないですか。私の自由ですし」

「っていうか君はここにどうやって入ったの?! 不法侵入だよ?!」

「何を言ってるんですか? ずっと側にいたじゃないですか」

「は?」

俺の思考が急停止する。

これはまさか…アレなのか?

「私、幽霊ですから」

「やっぱりiiiiiiiiiiii!」

俺は今期一番の絶叫を上げた。

お食事にしますか？ お風呂にしますか？ それとも…（後書き）

期限が刻一刻と迫ってくる…

ラブホテルの浴槽ってさ、明かりがついてるんだぜ（前書き）

頑張って更新。

なんとか生存報告します。

ラブホテルの浴槽ってさ、明かりがついてるんだぜ

目の前にいる端正な顔立ちをしている少女。
彼女、綺麗だろ。これでも死んでるんだぜ。
ってそんなことはどうでもいい！

今、俺が説明を求めたいのは、彼女が何者であるのか、だ。

「君は何者なのか詳しく聞きたいんだけど…」

「ええ?! そんなに私の身体の胸と尻に興味が…」

「違えよ!! どうして俺の周囲の女の子は変態しかないんだ?」
「!」

「そういう運命だからです」

「どこから?!」

「具体的に言えばあなたのお爺さんの代からです」

「マジかよ?! 微妙にリアルだな!!」

「いえ…だって私…」

ピンポン♪

彼女が何かを言いかけたが、それを遮るようにインターホンが鳴った。

こんなときに一体誰だよ…

「ナギサだっけ？ とりあえず知り合いが来たら隠れてくれ」

「？」

「いいから!!」

俺は小声で大声を出して…意味分かんないけど、とにかくそうして彼女に叫んだ。

ピンポーン♪

「はいはい!!」

俺は玄関に向かった。

「どちら様で…」

「あなたの奥様です」

「歩ちゃんかよ!!」

そういえば泊まるとかどうとかって言ってたけど…まさか本気だったとは。

一旦家に帰ったのは、お泊りセットを持ってくるため…とか。まあ悲しくもその予想は当たることになるのだが。

「開けてくださいです!!」

「いいい?!」

今の状況でこれは非常にまずい。いや、人生の壁にぶち当たっているって良い。

何せメイド服の女子幽霊が家にいるのだ。弁解とか面倒くさい。

「開けないと…私のことは遊びだったのね！って叫びますよ」

「いや！ ちょっと！」

歩ちゃんは無垢だ。いや、純粹じゃないけど、無垢だ。マジで言いかねない。

「分かった分かった！ ちょっと待ってくれ！」

俺は仕方なく了承するが、まずは面倒ごとを片付けることにした。

「おいナギサ。知り合いだから隠れてくれないか？」

「ううう…私はメイドですよ？」

「だから今はちょっと…頼む！！」

俺は頭を下げた。

「むう…仕方ありませんね…」

「早く開けてくださいー！！！」

「い、今行くから！！」

何このカオスな状況：

俺はナギサを押入れに閉じ込め、玄関へと戻っていった。

「今開ける」

「こんばんわです」

歩ちゃんが満面の笑みで俺を見た。

いや、黙ってればこんなに可愛いんだよ？ でもね、ちょっと変態
というか：かなり変態というか：分かるでしょ？

「何の用？」

「もちろん泊まりに。夫婦なんですから普通ですよ。それにむしろ
今から同棲しましょう！」

「いやいやいや！ 俺は結婚なんて認めてないって！！」

「大丈夫です！夜のテクニクだけは自信あります。花嫁修業のお
かげで」

「どんな修行？！」

あんまり知りたくないなあ：

興味はあるけどね。

「じゃあまずは夕飯の準備を：って出来てるじゃないですか！！し
かも二人分！！」

「げえっ！！！！」

「まさか…」

ま、まずい！とうとうバレてしまったか…？

俺の部屋に女性がいることに…

「私が来ると思っていたんですね！！　そうですね？！　いえ、そうに決まっています！！」

「…」

この娘、結構猪突なんだね。思い込んだら一直線なんだね。

「おお！　お風呂も沸かしてあります！　これはあれですね！　浴槽エッチが…」

「わーわーわー！！！！　大きな声で叫ぶんじゃない！！」

このままだと近隣住民に俺が変態だと思われてしまう。それに、近所迷惑だ。

「と、とりあえずご飯食べよう！」

そこで俺は首を少し捻る。

…幽霊ってご飯食べるのか？

目の前にあるテーブルの上にはご飯二食分。

「いただきます！！」

「ああ！！」

そんなことを考えている間に歩ちゃんがご飯に箸をつけてしまった。
そしてその箸で掴んだご飯を俺の口元に…

「あーん」

「へ？」

何か笑顔でそんなことを言ってきたのですが。

これって俗に言う彼女にされて見たいことベスト3に入るあれですか？

「あーん」ですか？

「あーん」

そして箸がさらに俺の口に近づく。

これって食べるべきなのだろうか？

い、いやいや待てよ！　これがダメだったら彼女は何か分からない！

きつともっと恐ろしいことをしてくるに決まっている！

押入れから殺気も漏れているのだから。

…押入れ？

「あーん」

そのうちにお箸が俺の口に触れた。
し、仕方がない。俺は口を開けた。
そしてご飯は俺の口の中に。

「えへへ」

歩ちゃんがとろけた顔をする。ものすごく幸せそうだ。

しかし、それと同時に押入れからバキッと何かが折れた音がした。

「ヒイツ！」

俺は条件反射でビクビクするが、歩ちゃんは気づいていない。
というか恍惚そうな顔で陶醉していた。

「えへへ。じゃあ次も」

「う！」

何かヤバイ気がするのは気のせいだろうか…
血の雨が降りそうな予感だ…

「あーん」

しかし、歩ちゃんは見事にKYであった。
ど、どうすれば…

「…もう我慢できません」

「ん？」

押入れから声が聞こえた。

「海斗様は私のものですっ！…！」

「うわああああ！…！！…！！」

恐れていた事態が到来。

俺と歩ちゃんの間には浮遊している一人の女子。
歩ちゃんのお箸は見事に彼女の体をすり抜けていた。

「え？」

さすがに歩ちゃんの表情が変わる。
どうなってしまうんだ…俺！！

ラブホテルの浴槽ってさ、明かりがついてるんだぜ（後書き）

次回の更新も頑張りたいですね…

何でも言うことを聞くメイドが俺の家に現れた（前書き）

ずっとエロコメでいくのには限界があるのではないかと感じました。

何でも言うことを聞くメイドが俺の家に現れた

えー。想定範囲内です。とか、どっかの社長だった人みたいに冷静に物事を言えればいいのだが、生憎俺はそんな冷静ではない。

というかそんな冷静になれる状況ではない。

状況…俺と歩ちゃんの間に一人の女の子。

だが…

その女の子は空中に浮いて、歩ちゃんの箸が彼女の体を透過している。

この状況をどう説明しろと?!

「えーと…」

俺は言葉に詰まった。どうすればこの状況を抜け出せるのであろうか。

「か、彼女は…」

俺が歩ちゃんに説明しようと試みる。

「う、浮いてるです……!!」

歩ちゃんが大声で叫んだ。おかげで俺の言葉は遮られてしまった。

「す、透けてるです……!!」

「あーえー」

「きゅー…」

パタン

「歩ちゃん?!」

歩ちゃんが衝撃のあまり倒れてしまった。

無理もない。いきなり幽霊が目の前に出現すれば誰だってビビるだろう。

「あれ？」

そして犯人は自分がした事に全く気づいていないみたいだ。

「と、とりあえず彼女をベッドに運ぶぞ！」

「は、はい！」

ナギサが彼女の腕を掴もうとする。
が…

「あ、私は幽霊だからすり抜けてしまいます!!」

「ぬおっ! そうだった!」

何という見落とし!

俺は一人で彼女をベッドの上に寝かせた。

「はあ…っってお前! どうやって料理したんだ?!」

「そりゃあ野菜を切ったり…」

「違う！ お前って物持てないはずだろ？！」

「あああああああ！！！！！！何ででしょう？！」

「俺に訊くな…」

何だこれは…どういことなんだ？

「じゃあ試しにご主人様の体を…」

ペタペタ

ナギサが俺の体にペタペタ触れてくる。

「触れます！！これでご主人様に夜伽できます！！」

「そこを喜ぶのか？！ それより君のことについてまだ詳しく聞いていないんだけど…」

「あ、えーと…私は生前^{だいば}台場^{せかい}陸海空のメイドをしておりました…」

「ええ？！ じいちゃんの？！」

そういえばじいちゃんはハーレムしてたって聞いてたような…
まさか彼女もその一人？！

「はい。ですが、体が弱く、陸海空様に手を出される前に…」

「病死…」

「いえ、流れ弾に当たって戦死です」

「体が弱くは関係ないじゃん!!」

「いえ、銃弾ごときで死んだ私が柔だったのです!」

「いやいや!その考え方はおかしいって!!」

このメイドは結構凄い生活を送ってきているらしい。
銃弾で戦死ってどういうこっちゃ?

「まあしかし何とか幽霊として生き延びたのです」

「それ、生き延びてないから!!」

「じゃあ死に延びた?」

「別にそこはこだわらなくていいところだから!!」

「それにしてもご主人様は陸海空様にそっくりですね…」

「へ?」

ナギサは突然頬を赤らめて俺に近づいてくる。
おーい、何やってるんですかー?

「あのときの股間の疼きが…」

「わー!わー!それ以上は言わないでね?!」

「ですがっ！今日決めました！私はご主人様に処女を捧げます！！！」

「聞けよ！！頼むから聞けよ！！！」

「ではまず愛のキスから～～～～！！！」

「うおっ！！！」

俺はナギサのキス攻撃を何とか避けた。つうか何ていう攻撃だ。

「まさかキスは下の口のほうがいいですか？！」

「ゴメンッ！何のことだかさっぱりだよ！！！」

「じゃあパンツ脱ぎますから待ってください！！！」

「ねえ俺の話聞いてよ！！頼むから聞いてよ！！！」

俺はスカートに手を掛けたナギサを必死に止める。

「放して下さい！！！」

「誰が放すかっ！！！」

「じゃ、じゃあギュッと放さないでください」

「どっちだよ？！」

ジタバタもがいたり、急に大人しくなったりなど、彼女は挙動が不

審すぎる。

というか俺って受難体質過ぎる…

「とにかく！私はご主人様のことが好きです！ 愛してます！」

「そう簡単に人を愛せるか～～～～！！！！！」

「あなたとは違うんです！！！」

「そこでそれを使うのか？！」

「それでっ！ ご主人様の答えは？！」

「今会ったばかりで愛してるわけないだろう～～～～！！！」

「え…」

突如彼女の顔が悲しみに染まる。

え？ 俺、まさか、酷いことを言っちゃった？

「愛してるわけないだろ」

確かに、俺の本心だ。でも…もう少し言い方があったんじゃないか？

「す、すいません…つい陸海空様と同じ接し方をしてしまいました…おこがましいですよね、私。ご主人様と陸海空様は違う人なのに…。私、最低です。ご主人様を別の人と重ねて…」

「あ…いや…」

こういうときにすんなり言葉が出てこない。

もう少し女性慣れしてたらいい言葉とか思いついたかもしれない。

「すみませんでした。私、いつものように消えてますね…」

「あっ！！！」

ナギサはスウィットと消えていった。

いや、元の姿に戻ったと言うべきなのかもしれない。

彼女は嬉しかったのかもしれない。久しぶりに現世に出れて。

だから今日はたまたま羽目を外してしまっただけなのかもしれない。
というかあんなに強い言い方をして断らなくても良かったんじゃないか？

受け入れることは出来ないけど、もう少しやわらかく断るべきだった…

俺は、何てバカなんだ…

「ナギサ…言い過ぎた…」

俺はナギサに聞こえるか分からないけど、しゃべってみた。

「謝る。俺はお前が俺いることを嫌っているわけじゃない。おまえ自身も嫌いじゃない」

賑やかな女の子は結構好きだ。

「俺はじいちゃんと重ねられたことなんて何とも思っていない。それに…俺はお前のことをこれから知ればいいし、お前もこれから俺のことを知ればいい。幽霊でもいい。俺の友達になれるんだったら、何だっていいんだ、ナギサ。だから…」

「ご主人様~~~~~!!」

「うおっ!!」

ナギサが泣きながら俺に抱きついてきた。
最早号泣といった状態だ。

「私っ!! 感服いたしましたっ! これからずっとあなたのお傍に
いますっ!! あなたについて行きます!! どんな命令も聞きま
すっ!!」

「あー…」

これは一応ハッピーエンドかな…?

「うゝん…」

「ん?」

そのとき、ベッドから歩ちゃんが起き上がった。
俺にしがみついている空中浮遊している少女を見た歩ちゃんは…

「きゅー…」

「歩ちゃんっ!!」

結局俺が安心して寝たのは随分後のことであつた…

朝起きるとメイドが俺の下半身に顔を埋めていました。(前書き)

更新……するぜっ!!

見て……くれよなっ!!

……更新開けすぎてすいませんでした。

朝起きるとメイドが俺の下半身に顔を埋めていました。

次の日、俺は股間の違和感で起きた。

$$\left[\begin{array}{c} h \\ \vdots \end{array} \right]$$

俺がそこを見ると、むき出しの下半身と、ナギサの顔があつた。

「ギヤ〜〜〜〜〜！！」

とんでもない朝だ。

「はあ…」

昼休み、俺は教室でしつかりとため息を吐いていた。
思い出されるのは昨日のこと。

自称メイドのナギサが俺の夕飯を作って、それで混乱していた俺の
ところに現れた歩ちゃん。

昨日はとにかくひどい夜だったことは間違いない。

あの後、歩ちゃんは俺のことでナギサと意気投合をして仲がかなり
良くなった。

残念ながら人間は俺しか触れず、物も俺の所有物しか触れないらしい。

だから歩ちゃんが家に帰った後、ナギサは俺のベッドに侵入してきた。

どうにかして貞操は守ったものの、今朝の事件に繋がってしまった。
ただ救いなのは、彼女は地縛霊なので家から出れないことだ。どう
やら生前彼女は俺の部屋に住んでいたそうだ。

「はあ…」

思い出してもため息しか出てこないのはどうにか出来ないものか…

「なんだいなんだい。またため息かい？　まあ君の成績じゃ仕方ないね」

「…」

そんなときに俺に話しかけたうざい男がいた。こいつ、そろそろコンクリ詰めして東〇湾に沈めようかな。

「どうしたんだい？　ああ！　僕に勉強を見てもらいたいんだね。でも残念だけど僕は君と違って忙しいのさ」

「そーですか…」

いや、そんなこと全然聞いていないから。

「おーい台場」

「え？」

そんなとき、クラスメートが俺のことを呼んだ。そういえば俺って全然クラスで友達がいらないな…アイケンのせいだ。

「何か歩って子がお前を呼んでるぞ？」

「へ？」

歩ちゃん？

一体何の用なのであろうか。

「なんだあ告白されるのか？　羨ましいぜ」

「違うって…」

クラスメートの軽口に冷静に突っ込んで俺は入り口に向かった。
こんな俺に軽口を叩いてくるクラスメートたちは結構いいやつらだ。
一人除くが。

そうして俺はゆっくりとした足取りでドアの方に向かった。

「何？」

「あ！ ちょっとここじゃ…」

「分かった。屋上に行くか」

多分昨日のことだろう。

それならば人にあまり訊かれたくない。
俺と歩ちゃんは屋上に行くことにした。

「それで、こんなところに連れ出して何のつもりですか?!」

「君の用事だろ?!」

「あ、でも旦那様がそこまでいうなら…初体験が屋外というのも中々…でも避妊だけは…」

「いいから!もういいから!早く話してくれ!」

俺は歩ちゃんの発言を強引に打ち切って話をせかした。

というかこの子はどうしてこんなに変態になってしまったのだろうか…お兄さん悲しい…

…今の俺の発言は聞き流してください。

「昨日のナギサちゃんのこと…アイケンメンバーに説明します?」

「そ、そうだよなあ…」

あの3人…というか歩みちゃんを入れて4人は俺の家に来る確率が高い。

そして来たら来たで泊まるとか言い出す。

隠し通すのは不可能に近い。

「言わなきゃマズイよなあ…」

「私に対する告白をですか？」

「君の脳内がピンクでハッピーなことはよく分かったから、部室に行こう。放課後に」

「放課後に活動するのですから行くに決まってるじゃないですか」

「う…」

歩ちゃんの反撃を食らいながらも俺はその場を立ち去った。

「何その題名?!」

俺がナギサのことを話したら、奈緒美先輩が黒板にそんなことを書き始めた。

そして俺は4人の女子に包囲されている。

「さて、まずは今日の朝、彼女と何があったか聞かせてもらおうか！」

「な、なななな何もないですよ!!」

「怪しいわね」

「弟君、私にまで嘘をつくの?」

「う…」

何で俺がこんな目にあわなきゃいけないんだ?
俺はもう疲れたんだよ。朝のことといい、昨日のことといい。

「メイドと二人暮らしのお前の方に何があったのか詳しく知りたいだけだぞ」

「弟君…私はあなたの全てが知りたいの…だからお願い…」

聖子先輩が俺に胸を押し付けながら訊いてくる。
そして何故かこすり付けてくる。

「ああ…結構気持ちいいかも…」

「何してるんですか!!」

俺は聖子先輩を強引に引き離して一歩距離を取った。

「海斗!あの誓いを忘れたか?!」

「は?」

「アイケンメンバーで結んだ誓いだ!」

「何ですかそれ?」

そんなことしたっけ?

というか誓って何の誓いさ?

「アクアたん。このチェリーボーイに何とか言ってやってくれ」

「しょうがないわね。誓いの内容はこうよ。我ら5人生まれた日時は違えども、死すときは同じ時間同じ場所であることを誓わん!…よ」

「そんな誓いした覚えない!! しかもその誓いじゃさっきの俺の発言を責めるのおかしいだろ! 何も関係ねえよ!!」

三国志知らない人ゴメンナサイ!!

「仕方ないな…こうなったらやることは唯一つだ。私を現界させ続けるための魔力をくれ。やり方は性交で」

「何でアンタはサーヴァントなんだよ! さっきより話ずれてんじ

やん!!」

「じゃあ魔力くれなくてもいいからしない？」

「聖子先輩はまず服を着てください!!!」

ちなみに、聖子先輩は必ずと言っていいほど下着姿だ。
寒くないのかな？

「でも一応チェックしておくか」

「そうね」

「そうですね」

「弟君の朝を調べるには当事者に訊くのが一番だもんね」

そう言って4人が俺を壁へと追い詰める。

ここってG○r l'sブ○ポーの世界じゃないよね？

「じゃあ当事者の下半身についているモノを捕獲だ!!」

「うわああああああ!!」

捕まった俺は体で尋問を受けました。

…俺ってやられっぱなしだよな。

…仕方ないな。

…そろそろガツンとやるか。

…でもまずは服を着ないとな。

朝起きるとメイドが俺の下半身に顔を埋めていました。(後書き)

何だこの小説。

感想書く気も失せますよね？
すいません。

風の現代魔法の一存の憂鬱。つまり、カオス。(前書き)

連続投稿だずえ!!

深夜テンションに入りました。

風の現代魔法の一存の憂鬱。つまり、カオス。

俺の家がいつもより賑やかだった。

理由はただ一つ。俺のほかに大量の人間が家にいる。
というか全員女の子なので逆にヤバイ。

「さて、どういふことなのか、説明しよう」

「誰に言ってるのよ」

アクアさんが俺に向けて変な目線を送った。
俺は一応無視することにする。

「…：そういうえばこの質問は愚問だったわね」

しかし、アクアさんはすぐにうんうんと頷いて納得した。
なんで？

ま、まあとにかく、俺の家にアイケンメンバーが勢ぞろいしている
には理由がある。

目的は、俺の家で割烹着を着ながらいそいそと家事に勤しむ彼女の
ことだろう。

というか、それしか目的が思い当たらないのだが…

「あ、海斗様、どうかなさいましたか？ まさか…私に欲情…」

「違う！！　　というかみんなもういいだろ?!」

「幽霊メイドか。フムフム、中々に興味深い存在だな」

奈緒美先輩がじつくりとナギサを観察する。

ちなみに目つきはすごくエロい。この人はバイか？

「すごいすごい！ 触りたくても触れない！！」

聖子先輩は一人ナギサの胸や下半身などに手を伸ばして、透けてい
ることを実感していた。

というかどこに手を突っ込んでんだ。

「ていうかアクアさんとかは幽霊とか非科学的なものは信じなさそ
うですけど…」

「だって小説の世界だもの」

「は？」

「今のを聞き流すとイイ男ポイントがアップよ」

「意味不明な設定はいらないです」

歩ちゃんはすでに見知っているのでいいとして、他三人は予想外に
冷静だ。

何というか逆に俺が驚いている。

「とうにかみなさん冷静っすね」

「そりゃあ海斗のハーレムの一人だからな」

奈緒美先輩が意味深で意味不明というその言葉自体が意味分からな
いけど、そんな発言をした。

「ハーレムって何?!」

「あれ? ハーレム王に俺はなる! って言ってなかった?」

「意味分かんないし! しかもそんなことは絶対言っていない!!」

アクアさんの海賊的な発言は聞き流してください。
ってまた俺は誰としゃべってんだよ?!

「しょうがない。これから海斗はハーレムエンドを狙う主人公という設定で」

「そうね! そして名前をアイケンの一存に変えて…」

「うわぁ!! 何を言っているんですか!」

聖子先輩が突然著作権的にまずい発言をし始めた。

「大丈夫です。私が冬役を演じますから」

「そういう問題じゃない!!」

歩ちゃんも便乗を始めた。

「じゃあ海斗が会長役で」

「性別すら変わってる?!」

アクアさんも悪ノリをする。

というか意味分からない人多いからこの話はここまでにしよう！

「は、話を変えましょう！！」

「蒼穹に澄んだ瞳はコントラク…」

「うわぁ！！ 富○見ファン○ジァ文庫さん本当にごめんなさい！！」

「あゝ。今回は私が主役じゃないんでしょうか…？」

そんなとき、恐る恐るナギサが会話に入ってきた。

「何その勘違い」

アクアさんがバツサリと切り捨てた。

「ええ？！ 私の私による私のための世界を作る物語は？！」

「ノートもギアスも持ってないあなたには無理ね」

「ガーン！！」

アクアさんがまた切り捨て御免をする。

とうかナギサも自重して欲しい。

「ていうかもう用事は終わりましたよね？ なら帰ってくださいか？」

「ああ！ 弟君はナギサちゃんと二人っきりになってエロエロなこ

とをするんだ〜!! うわ〜ん!! ひどいよ! ひどすぎるよ!
」

「しないし、もう突っ込むのも面倒くさい!!」

「ええ?! 弟君ってまさか不能?!」

「ひでえ勘違いするんじゃない?!」

「…」

「そしてそのその他大勢!! 憐みの視線を俺に向けるな!!」

ツッコミが追いつかない。

もう一人じゃ限界なのでは?

「弟君…もう普通の人には興味ないんですね…」

「今日ラノベネタ多いな!! そして角〇スニ〇カー文庫さんごめんなさい!!」

何というかもいろいろなカオスな状況。

しかも話的に中身も何もない…駄目だ、駄作過ぎる。

「お、俺は思う!! ちょっといくらなんでもこの小説はひどい!」

「そうだね! よくわかるアイケンにしないとね!!」

「またラノベネタかよ!! そしてスーパー〇ツシュ文庫さんごめんなさい!!」

俺は何回謝れば済むのだろうか。

「で、遊ぼうか？」

「は？」

奈緒美先輩が今まですべての会話をなかったことにして、会話の再スタートを切らせようとしていた。

いくらなんでも展開が急すぎるんじゃないか？
まるでどっかの種運命みたいだ。

「あ、勘違いするんじゃないぞ！ お前と遊ぶんじゃないくて、お前で遊ぶんだ！！」

「うわぁ！！ 勘違いした方がいいという罨！！」

「次回は旦那様の本気です」

「ええ?! 終わり?! 終わりですか?!」

歩ちゃんによって俺の意識と視界がブラックアウトした。
：ちなみに、俺のその後については訊かないでください。

風の現代魔法の一存の憂鬱。つまり、カオス。（後書き）

ジョズエ……知ってたらメッセージください。

あなたは結構なマニアです。

海斗はG☆SPOTマスターの称号を得た！（前書き）

もう題名からして危ういですね。

海斗はG☆SPOTマスターの称号を得た！

中学のころはこんなことはなかった。

もつと俺は強気だった。

それがこんな風になってしまったのは、あの出来事のおかげだろう。俺はそうして今を生きているんだ。

…おっと。シリアスな雰囲気になっちまったぜ。

こんな話もう止め止め。いつものようにバカをやろう。

「アイケン活第17回、赤ちゃんはどこから来るの？」

「はiiiiiiii!?!」

俺は部室の黒板に書いてある文字を見て絶叫した。
いつまでたっても彼女たちの暴挙には慣れられない。

「どうした海斗。答えを知ってそうな声を出して」

「どんな声だよ!?!」

「弟君!?! 答えは!?!」

「聖子先輩は鼻息荒くしながら近づかないでください!?!」

俺はアイケンメンバーの4人によって壁に追い詰められた。
なんでいつもこんなことに…俺ってそんなに弄りやすい性格でもしてるのか?

「さて、海斗。問題だ。赤ちゃんはどこから来る?」

「いや…その…」

歩ちゃんの心底期待するようなまなざしが何か嫌だ。

「女性のお腹の中…」

「その名称は!?!」

「いちいち訊かないでください!?! 愛と何の関係が!?!」

「…自分で考えろ!!」

「うわぁ!! 誤魔化しやがりましたよこの人!!」

俺はそのうちに包囲網から何とか脱出する。

「あ、逃げられたぁ!!」

「私の考えだと海斗は恥ずかしがってるだけのツンデレね」

「うわぁ…かすつてもねえ…」

アクアさんは俺の分析が下手のようだ。

いや、冗談だと思うけど。

「少しは元気が出たようだし、今日はそのまま解散にしよう」

「は？」

そのとき、奈緒美先輩がそんなことを呟いて、みんな頷いた。

「お前は今日あんまり元気が無さそうだったからな」

そうだったか？

やっぱりあのことを思い出したからか？

「…そんなことは無いと思いますけど」

「やっぱり海斗ってツンデレじゃない」

「いやいや。そんなことは無いと思いますよ?」

やばい、ちょっと疑ってしまった。

「ま、今日は解散。これからカラオケに行こう!」

「え」

「いいねそれ!!」

「わあ! カラオケなんて久しぶりです!」

「え? え?」

「もちろん海斗も行くのよ」

俺が混乱している間にどんどんいろんなことが決まっていく。

「海斗。一つだけ言おう。カラオケは別にお前のためじゃない。単に私が行きたいから行くだけだ」

「マジっすか…」

奈緒美先輩が尊大な態度で俺に言う。

ああ…俺はなぜかこの人には一生逆らえない気がする…

「奈緒美ちゃんも素直じゃないんだから」

「聖子。お前、今日自慰行為禁止」

「そんなっ!?! 酷いよっ奈緒美ちゃんっ!?!」

奈緒美先輩と聖子先輩が非常識な会話をしている間に俺達はすでに準備を終えた。

ちなみに俺は準備させられた。

「じゃあカラオケヘレッツ&ゴー!?!」

「&はいらないよ!?!」

タ○ヤに何か言われないうちに俺達は部屋を出た。

ちなみに、○に間違ってても「カ」は入れないこと。

理由は敢えて言わず。自分たちで答えを「当ててんのよ」

…

…

……カラオケってこんなに狭かったっけ？

「キャッ！！　奈緒美ちゃんくすぐったいよ〜！」

「ああん！　何か擦れる…」

「この密着具合がたまらないな！」

「ほら、海斗も密着すれば？」

どうして俺達は2人部屋に強引に入ってるんだろう？

「冷房をさすがにつけないと暑いんですが…」

もうすぐ夏がやってくる。

それなのになんでこんな空間にずっといなくちゃいけないんだ？

「どうぞ勝手に」

「無責任な…」

俺は汗だくになりながら冷房を最強で回した。

「海斗の今の姿、事後みたいね」

「敢えて何のかは訊きません」

俺達は時間がもったいないので早速カラオケをスタートさせた。
というかすでに相当なタイムロスが：

「まず私から！ 乙家愛のさくらんぼで！」

「似合わなっ！！」

奈緒美先輩の意外な曲のチョイスに俺は、つい口を滑らせた。

「文句でもあるのか？」

「ナイデス」

俺は頭を低くして謝った。

「じゃあ次は私が甘い髪の乙女を歌うよ」

聖子先輩は結構似合ってるチョイスをした。
そんなこんなで「さくらんぼ」は始まった。

「きーみーとー繋がってーたいー。性的に」

「奈緒美先輩！ 名曲を台無しにしないでください！！」

「海斗、モタモタしていると私が入れるわよ。ちなみに私は1万年と
2千年前から愛してるで」

「何だその曲!？」

そしてカラオケリモコンは歩ちゃんに回される。

「私はハウエバー歌います」

「意外すぎだろ!!」

歩ちゃんのことだからアイドル系の曲を歌うものかと思っていた。
まあ俺もハウエバーは好きだけど…

「きーみーとー繋がってーたいー。性的に」

「もういいよ!!」

奈緒美先輩は結局歌詞をとどころ変え、または追加しながら歌いきった。

というかこの人に羞恥心は存在しないのだろうか？

「風がやさしく包む」

聖子先輩が歌っているときに、俺は何を歌うか考えた。

ポ○ノやラ○ク、ミ○チルなど、結構俺は知っているので、迷う。

「お前はササンのG☆SPOTを歌え」

「はあああ!？」

奈緒美先輩が強引に入れた曲は、絶対カラオケで俺が歌いたくない

曲だった…

しかも周りはみんな女性…

「絶対嫌だくくくく!!」

俺はジタバタしようとするが、残念ながらぎゅうぎゅう詰めのせいで動けない。

「うわああああああ!!」

…結局俺はみんなの前で熱唱することになった。
もちろんヤケです。

「海斗…上手いな…」

「このG☆SPOTマスター！」

「そんな不名誉なあだ名はやめてっ!!」

しかも俺の歌は予想外な好評を得ていた…
全く嬉しくないのは…なぜだ!?

海斗はG☆SPOTマスターの称号を得た！（後書き）

眠いね。本当に。

勉強しないとダメだぜっ！（前書き）

アイケンは全国の受験生を応援しています。

勉強しないとダメだぜっ！

「アイケン活動第18回 勉強」

黒板に書いてある文字を見て俺は驚愕する。

「べ、勉強？」

「Yes, it's studying (勉強だ)」

「ど、どういう風の吹き回しだ？」

俺は真面目に勉強に取り組む部員4人を見た。
何かおかしいものでも食べたのかもしれない。

「Why? What is funny? (どうした? 何がおかしい?)」

「何であんたらは英語で俺と話してるんですか!!」

ちなみに、部員4人はみな発音がうまかったりする。
それはそれで複雑だ。

「Today is such a day (そういう日なんだ)」

「すみません。日本語でお願いできますかね？」

「This is why YUTORI. (これだからゆとりは)」

「オイ!! ゆとりだけ日本語だっただろ!!」

そんな不毛で社会で糞の役にも立たない会話をし、理由を問い詰めた。

「今日は勉強だ。だから面白いことなど何一つないぞ」

「え…マジ？」

「マジです」

「マジかよ!!」

「これより、アイケン教育委員会を行う!」

「うわあ…またカオスにする気ですか…」

どこからか、「パフパフ」って音が聞こえ、変なのが始まった。

「海斗くんの答え」

「早っ! まだ何も言っていないよ!?!」

「そうか。それは気がつかなかった」

「気づく気付かない問題じゃないだろ!」

今日も部室はにぎやかだった。

この棟が他の校舎から離れていて本当によかった。

「むう…私の言うことを聞けないのかっ！」

「理不尽すぎだろ！」

俺が奈緒美先輩と口論している間に、何故か俺は全裸になっていた。

「な…!!！」

「秘技、瞬間脱衣殺法！」

「格好つけてるけど、ただの変態技じゃねえかあああ!!！」

アクアさんが俺の服を抱えていたので、俺は急いで近くにあったジャージを着た。

「それ、私のだよ。弟君♪」

「普通に考えれば俺のじゃねえよ!!！ 何やってるんだ俺は!!！」

「海斗の隠れた性癖が現れ出したな」

「現れてねえよ!!！ つうかねえよ!!！」

俺は脱ぐに脱ぐこともできず、裸にジャージ（女性の）を着ることにした。

何も言うな…

「さて、次の問題だ」

「何っ！？　ぐだぐだになって終わったかと思ったのにつっ!？」

俺は強制的に座らせられ、腕以外を縛られた。

「ところで、スーパー海斗君使う？」

「番組違うなオイ!!　そんな不思議を発見しちゃったよ!!」

「問題」

歩ちゃんが妙に高い声で読み上げた。

何かのまねをしているのは間違いないが、何とは言わない。

「この中で仲間はずれはどれでしょう？　A、セックス。B、性交、C、性行為、D、ファック。さあどれ!？」

「何の問題だよ!!」

「保健体育だよ弟君」

「さすがは保健体育万年100点の聖子だな」

「えへ、それほどでも」

奈緒美先輩が聖子先輩を褒めると、聖子先輩はすごくうれしそうに
した。

というか、嬉しいのか、それ？

「ちなみに、制限時間はあと3秒」

「ええ!?!」

「3、2、1……」

「え、A!?!」

俺は奈緒美先輩に焦らされ、適当に答えた。

「ブー。答えは……聖子」

「はいはい」

聖子先輩が現れ、俺に笑顔を向ける。

ああ……何て純粋な変態なんだろう……

「正解はCだよ。何故かというと、Cだけはやらなくてもいいからね」

「何を!?!」

「そりゃああれだよ。お互いの性器による体液の混ざり合いだよ」

「それ、凄く変態っぽく聞こえますから……」

この状況に慣れてしまった俺って……もうヤダ。
つうか何で俺は訊いたんだ?

「つまり、海斗はA、B、Dはただだけど、Cは済ませたってこと」

そんなとき、今日はあまりちよっかいを出さなかったアクアさんが

俺に仕掛けてきた。

「余計なことは言わんといってください。仕事無くなりますよ」

「大丈夫よ。たとえこれが二本撮りでも黙っておくわ」

「何の話ですか!!」

「こらこら、お姉さんたちを蔑ろにするな」

「そうですよ。いい加減放置プレイも飽きました」

そんな折、奈緒美先輩と歩ちゃんが俺を囲い込む。
なんだかあまりいい気分がしない。

「で、勉強はどうなったんですか？」

「そうだな、海斗で勉強するか」

「」「賛成!!」」

「な、何故だああああ!!」 (某コーポレーション社長風)

俺は意識を強引に失わせたのだった。

俺は残業帰りのサラリーマンみたく家に到着した。
疲れているのでとても眠い。

「もう寝るか……」

「お帰りなさいませ~~~~~!!!!!!」

「何い!?!」

すっかり家にいたもう一人のアイケンメンバーを忘れていた。

「俺の安息地が……ねええええええええええ!!!!!!」

「うるさい!?!」

今日も俺は隣の人に怒られましたとさ。

しっかりと受け継がれた……台場家の血。
そして、その血を吐くことも、もちろん忘れなかった。

勉強しないとダメだぜっ！（後書き）

さて、投稿の時間がやって来たようだ。

男の価値はサイズじゃない!! (前書き)

何だこの題名

男の価値はサイズじゃない!!

休日。アイケンは休み。家は安息地ではないので、俺は家にもいない。

つまり、外。俺は外出をしている。なんのために？

そりゃあ特に無いさ。友達？

そりゃあ特に無いさ。……俺ってさびしい……男友達……まさかのゼロ!!

ゼロのカイト……

「くっ……しかし俺はあきらめないぞ……!!俺は伝説の虚無の使い……」

「弟君!!」

「こ、この声は……!!」

俺のイタイ眩きを遮り、見知った声が俺のもとに届く。

俺は後ろから聞こえた声に振り返ってみる。

そこには、やっぱりというか、彼女しかあり得ないというか、聖子先輩がこっちに全速力で走ってくる。

「弟君……!!」

何と言うか、悲鳴に近い感じ。

助けを求めている感じだ。

俺は……

「逃げるっ!!」

俺は逃げ出した!!

面倒事に巻き込まれるのはゴメンだと思ってしまった。だって面倒くさいし。

何で休日までアイケンメンバーと過ごさなきゃならない?

「ああああ!! 待ってよ! 置いていかないでよ!!」

「うわあ!! 足早っ!!」

100メートル5秒台の脚の速さに、俺はあっけなく追いつかれた。
※この小説は、多少誇張された表現を使っております。

「ん? なんか頭に変な言葉が……」

「弟君!!」

「は、はひ!!」

俺は聖子先輩に肩を掴まれ、いつになく真剣な眼差しを俺に向ける。

「追われてるの。助けて」

「え? 嫌なんですけど……」

俺はやんわりと断りを入れた。
どうせ自分が蒔いた種だろう。

「何言ってるの!? 将来を誓い合った姉弟でしょう!?!」

「誓い合ってないし！　さらに言う姉弟はそんなことを誓わない
だろ！！」

「大丈夫よ！　世間の目を気にしているなら、私が……！！」

「というかその前に俺達は姉弟じゃないだろ！！」

「待ちやがれ！！」

「「！！」」

俺が聖子先輩と不毛な会話をしている間に、追っ手がやって来た。

「俺はここらへんで失礼……」

「キャア！　怖いよ……！！」

「ぐおっ！！」

俺は厄介事に巻き込まれる前に逃走をしかけたのだが、させてくれ
なかった。

俺の右腕は、聖子先輩の豊かな胸元に強引に挟まれ、腰は両手で縛
られた。

「はぁ……はぁ……追いついたぜクソアマアア！！」

そんなことをしている間に、社会の歯車として機能しなさそうなヤ
ンキー3人組が追いついてきた。

「デメエ！　何イチャついてんだゴルア！！」

「俺かよ!!」

しかし、怒りの矛先が向けられたのはまさかの俺。

「彼女いない俺のことバカにしてんのか!? ああん!」

「俺だっていないよ!!」

「ひどいっ!! 私たち将来を……」

「あなたは黙……」

「やっぱりそうかよ!!」

「うわあ!! なんかもう俺、何もかもどうでも良くなってきたよ!!」

ヤンキー達は勘違いをして俺のことを睨みつけてくる。

「いや、あのですね……あなたたちは壮大な誤解を……」

「うっせえ!! そのアマの責任は貴様が取りゃいいんだよ!!」

「……聖子先輩、何したんですか?」

むしろヤンキーを怒らせた聖子先輩の行動に興味がわいた。
俺は静かな声で尋ねてみる。

「いや、ナンパされたから、それに返したただけだよ?」

聖子先輩が笑顔で言う。何を言ったんだ、この人。

「大丈夫だよ。本当のことを言っただけだから」

「本当のこと？」

「そ」

聖子先輩がヤンキーの一人を指差す。

こんなときに攻撃をしないヤンキー達の優しさに感謝。

「3センチか、ゴミめ！！　ってね」

「は？」

「てめえ……一度ならず二度までも俺のダディを侮辱しやがって……！！！」

「ちよっ……まさか……」

「俺は3.002センチだあああああ！！！！」

「んな恥ずかしいこと叫ぶなあああ！！」

「そんなの誤差の範囲内よ！　私のサイズスカウターは小数点以下二桁を四捨五入するもの」

「そのサイズスカウターについては触れないで置いておきます」

俺と聖子先輩は対照的な発言をヤンキーに浴びせた。
つうか何てくだらないケンカの理由だよ……

「許せねえ……まずは男の方をやっちまえ!!」

「何で俺なの!?!」

俺は殴りかかってくる男の拳をヒラリと避ける。

「避けやがって……ミンチにすんぞこの野郎!!」

「あーいや……ここは穩便に、ね?」

「ね?　じゃねえよゴルベ―ザア!!」

月の民のような訳の分からない掛け声で俺に殴りかかってくるはぐれヤンキー。

だが俺はそれをヒョイとバックステップでかわした。

「きゃわしたあ!?!」

「弟君すごい!!」

前後から俺に向けた驚愕の声が飛ばされる。

俺としては当たり前のことをやっているだけなのだが……

「ま、まあここはお互い謝って……」

「何で俺達が謝らないといけないんだよ!!」

確かに。悪いのって聖子先輩じゃないの？

「もうその女ごと……!!」

ヤンキー達は聖子先輩にも殴りかかり始めた。

さすがにこれはまずいか……女の子に手を出させるわけにはいい。

「ふん!!」

俺は男たち二人にローキックを浴びせた。

クリーンヒットしなかったが、相手を転ばせるには十分だった。

「て、てめえ……!!」

だが、やはり逆効果らしい。

こういう男たちは懲りない奴らということに決まっているのだ。

「あんまりこういうことはしたくないんだよな……」

俺は三人が殴りかかってくるのを見て身構える。
多分、正当防衛が認められると思う。

「被害がっ!!」

「ぐえっ!!」

「増えるっ!!」

「ぐはっ!!」

「からなっ!!」

「ひでぶっ!」

三人とも俺の拳一発で尻もちをついた。

喧嘩は素人らしい。まあこういう奴らは意外と見かけ倒しだからなあ……

「ふう……」

「弟君すごいっ!!」

「え?」

ぱちぱちぱち……パチパチパチ!!!

「何い!?!」

いつの間にか俺達の回りをギャラリーが囲んで、拍手の嵐が俺達を襲っていた。

まさかこんなに目立ってしまうとは……

「まさか弟君が喧嘩強いなんて知らなかったよ!」

「別にこんなことが出来ても……嬉しくなんて……」

「ふざけ……」

「?」

そんなとき、後ろから声が聞こえた。
やられたヤンキーのものらしい。

「やがつてえええええ！」

「弟君！！」

男の手にはナイフ。その手が俺の胸に……届かなかった。

「ぐうっ!!」

俺は右手でナイフを掴んで何とか止める。

しかし、その際に走った激痛は、俺に右手の重傷を知らせる。

ボタボタと流れる血。しかし、俺はそれを気にせず、男の手からナイフを弾いた。

「何いつ!？」

「ナイフは……こうやって使うんだ!!」

俺は弾いたナイフを左手に持ち、男の首元まで持って行って寸止めする。

「ヒイツ……！」

「軍人ナメんな」

俺はナイフを地面に投げ捨てた。そして男はそのまま気絶した。少しビビらせすぎたか。

「弟君！ 怪我が！」

聖子先輩が俺の悲惨な右手を指す。咄嗟の出来事だったので、利き手の右手を防御に使ってしまったことは反省点だ。

「大したことないって」

数日ペンが持てなくなるだけだろう。

「明後日から期末……」

「あ」

何だそりゃあああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 !!!!!!!!!!!!!!!

男の価値はサイズじゃない!! (後書き)

冬休みの終了とともに更新スピードの低下が予想されますが、お許しください。

お姉ちゃんの右手、俺の左手（前書き）

久しぶりの登場

お姉ちゃんの右手、俺の左手

「弟君！ 次はこの問題ね！？」

「うす」

俺は何故か聖子先輩と一緒に、俺の家で必死に猛勉強していた。平日の真昼間に。

いや、何故かとかじゃないんだけど。理由は分かる。

聖子先輩なりに責任を感じているんだろう。特に今回は。面白半分でしたことが被害を招いてしまったのだから。しかも他人に。

しかし、ここまで必死に俺のために何かをしてくれていると思うと……なんか嬉しいね。

「聖子先輩。テストは自分の手で書かないといけないので……もう諦めましょうよ」

いくら勉強をしても、テストに答えを記入するのは俺の手。正確に言うと、俺の包帯ぐるぐる巻きの右手。

まあこれは建前だ。本音は……

「勉強したくないだけでしょ？」

「う」

何故か俺のことをよく存じて居られる聖子先輩。

この空気を読んでか、ナギサは静かだ。彼女は意外と気の利く女の子なのだ。

「でもテストのときはどうするんですか？」

「わ、私が男装して受けるわ！」

「無理にもほどがあるでしょうに……自分の勉強をした方がいいんじゃないですか？」

俺は聖子先輩に気を使うことにした。彼女も自分の勉強があるはずだ。

「大丈夫。余裕だから♪」

「やべっ殺してえ♪」

俺と聖子先輩は互いに笑顔になった。
顔と空気の温度差がかなり開いた気がする。

「はぁ……」

それにしても、本当に何とかならんかなこの状況。
俺としてはテスト勉強しなくていい！ ラッキー！
みたいに見える。
なんだかなー。

「お困りのようね、カイ君！」

「こ、この声は……！」

そんなとき、上空からメガホン声が聞こえてきた。
こんな常軌を逸した行動……そしてこの俺の呼び名……奴だ。

「姉ちゃん!!」

「ヤッホー!!」

「おわあ!!」

俺は急いで窓を閉めてパラシュートでやって来た彼女の侵入を防いだ。

「キャアッ!!」

姉ちゃんは見事に窓に衝突し、悲鳴を上げる。
こんな状況にやってくる我が姉はなんて人だ。

プルルルル♪

「あら海斗。多分真紀がアメリカ軍用ヘリを乗っ取ってそっちに……」

「遅えよ! さらに言うと勝手に電話に出ておいて「あら」じゃないだろ!」

俺の家の女性にまともなのがない……いや、妹がいたか……いや、何考えてるんだ俺は……

「弟君? どういうこと?」

「ご主人様?」

聖子先輩とナギサが今の状況に困惑している……ここは俺が何とか……!!

「ヤッホ」

「おわっ！ いつの間に俺の家の窓ガラスを取り外したんだ!？」

何て説明口調なんだ!! 俺乙!!!

「こんなの私に掛ければ……ん？ 女の子を二人家に引きずり込んで何をしようとしたのかな？」

「そんなことより俺の右手の怪我を気にしろよ!!」

「ああ！ 痛そうなカイ君！ これじゃ一人で慰めることもできないじゃない！ だから私が左手も使えと何度も何度も……」

「うるさいよ!？」

こんな大変な状況で、能天気な姉さんを見るとなんだか腹が立つ。そう思うだろう？ 同士よ。って俺は一人で何やってんだ!!

「あのう……」

「申し遅れました、私、海斗の姉かつオカズの台場真紀です」

「変な紹介すな……!!」

姉さんが妙に礼儀正しくふざけたことを言った。

「あ、私は弟君の部活の先輩かつオカズの川崎聖子です」

「私はご主人様のメイドかつ幽霊かつオカズのナギサです」

「何でみんなオカズが入ってるんだこら~~~~!!」

俺が叫ぶが、みんな聞かない。

「ささやかなものですが」

「ありがとうございます」

そして何故かそばを渡すウチの姉。

何かどこかおかしい。

「さて、私はね、カイ君を救うためにここに来たの」

「はい？」

どう考えてもそうは見えませんかよ。悪いですけど。

「究極変換剤、“右手に紙、左手にペン”!!」

「そ、それは……」

ナギサが、姉さんが見せてくる怪しげな薬を見て何かを呟く。

「知っているのか？」

「噂の攻撃力と守備力を入れ替えることができる……」

「はいはいスト~~~~ップ!~!!」

俺はナギサの口をふさぐ。

「~~~~~!~!!~!!」

「で、姉さん、それってどういう効果なんですか？」

「ふっふ〜ん、一日だけ利き手を入れ替えることができるのよ!~!!」

「な、何だって~~~~~!~!!」

俺はテンプレ通りのリアクションをした。

「で、冗談はいいですから」

「冗談じゃないわよ」

「いや、もうそのネタいいですから」

「だから本当だって」

「俺ももう慣れましたから、その手の冗談」

「だから冗談じゃないって……言ってるでしょうがあああああ!~!!」

「うおおおおっ!~!!」

そして俺は強引にその薬を飲ませられた。

「んぐっ……んっ……」

そして咽そうになるので、必死に飲み込む俺。
何だこの光景は。

「どう？」

「……」

姉さんが俺の顔を覗き込む。

「どう？」

「まずい」

「ならいいわ」

「いいんかい！」

俺は何も変わらぬ自分の体に、結構ホッとしていた。

「お話は終わりかな？」

「な……！？」

そんなとき、いつの間にかベランダに機動隊が並んでいた。
なんだか嫌な予感がバリバリすっぞ。

「台場真紀。ヘリジャックと女性アメリカ兵への強姦未遂で逮捕だ」

「ちよっ姉さん！ やり過ぎ……つうか女性！？」

「向こうがいいって言ってきたんだもの。性行為だと思うでしょ？」

「思わねえよ！ どういう状況か知らんが！」

姉さんはあっけなく捕まって連行される。

この光景には慣れた。

逆に、この光景を見慣れていない聖子先輩とナギサは驚愕して何もしゃべれないらしい。

ああ……奈緒美先輩のその顔を見てみたいものだ。

俺はいつものこととホッとしながら机に向かう。

「台場海斗」

「え？」

しかし、そうは問屋が下ろさない。

「覚せい剤所持、かつ服用で逮捕だ」

「これ覚せい剤なの………！？」

そしていつもの通り俺も連行された。

聖子先輩とナギサは相変わらずしゃべれず、その場に硬直している。

「俺は被害者だあああああ……！！！」

「お兄ちゃんの巫女服好き」

「それは違うぞ！！ 妹よおおお！！」

そして何故かチラリと出てくる妹もいつもと変わらず。

「次回へ続くんだって！！」

続く！！

といいな！

つか続け！！

お姉ちゃんの右手、俺の左手（後書き）

キャラクター紹介

台場真紀

海斗の実姉で、22歳。

職業は不明だが、某一流大学を首席で卒業している。

常に警察や機動隊の世話になっており、犯罪界や裏社会では有名な数々の特技を駆使して海斗に襲いかかる！

今日の海斗はジェントルマン！(前書き)

今回はあんまりエロくないような気がします。

今日の海斗はジェントルマン！

テスト当日。

聖子先輩と姉さんのおかげで俺はかなりの対策を練ることができた。テストは午前中だけ！ 午後からまた勉強のようだけど……とにかく！ 今日の俺はいつもと違うぜっ！！

え？

捕まった？

俺が？

あはは、何それ美味しいの？

「テスト始め！」

「っしゅあー！！」

「は？」

俺は何故か気合十分にテストを受け始めた。つうか何だ今の掛け声は。

気合が入りすぎだろ、俺。

恥ずかしすぎだろ、俺。

痛すぎだろ、俺。

だが、俺は出来る……！！

なんだか某ゼミの漫画の後半の主人公になったような気分だ！

そう、これ、前にやった問題だ……とか！！

胡散臭いと思ってたけど、案外当たるものなんだな！

→（先生が問題集から出すと言っていたのを聞いていない恥ずべき主人公）

俺は今、完全に世界から隔絶された。俺とテストを阻むものなど何

もない。

たとえば、時間でも俺に干渉することなどではしない……！！
それが……俺の固有……

「試験終了！！」

「って間に終了かよ！？」

と、言っておりますが、実際は結構出来た気がするのですよ、はい。
何が固有……何ちゃらだ。何が……ゼミだ。そんなの関係なしに実
力で俺はやったんだ。

しかしまあ……これも爽快な気分になったテストも久しぶりなもの
だな。

まあ俺にはレベルの高すぎる学校だし、ここは。

それでもがんばろうと思ったのは、聖子先輩や姉さん……は微妙だ
けど、とにかく俺のために頑張ってくれた人がいるから。

だから俺は精いっぱいそれに答えるべきだと思うんだ。

例え右手を怪我していても、俺には左手がある。

そして例え左手がダメでも、俺には折れることのない熱き心がある
！！

今の俺はマグマよりも熱い！！

「試験開始」

「何っ！？」

そんなことを考えている間に、今日最後の試験が始まった。さっき
は数学だったが、今回は古文。

まあどっちにしろ、中間で出来なかったことには変わりがない。

だが、俺は勉強をした。今回はかなり、だ。

前までの俺とはスペックが違うのだよ！ザ○とは違うのだよザ○とは！！

赤き彗星の海斗、いざ参る……！！

俺は通常よりも三倍速い動きで問題を解き、三倍痛々しいコメントを残した。

今の俺を冷静に見て、頭がおかしくないと思う方がおかしいだろう。なのに何故俺は気がつかないのか？

坊やだからさ。

……ねえ、俺って別にこんな痛い子じゃないよ？

頭の中で年がら年中こんな妄想なんてしてないよ？

だってこんなことを考えてたら、問題解けないじゃん。

じゃあこれは誰の頭の中かだって？

……気にするな。もうどうでもいいさ。だって……俺はすでに解き終わっているのだからな！！

「試験終了」

「ふっ……」

俺は前髪をかき上げ、格好をつける。

前にいた女子が俺のことを胡散臭そうに見る。

そりゃ落ちこぼれの俺がこんなことをしているのは変だろうな、そうだろうね。

でも、なめちゃあかんぜよ。

「ボヤボヤしてると、足元掬われるぜ」

「は？」

俺はその女子にそう告げて悠々と教室を出る。

テストが終わってここまで満足するとは……なんだか、今日、超楽しい！！

「トビウオが空を飛ばないのは何故だろうな！　こんなにも空は気持ちいいのに！　深海魚が長く水中にいるのは何故だろうな！　こんなにも外の空気は澄んでいるのに！　人形が心を持たないのは何でだろうな！　こんなにも心は晴れやかなのに！」

「え……海斗、あなた何してるの？」

「これはこれはマドモアゼル。私めに何の用でしょうか？」

「な、何この海斗……寒気がするわ」

「私めの言葉で心を寒くしてしまったのなら仕方がない。不肖、私めがコートをお貸し……ノー！！　オーマイガッ！！　今の時期は夏ではないか！　あなたを温めることはできない……神よ罪深き私を許したまえ……マドモアゼル、せめて私の心だけでも……受け取ってください」

「え……」

俺はアクアさんに跪き、手の甲に口づけを落とした。

「な……な……」

「それでは可憐なマドモアゼル。またお会いしましょう」

「絶対変！！」

アクアさんが何かを叫ぶが、俺の耳には届かなかった。

とにかく俺はまた、勉強をしなくてはならない。

テストは1日だけじゃないんだ!!

俺は急いで自宅に帰還し、勉強を再開させる。

ともかく……これで乗り切れる……!!

俺は左手でペンを持つとうとする……が。

「おや？」

左手でうまくペンが持てない。テスト中に酷使したせいだろうか？
確かに、普段使わないものを急激に使うと、こういう現象が起こったりするのだが……

「何故だ？ ペンが言うことを聞かない……」

俺はペン持ちに苦戦していた。

まるで昨日の午前中みたいな……ん？

何かが引つかかるぞ？

「……」

俺は昨日のことを思い出す。

『さて、私はね、海斗を救うためにここに来たの』

『究極変換剤、“右手に紙、左手にペン”……!!』

『ふっふっ、一日だけ利き手を入れ替えることができるのよ……!!』

「……」

プリース・リピート。

『ふっふっふん、一日だけ利き手を入れ替えることができるのよ!!』
プリース・リピート。

『ふっふっふん、“一日だけ”利き手を入れ替えることができるのよ!!』

「……」

ファイナル・リピート。

『“一日だけ”利き手を入れ替えることができる』

“一日だけ”

「……ふう……」

人は、驚く前、心を落ち着けるのかもしれない。

「何じゃそりゃああああああああああああああああ!!」
「!」

「ご主人様!？」

ナギサが俺に慌てて駆け寄る。
だが俺はそんなことを気にする暇なんか無かった。

「終わった」

「え？」

「もう……終わったんだ」

「海斗様……海斗様あああああ……！」

「何だ台場。その怪我、川崎から聞いている。お前はテスト受けなくとも成績つけてやる」

「は……ははは……」

初めからこうすれば良かったんですね……天国のお婆ちゃん……俺……やっぱバカだな。

今日の海斗はジェントルマン！（後書き）

アイケンWiki

エロコメというジャンルでスタートさせた、小説家になろうに掲載されている小説。作者は霞川悠。序盤はさほど過激ではなかったが、だんだんと性描写が増えていった。しかし、ネタギレなどによるものか、エロコメだけではなく、パロディや普通のコメディだけの話も増え始めた。更新は不定期すぎ。

キャラクターの紹介ですー(前書き)

性転換カテゴリは今は、スルーしてください。

それと、アイケンの好きなキャラクターを書いてくれると助かります。

目標とかを決められるので。

キャラクターの紹介ですー

台場海斗

創世学園新入生。超ラブコメ体質。まあ説明しなくても分かりますよね…

家族構成は祖父、祖母、父、母、姉、妹、弟。自分は長男。現在は一人暮らし。

一人称が安定せず、俺と僕を場合によって使い分ける。

心の中では結構毒舌であり、かなり内向的である。

何故だか喧嘩も強いという設定が追加された。

幕張^{まくはり}アクア

偽名。この名前は小説家になろうで使っているペンネーム。

身長は159センチ（修正）。スリーサイズは…要望があったら書きます。

ヘアバンドと後ろの大きいリボンがチャームポイント。

言うまでもなく、変態。そして美少年好きで、アイドルオタク。

性知識が豊富すぎる。が、あまり表に出さない。

性格はクール系であるが、本人曰くデレもありますとのこと。だが、たまにヤンもあるらしいです。

アイケンメンバーでは比較的まともな部類に入ってしまう。

渋谷^{しぶや}奈緒美^{なおみ}

創世学園3年生でアイケンの副部長。

サディストで、人を虐めるのが大好き。というかセリフがほとんど言葉攻め：

言うまでもなく、変態。そしてバイでもある。

身長は168センチ（修正）で、結構高め。スタイルは抜群。（詳細は省く）

海斗のことは面白いおもちゃのように思っている。

が、何だか最近はやっと海斗を見る目が変わりつつある。

言うまでもなく、アイケンの裏リーダー。

川崎聖子

海斗より二つ年上の3年生。

血の繋がらない弟を欲しがる、言うまでも無く変態。

身長は162センチで、スタイルは普通。だが、かなりの変態。と
いうか多分一番だと思われる。

奈緒美とは親友で、肉体関係もある。

海斗を誘惑することに今はハマっている。

海斗のことを意外と面倒よく見ることから、母性本能が高い。

天才肌の人間で、奈緒美と共に成績抜群。

町田歩
まちだあゆみ

新入り研究部員。レズっ気がある女子。

主人公と他3人にベタボレ。1年生。隠れてエロい。

身長は150センチ。発育不良。残念な体型。エロい、というか無邪気。

無邪気すぎるせいか、人より羞恥心が少ない。

海斗のことを旦那様と慕っており、婚約したものだと勘違いしてい

る。

成績は意外と優秀であり、運動神経も実は悪くない。というか、拔群。

少女マンガが大好き。

山手^{やまして}なつめ

愛の研究部顧問教師。自由奔放で、腹黒い。

ちなみに言うまでも無くエロいです。

初対面で、海斗のファーストキスを奪い、海斗を失神させた。

残念ながら、出番が非常に少ない。その訳は……

台場真紀

海斗の実姉で、22歳。

職業は不明だが、某一流大学を首席で卒業している。

常に警察や機動隊の世話になっており、犯罪界や裏社会では有名。数々の特技を駆使して海斗に襲いかかる！

例、飛行機の操縦、ピッキング、爆破物処理、スカイダイビング、変装、ストーリーキング……

この通り、多種多様な特技を持っている。

ナギサ

本名不明だが、海斗の祖父にはそう呼ばれていた。

今は、亡くなっており、海斗の家でメイドとして生活している。言い忘れたが、もちろん幽霊である。

死因は流れ弾が頭に当たって即死である。
海斗には触れることができるが、触れられないものが大量にあるなど、未だに説明されていない。

台場陸斗

海斗の弟。名前だけの登場。
どうやら、真紀曰く、まだ精通が来ていないらしい。

台場陸海空^{だいばせかい}

訳の分からない名前で、訳の分からない漢字を使っている、海斗の祖父。

海斗が幼いころから懐いていた相手であるが、海斗の入学式の際にハワイへバカンスへ行くなど、意外と薄情。

ナギサとも関係があり、詳細はまだ描かれていない。

ただ、ナギサに手を出す前にナギサは亡くなったため、ナギサは処女の可能性が大。

海斗の妹

名前はまだ公開されていない、海斗の妹。
海斗のことをよく知っているそぶりを見せる。

海斗の母

名前はまだ公開されていない、海斗の母。
勝手に人の家に電話を接続させるという特殊能力持ち。

堀井

海斗のクラスメートで、成績優秀な特待生。
自分の成績を鼻にかけており、落ちこぼれの海斗を見下している。

梁瀬

海斗のクラスメート。それ以上でも以下でもない。

海斗の祖母

名前は不明だが、すでに他界している。

キャラクターの紹介ですー(後書き)

アイケンで好きなキャラクターは!?
の質問に出来るだけ答えてくれると嬉しいです。

アイケン外伝だいばけ 我が家への帰還（前書き）

アイケンの好きなキャラクターを書いてくれると助かります。
目標とかを決められるので。

アイケン外伝だいはげ 我が家への帰還

木々が生い茂る森の中……

耳を劈くほどの蝉つんざの声。

俺はそんな森、いや、ジャングルを歩いていた。

「そこかっ!!」

俺は飛んできた矢をサッとかわす。

俺の心臓を狙ってやがった、今の一撃。

やべえよ、本気で俺を殺るつもりらしい。この一家は……
だが、やっぱり顔を出さなきゃまずいよな……台場家には。

「ヤッホー！」

「来たわよ」

「来ましたです」

「折角来てやったんだ。歓迎しろ」

「何ですか。みなさんお揃いで」

テストが終わり、二学期が終了するまでの数少ない間、そう、いわゆるテスト休みだ。

そのの到来と同時に、アイケンメンバーも俺の元に到来したのだ。迷惑極まりないですよ、全く。

「遊びに来たに決まってるだろ。お前で」

「えーとその……すいませんがそれは無理です」

「は？」

俺の言葉にアイケンメンバーは目を丸くする。

「俺、今から実家に帰るんです」

「何だと！？ 連れて行け！」

奈緒美先輩がそんなことを言う。
だが……彼女たちを巻き込むことは出来ない！

「駄目です!」

「どうしてかしら? そもそも実家帰りにそんな軽装だなんて……おかしくないかしら?」

「そうなんですけどね……この格好で無いといつ殺されるか分かりませんから」

「「「はい?」」」

「まあ詳しいことはナギサに言ってあります。彼女は事情に詳しいのでそっちに訊いてください。それでは……」

「「「……」」」

俺は足早に家を後にする。

時間をかければかけるほど、俺の身が危険になる……とにかく……急ごう!!

俺は振り返らずに走った。アイケンメンバーには悪いが、命の方が惜しい。

と、言うわけで俺は今、実家への道のりを歩いているのだ。
今はその手前のジャングル舗道。トラップなんて当然だ。

「はぁ……俺は負けないぞ……！」

俺は半年ぶりにこのスリルを味わうこととなった……

―台場家―

「海斗はもうそこまで来てるそうよ」

海斗の母親、台場家経理担当、台場由紀だいば ゆき、4●歳。

「お兄ちゃんが？」

海斗の弟、台場家期待の新星、台場陸斗だいば りくと、10歳。

「でも、ここまで来るのに生き残れるのかなあ？」

海斗の従兄、台場家開発担当、台場北斗だいば ほくと、25歳。

「何ですって……？ 兄さんがやられるとでも？」

海斗の妹、台場家家事担当、台場亜紀だいば あき、14歳。

「例えの話じゃない。熱くならなくても、彼の強さは分かるでしょ？」

海斗の従姉、台場家医療担当、台場南未^{だいばみなみ}、20歳。

「そんなの当然よ……」

「ま、最低でも俺のトラップはクリアしたようだが、あいつは」

海斗の叔父、台場家警備担当、台場哨空^{だいばしょうくう}、48歳。

「一難去ってまた一難……フフ……」

海斗の従妹、台場家情報処理担当、台場西海^{だいばさいみう}、13歳。

「あなた、帰ったらどうするのです？」

「どうもこうもない……性根を叩きなোস」

海斗の父、台場家当主、台場正空^{だいばせいこう}、50歳。

「こりゃ、帰ったら大変だな。兄さん、ほどほどにしなよ」

「分かっている」

これにて台場家の風景終了。

落とし穴、電気網、岩落とし、爆弾、数々のトラップを何とか避けて、俺はどうとうたどり着いた。
懐かしい我が家に。

門の両側にある獅子の銅像が俺を睨みつける。
帰って来てしまった……ここに。
出迎えは……

「兄さん！」

「お兄ちゃん！！」

「陸斗！ 亜紀！ 久しぶり……って亜紀はそれほどでもな」

「兄さんのバカあ！！」

「ぐおっ!!」

帰って来たたとんに俺の首を締め上げる我が妹。
我ながらバイオレンスな妹を持ったものだ。

「お兄ちゃん、帰って来てくれたんですね!」

対照的に、純粹に俺を慕ってくる我が弟、陸斗。
全くもって嬉しい限りだ。どこかの妹もこれくらい優しくしてほしい。

「そ、そろそろ離してくれないか……」

「はっ! 何勝手に死にかけてんのよ兄さん!」

「お前が殺しかけたんだろうが!!」

「それよりお兄ちゃん……父さんがお待ちです」

「う」

何だか嫌な予感が漂うのだが。
俺、死ぬ?

「亜紀、陸斗、後は頼んだぞ」

「くだらないこと言ってないでさっさと行きなさい!!」

「お、おう」

俺は亜紀に背中を押され、台場家の屋敷の中に足を踏み入れた。内装は半年前と変わっていないようだ。そりゃま、当然か。

「戻ったか」

「!？」

俺は声の聞こえた上を見る。

そこには、俺の父親が俺を見下ろして立っていた。

「と、父さん……」

「挨拶はどうした？」

「た、ただいま帰りました……」

「ふむ。一通り挨拶を済ませたら、道場へ来い」

「は、はい……」

俺はこれからどうなってしまうんだ!？

※アイケンはエロコメです。

アイケン外伝だいはけ 我が家への帰還（後書き）

アイケンはどこに終着するのか分かりませんね

アイケン外伝だ いばけ 触っちゃいやあ (前書き)

更新するの、忘れてたああああああ!!!!

アイケン外伝だいはけ 触っちゃいやあ

幾重にも張り巡らされたトラップを潜り抜け、俺はたどり着いた。
我が家に。

そして父からの死刑宣告。

「お前は死ね」

い、いやいやまだ早いつて!!
でも何となく嫌な感じがするのは確かなんだよな……

「久しぶりだね海斗」

「北斗従兄さん」

俺に話しかけてきたのは、従兄の北斗さん。
人をからかうのが趣味の困った人だ。

「今日、当主が刀を研いでただけど、どうしてだと思う？」

「え……」

この人はからかうのが趣味の人！ からかうのが趣味の人！

「じよ、冗談ですよね？」

「南未に訊いてみな？ 同じこと言うと思うよ」

「そ、そんな……」

北斗徒兄さんの顔はニヤニヤしていた。
この人、素で俺の今の状況を楽しんでる……

「海斗。占いではこう出てる」

「お、おう何ださみゆ」

彼女は俺の従妹の西海^{さみう}。言いにくいので、みんなさみゆと呼んでいる。

こんな名前を付けた哨空叔父さんは、何を考えていたのだろうか。本人いわく、夢に出てきた世界樹が教えてくれたらしいのだが……信憑性に欠ける。

「自らの道を切り開くのは自分。でないと、死ぬ」

「な……」

さみゆまで俺を脅してくる。
みんな俺に恨みでもあるのだろうか……

「（なあ、さみゆ、それって人間誰しもそうじゃないか？）」

「（北斗は黙ってて）」

「（へいへい。さみゆのお好きなように）」

「どうした？」

何か北斗徒兄さんとさみゆが話していたようなので、気になったの

で訊いてみたが、二人とも肩を竦めた。

「？」

俺は道場へと歩いていくことにする。

足取り重いけど！！

「海斗」

「南未従姉さん！」

道場の入り口で南未従姉さんが俺を待っていた。

「久しぶりね。見ない間に背、伸びた？」

「どうかな？」

「ふふ、それで……後でお姉さんの部屋に来ない？」

「い、いえ……遠慮しておきます……」

この南未さんと言う人は、俺の姉さんと波長が合うためか、性格も少し似ている。

まあつまり……俺を誘惑する人間ということだ。

従姉なだけに、タチが悪い。だって結婚できるし。

「大丈夫よ、真紀とは違って同意を取るから……ね？」

「そ、それじゃあ俺に今、密かに薬を打とうとするのにも同意を取って下さいよ！」

「気づいてたのね……」

そしてさりげない行動で俺を陥れることをする人でもある。だからか、俺はこの人の部屋には一度も言ったことが無い。そして南未従姉さんは、注射器をポケットに仕舞い込んだ。

「とりあえず、死に行きますよ」

「死ぬ前には精子を頂戴ね。実験に使うから」

「何のだよ!？」

俺は彼女と別れて、道場への入り口の前に立った。

まずは深呼吸。すーはーすーはー。

よし、準備完了。

俺は道場の扉を思いっきり開けた。

「やはりな!」

その途端に、3本の矢が俺に向かって飛んできた。

俺は道場の扉でそれを防いだ。

「一応俺も台場家の人間ですからね……」

「ふん。今の攻撃、防げて当然だ。台場家の人間ならな」

「って陸斗もか!？」

「そうだ。あいつはすでにジャングルで1カ月過ごしたことがある」

「げっ！ 何つう小学生だよ……」

陸斗もあんな優しそうな顔をしておきながら、実際はかなりのやり手らしい。

将来有望と言うところか。

「さて、貴様。女にうつつを抜かしているようだな」

「な……!!」

父が俺に信じられない言葉をぶつける。

俺が女にうつつを抜かす？ アイケンメンバーのことか？
笑えない冗談じゃないか!!

「真紀の情報によれば、貴様は普通の女に貞操を奪われかけたらしいじゃないか」

「ね、姉さんの情報か……」

どうやら姉さんは俺の監視を任務としていたらしい。
あの人、結構侮れないな。

「ですが……姉さんや南未従姉さんはともかく、普通の女の子には護身術なんて使ったら死んじゃいますよ!？」

「そうだな、だからそれに関してはどうでもいい」

「いいんかい!!」

父の変わり身の早さには付いていけない……
いや、これがペースで翻弄するという奴か……!!
→（考えすぎ）

「問題なのはその右手だ」

「うっ！」

「喧嘩素人のヤンキーごときにそんな傷を負わされおって……」

「返す言葉もございません」

「と、いう訳だ。お前には試練を与える」

「試練？」

俺は首をかしげる。

「貴様の負傷は油断と隙が生んだものだ。よって、お前を今から一週間、つまり1学期の終業式まで人に触れることを禁止にする」

「は？」

「分からぬか。人に触れることを禁止する。つまり、握手、肩たたき、その他もろもろ、この家で人との接触を禁じる。もちろん、この家の敷地内から出ても厳罰だ」

「マジか……」

良く分からないけど、意外と楽そうだ。

「一つだけ言う。油断すると、すぐに終わるぞ」

「……」

俺は気を引き締めて、道場を出た。

「ふう……」

「痛っ！」

「？」

そのとき、俺の前で南未従姉さんが転んでいるのが見えた。
何でこんな変なところで……

「あ、海斗。ついだから助け起こしてくれる？」

「あ、はい」

俺は彼女に手を伸ばそうとする。

『人に触れることを禁止にする』

「!!」

「もらった!!」

「くっ！」

俺は急いで南未従姉さんから腕を引っ込め、距離を取った。

「さすがの反射神経ね」

「南未さん、どういふつもりですか？」

「そんな怖い顔をしないの」

俺はいつの間にか南未さんを睨みつけていたらしい。
昔の癖が出てしまったようだ。

「海斗に嫌われたら嫌だから教えてあげる。私たちには褒美を与えられたの」

「褒美？」

「そう。海斗に触れた者のみが得られる褒美。私の場合は……海斗の精子」

「はいいいいいい！？」

「覚悟することね！」

俺の地獄(?)の日々が今、始まった。
というか今までの緊張感返せ。

アイケン外伝だいばけ 触っちゃいやぁ (後書き)

感想と評価を出来るだけしてください。

……あまり放置されるとモチベーションがまた低くなるので……

アイケン外伝だ いばけ 台場さん家のガーゴイル (前書き)

何じゃこの小説!!

ストーリーがスカスカでは無いかっ!!

アイケン外伝だいばけ 台場さん家のガーゴイル

『一週間、人に触れることを禁止にする』

そんな父からの命令により、俺の地獄(?)の日々が始まったのは
ついさっき。

従姉の南未さんは邪欲のために俺に襲いかかって来た。

『褒美は……海斗の精子』

「くっ……二重の意味で捕まってたまるか!!」

俺は急いで逃げた。触れてはいけない……すなわち、肉弾攻撃は出
来ない。

だから、俺の出来ることは自然と限られる。

遠距離攻撃、または逃走。ただ、俺より強い人が台場家には最低で
も二人いる。

父と……叔父さんだ。だがまあ父さんはあんまり参加しなさそうな
ので、当面の問題は叔父さんだろう。

「海斗! 大人しく捕まった方がいいわよ! そうすれば気持ちの
いい方法で精子を出させてあげる!」

「どちらにせよ、勘弁です!」

足は俺の方が速い!

廊下を急いで駆け抜け、1階へと降りる。

南未従姉さんのくちぶりから察するに、このことは一家全員が知っ
ており、さらに全員が俺を狙ってくるだろう。

つまり、この場に安息の地など……ない！

「僕が助けてあげようか？」

「ほ、北斗従兄さん!!」

そんなとき、俺の真横に北斗従兄さんが現れた。彼は俺に笑顔を向けているが、油断はできない。

「南未のだけどねっ!!」

「うおっ!!」

北斗従兄さんは俺に北斗千裂拳を繰り出してくる。この人は台場家一の暗殺拳法の使い手なのだ。

「お前はすでに、死んでいる」

「残念でしたが、一発も当たってません」

「何い!? 今のが決め台詞なのにつ!?」

ただ、技を出した後に必ず意味不明な決め台詞を言うので、相手するのとは楽だったりする。

「北斗兄の無能」

「うぐっ……南未、どこかの中尉みたいなことを言わないでくれ……」

俺はこの二人から逃げることに成功した。
だが、依然として状況は不利のままだ。

「海斗」

「おわぁ!!」

俺は急いで後ろから聞こえた声に振り向きつつ、その場から飛び退いた。

「惜しい」

さみゆの手は空を切っていた。

「お前は気配を消すのが上手すぎる。ただ、詰めが甘いな」

「ヤンキーごときに負傷した海斗に説教されるなんて屈辱」

「お前は俺を虐めるの好きなのな」

さみゆは相変わらず読めない表情で俺の前に立つ。

「ところで海斗、私が宅配で送った北斗の極秘コレクション、読んだ？」

「は？」

「題名、あなたに教えてア・ゲ・ル」

「お前のせいか~~~~~!!!!」

さみゆは俺に少なからず干渉していたらしい。
まさかこんな家が日本の一般家庭じゃないよな？

「悪いがお前につきあつてゐる暇はない」

「あら海斗、お昼ごはん出来たわよ」

「家にいるんなら電話で俺を呼ぶな母さん!!」

そんなとき、近くの電話から母さんに呼ばれた。
この人の能力は訳が分からない。

「と、いう訳だ。一時休戦にしないか？」

「そんなんだから、足元を掬われるっ!!」

「おっと」

さみゆの攻撃を全て避ける俺。
こんなことでやられてたまるかつーの。

「まあまあ、とりあえずは昼食だな」

俺はダイニングへと向かった。

「そこっ!-!」

「くっ!」

ダイニングの扉を開けた途端、南未従姉さんと北斗従兄さんが俺に襲いかかって来た。

「あんた達！！！！！！！！！！」

「!？」

しかし、母さんが俺達に怒鳴りつけ、騒動を静めた。

「食事の時間に何やってるの!？」
「アンタたち全員に雷落とすわよ」

「す、すいませんでした……」

「申し訳ありません」

「ごめんなさい」

この母親は本気で雷を落としかねない。
そんな母親なのだ。訳の分らない、得体のしれない能力を持っているのが俺の母さんだ。

「兄さんは私の隣です」

「あゝゝゝ！！亜紀姉さんずるい！！」

「陸斗には悪いけど、兄さんは私の所有物だから」

「そう言いつつ、俺に触れようとするなよ、妹よ」

「そ、そんなことするわけじゃないっ!! バカじゃないのっ!?!」

亜紀は照れ隠しにそっぽを向く。

こいつにも困ったものだ。

うんうん、平和なり平和なり。

と言っている場合かどうかは甚だ疑問ではあるのだが。

「あれ? 父さんは?」

「防衛省に帰った」

父の姿が食卓に見当たらないので、疑問を口にする俺に、叔父さんがそう答えた。

言い忘れていたが、ウチの父親は自衛隊の人だ。

「忙しい人ですね」

「ほら早く食べなさい!」

「は、はい!」

そういえば忘れていたが、食後にまた例のアレが再開されるんだっ
た。

だからあまりお腹いっぱいにならないようにしよう。

「ごちそうさまっ!」

「ごちそうさま」

「!?!」

俺が食べ終わって席を立つと同時に、さみゆ席を立った。
そういえば彼女は小食なので、早く食べ終わっても不思議ではない。

「くっ……!!」

「逃がさない」

俺とさみゆは共に部屋を駆け足で行った。
母のこめかみに青筋が浮かんだのは、言うまでもない。

アイケン外伝だ いばけ 台場さん家のガーゴイル（後書き）

感想、評価、お待ちしております。

アイケン外伝はいばけ **海斗は誰の手に堕ちる!?** (前書き)

またしばらくお休みです。

最後の外伝です。

というか8部、13部、25部人気過ぎ(笑)

アイケン外伝だ いばけ 海斗は誰の手に堕ちる!?

万人の万人に対する闘争。

台場家の台場家に対する闘争。

……ちよつと言つてみたかっただけ。

とりあえず、同じことが繰り返されると思われるので、詳しいことは省く。

あれから5日経ったのだ。そう、俺が来てから。

なのに俺がピンピンしている理由は、まだ俺は捕まっていないからだ。

この場に安息の地が無い俺は、睡眠時間も、食事も満足にとれない。睡眠に至っては、まだまともにベッドで寝たことが無い。大抵は物置か、木の上だ。

中々にクレイジーでエキサイティングでヴァイオレンスな生活をしているものだと、我ながら感心する。

しかし、何だかあまりいつもと変わらないと思うのは何故だろう？
それだけアイケンメンバーとの生活もクレイジーでエキサイティングでエロティックだからだろう。

ん？ さっきと一部違うって？ 細かいことは気にすんな♪

「待てええええええ!!」

「今日こそ捕まえるわ!!」

「お兄ちゃん覚悟!!」

「兄さんは私のペットよ!!」

「絶対負けない」

上から、北斗従兄、南未従姉、陸斗、亜紀、さみゆである。

どうやら個人ではダメかと思ったか、最近では集団で俺を追い詰めることにしたらしい。

だが、俺はやられなかった。

まあこんなところで負けるわけにはいかないから。何せ命が掛かっている。

「よしみんな！ 例の作戦だっ！！」

「黙って無能兄」

「ぐうっ……」

北斗従兄さん脱落。

「さみゆ！ 下にバナナの皮！」

「え」

さみゆ脱落。

「私は絶対に諦め……」

「南未！！ いつまで大学さぼってるの！！」

「うう」

母さんに連れて行かれる南未従姉さん。脱落。

「くっ……あっという間に二人に……陸斗！ ジェットストリーム……」

「亜紀姉さん！ 人数が足りません！」

「そ、そんな……！！」

亜紀、脱落。

「で、残ったのがお前だけって言うのがなんかな……」

ちなみに、この5人の中で一番手ごわいのが陸斗だったりする。
ハッキリ言ってかなり強い。

「お兄ちゃん……僕は手を抜きませんよ！」

「アンタも小学校あるでしょ！」

「ああ！！」

しかし、いいところで母さんに連れて行かれる陸斗。

……全員脱落。はあ……

というのがしばらく続いているおかげで俺は何とか生き延びている。

正直、叔父さんと母さんが参加していなくて良かったと思う。

彼らが参加していたら、地球が割られるかもしれない。

「あら海斗、言い忘れてたのだけど」

「俺の存在に今気がついたのかよ！」

母さんは俺の存在に気がつかなかったらしい。
そんなに俺って影薄いかな？

「カイくん！！」

「ね、姉さん！？」

そんなとき、姉さんが窓ガラスを割って侵入してきた。
そして、問答無用で俺に抱きついてきた。

「真紀がもうすぐ来るわよ」

「遅いよ母さん！！」

姉さんは俺に頬ずりをしまくっている。
ん？

何か嫌な予感が……

「海斗」

「と、父さん！？」

そしていつの間にか帰って来た父さんが俺のもとに現れた。

「海斗。お前には失望した。まさか1週間も耐えきれんとは」

「はっ！　　そういえば！！」

俺はこの家に来た日のことを思い出す。

『一週間、人に触れることを禁止する』

「ああ!!」

今、俺は姉さんに抱きつかれている。

「ん〜? カイ君、何のお話？」

「……無自覚って怖い」

「罰としてお前は帰るまで常にうさぎ跳びで移動してもらう」

「何iiiiiiii!?!」

この叫びは、予想外に父がお茶目な罰を与えたことに対してだ。
まさか俺の父がそんな命令を出すとは……

「本当は紐なしのバンジーだったが、妻が止めたのでな」

「いや、それ普通に俺死にます、はい」

「そして、勝者には褒美を与えることになるのだが……」

「え？」

父さんが姉さんを見る。

「褒美? 私に? 私ハカ」

「褒美なしだ」

「ええええええええええええええええ！？」

姉さんが大声で叫んだ。その声には残念な感情が多分に含まれていた。

「お前に褒美を与えると、モラルとかそんなこと関係のないものを要求されそうだからな」

「さ、さすがはお父さん。よく分かってらっしゃいます」

「合ってるのかよ!!」

「具体的にはカイ君のピーを私のピーに……」

「言わんでいい！」

「あと……もし次に補習にかかったら、独房にぶち込むから覚悟するんだな」

「1学期のことばれてる!？」

父さんはそう言って俺の前から立ち去った。そして姉さんはその場に崩れ落ちた。

「うう……私は自分の欲望に忠実なだけに……」

「その発言、聞かなかったことにします」

いんたーどあうと。

さようなら。

アイケン外伝だ いばけ 海斗は誰の手に墮ちる!?(後書き)

評価、感想をお待ちしています。

女の子と女の子と女の子とやっぱり女の子（前書き）

とりあえず、更新。

話はそれからでしょう。

女の子と女の子と女の子とやっぱり女の子

夏の日差しが俺を照らし、とても清々しい気分にする。

今までじめじめした森の中を歩いていたからなおさらそう感じる。

俺、台場海斗は、この森を出るまでに30回近く殺されかけました。ところでみなさん、実はこのお話、第35話なんです、数えている人いるでしょうか。

いねえだろうなあ。

あーいいお湯っすね。

そうね。

まさか混浴だと思いませんでしたよ。
ええ。

「……」

いつの間にか天然の露天風呂に入っている俺の横には、裸の女性が。もちろん、露天風呂に浸かっているのだ。

「……何でアクアさんがここにいるんですか？」

「そろそろアイケンメンバーの出番が必要かな？　と思ったからよ」

「だからってこういう形で強硬出演せんでもええがな！」

「海斗って昔と比べて随分と免疫が高くなったわよね」

「悔しいですが、もう慣れました」

アクアさんは他の人たちに比べて暴走度合いが低い。

ただ、一番頭が切れそうで怖い。

「そういえば私たちってキスをまだしてなかったわね」

「べ、別にする必要ないしっ!!」

俺はアクアさんから距離を取る。

ちなみに、右手の怪我はもう治っているので、俺は万全な状態だ。
準備完了、いつでもいけます。

「何が!？」

「はい？」

「いえ、何の準備が完了したものなのかと……」

「ま、まさか海斗……しょ、しょうがないわね……本当に発情期なんだからあ」

「何で頬を赤らめる!? とうか何かあなたは勘違いをしている! いいかね!？」

俺はアクアさんを指差し、大声で説明を始める。

「台場海斗という人間はですね、結構恥ずかしがりやで、純情な人間なんですよ! そんな人間がですね、そんなことばを言うわけがないじゃないですか!! さらに言うそうですね、俺はうさぎ跳びで疲れているんですよ! そんなの知らねーよ、とか言われても仕方ないですがね、それくらいは察するぐらいの洞察眼を持ってですね、節度と誠意のある言葉を……」

「そんなの関係無いわ」

「ひどっ！ 俺の長文を一言でブツタ斬られた！！」

「それにね、私は常に自分の欲望に忠実なだけだから。今までは美少年アイドル達がその欲望の餌食になっていたのよ。それがあなたに変わっただけ。何かおかしい？」

「お、おかしいな……メチャクチャおかしいはずなのに……アクアさんだと考えると、おかしいところが見当たらない……！！」

「さて」

アクアさんはすくっと立ち上がって俺の方へゆらりゆらりと接近してくる。

これは台場海斗至上最大のピンチ……でもないけど、ピンチだと思うんですが、みなさんどうでしょう！？

「だからみなさんって誰……………！！」

「変態奥義、ピンポイント湯煙消し！！」

「おわぁ！！」

何故か俺の下腹部だけ湯煙が無くなっていた。

というか、今自分で変態奥義って言ってたよね？

「変態奥義その2！ 遠距離拘束！」

「何い!？」

いつの間にかアクアさんは鎖を持っており、その鎖を俺に向かって放ってきた。

ちなみに、すごく……うまいです。

「この鎖は、対海斗用に作った念を込めた鎖よ」

「何!？」

「これで縛られた相手は、強制的に絶の状態になってしまうのよ」

「いや、俺は念能力ないんで……」

「これで縛られた相手は、強制的に絶頂の状態になってしまうのよ」

「言い直さなくていいですから!!」

ちなみに、アクアさんの鎖の腕前はプロ級であった。
鎖にプロ、アマがあるかどうかなんて知らないが。

「観念しなさい。今日は私、深夜テンションだから」

「今は真昼間!! 明日は終業式! 頼むから、そのテンションはもう下げてっ!!」

「おかしいわね。海斗の動きがいつもより鈍い……これは……うさぎ跳びによる筋肉痛!？」

「だからさっき長文で説明しただろ!! 結局あんまり聞いてなかったんですね!!」

「さて、そろそろ海斗を追いつめるのも飽きたし、イっちゃおうか?」

「俺は……絶対に逃げ切ってやるんだ~~~~~!!」

俺は鎖を引きちぎり、全速力でその場から離れ、逃げ出した。服はそこらへんにあるので、拾っていく。

→(脱ぎ捨て状態だった)

「あ、そっちは」

俺が逃げている間に、アクアさんの声が聞こえた。

「はい?」

俺は目の前を見た。

「……崖」

俺は真下を見た。

「崖の下」

俺は足を見た。

「浮いてる」

「海斗!!」

「うわあああああ!!」

俺は崖の下へとまっさかさまへ落ちていった。

俺の人生、短かったな……

ドボン

俺は崖下2メートル地点の温泉へと落ちていった。

「遅かったわ……!!」

アクアさんが崖の上で苦虫を潰したような顔をする。

どうしてそんな顔をするのだろうか。

まさか、本当は俺を殺したかったのでは!?

「海斗……自分の体をよく見なさい」

「はい？」

俺の胸はいつものように膨らんでおり、股間にあるはずのものもなかった。

「別にどこも……ってえええええええ!?!? いつものようにじゃねええええ!!」

「あなたは……女になってしまったのよ!?!」

「これ何てかいと1／2!?!」

何と言うスピーディな展開……君はこれに付いてこれるか！？
次回、かいと1／2熱湯編、方向音痴の子豚現る！！
次回も楽しみにしてくれよな！？

「楽しみじゃねえええええ！！！」

女の子と女の子と女の子とやっぱり女の子 (後書き)

性転換……ですか。

女度100% いちごパンツはありません(前書き)

何か過激な作品への風当たりが強くなってきているので、あんまり連載させてくはないです……

でもまあ、とりあえずアップします。

女度100% いちごパンツはありません

終業式、俺はものすごくそわそわしていた。

なぜなら、今まで俺に無いはずのものがあ、あるはずのものが無いからだ。

胸にはさらしが巻かれ、トランクスの中が妙に涼しい。

……いや、何かもうすいません。

俺は、体育館をずっとビクビク、そわそわしながら過ごす羽目になった。

「やあ台場君」

終業式が終わり、早々に俺に話しかけてきた男がいた。

クラスの中で俺に好き好んで話しかけてくる人間は一人しかいない。

「えーと……どうしたの？」

俺は精いっぱい作り笑いを浮かべて対応をした。

いつもと違うのは、その笑いに焦りも浮かんでいることだった。

「何か……変わったかい？」

「は、はあ？　そ、そんなことはないぞ」

俺はギクリとしてしまい、ついもう一つの口調になっていた。

だが、彼はそんな俺など気にせず、話しかけてくる。

「おかしいね……何故か君がとても色っぽく見えるんだよ」

.....

俺の寒気は頂点に達した。

体は転換されても、心は転換されていない。

BL? うわ ああああああああ ああああ!!

「ちゅー」

俺はその場に倒れこんだ。

ま、まずい……このままでは……

俺の意識はそこで無くなっていった。

「はっ！ 夢かつ！！」

夢じゃありません。

分かつとるわ！！ 単に現実逃避したくなっただけだっつうの！！

「気がついた？」

そのとき、保健室のベッドで横になっていた俺の横から声が聞こえた。

「え？」

俺は隣を見る。

そこには、俺と同じベッドに入っているアクアさんがいた。

「あ、アクアさん！？」

「気がついたのね」

ちなみに、彼女は体にシートだけ巻いている状態である。

そんな光景に慣れてしまった俺って……

「えーと……俺どうしてここに……ああっ！！」

「大声出さない方がいいわよ。人が来てしまうわ」

「そ、そんなことより！ 俺はどうしてここにいるんです！？」

これはとんでもない事態だ。

最悪、俺が女だということがバレてしまう。

「大丈夫よ、私が運んだから」

「は？ どうやって？」

「普通に」

「そうじゃなくて！ 俺が倒れたこと、分かったんですか！？ それに、どうやってアクアさんだけで……！！！」

「落ち着きなさい」

アクアさんがやれやれみたいなポーズを取った。
ムカつきます、はい。

「この世界はね、私の思い通りになる世界なのよ」

「え！？」

突然の新世界の神発言に、俺は若干引いた。

「その顔、バカにしてるわね」

「い、いえいえ……それで、本当は？」

「私の言うことが信じられないの？」

「いえ、アクアさんが見返りを求めず俺を助けるとは思えにくいので」

「確かに」

「否定しろよっ！　そこは嘘でも否定してくれよっ！！」

女同士の姦しい会話が続く。

……って俺は女じゃねえ！！

「ま、あなたの秘密はまだ誰にもバレていないわ。私以外の誰にも」

「そうなんですか？」

「ええ……私と海斗、二人だけの秘密ね」

「は、はあ……」

俺は、アクアさんに何故か一瞬、突然恐怖を感じた。
どういうことだ？

「じゃ、まずは女同士の裸のお付き合い……」

「おおっと！！　もうすぐ水戸コンドリア門が始まるぜ！！」

俺は急激な運動をした。

随分アバウトな表現だなあ……

「海斗は、突然立ち上がり、帰りの支度を始めた」

「そうそうそれぞれ」

俺は手足を動かしながらそれに答えた。

そして、急いでその場を去ることに決めた。
ちなみに、水戸コンドリア門って何？

「ふう……家なら大丈夫だな」

「ご、ご主人様が女の子で、女の子がご主人様!？」

「そ、そうだった~~~~~!!!!」

家にはメイド幽霊がいたんだっ!!

出てきたのはいいが、あんまり出番が無いので、忘れていた。
作者のボケナスがあ!!

「君が主でメイドが私で」

「至極どうでもいいね、それ」

「ご主人様が女の子と言うことは……お風呂も一緒ってことですね
!!」

「何だよその考え!! 俺は男だ!!」

「じゃあ男でもいいですから、一緒にお風呂入りましょう!」

「それ、もう意味ねえじゃん!!」

「それにしてもやっと……ですね」

「ああ……」

「「性転換カテゴリ!!」」

「ねえ聖子」

「なあに奈緒美ちゃん？」

「近頃、私の出番が無いようなのだが、どう思う？」

「どう言ったら私を犯してくれる？」

「お前がカスだから」

「お前がカスだから」

「よし、犯す！！」

以上、川崎家の風景でした。

女度100% いちごパンツはありません(後書き)

いろいろ心配です……

アクアたんのアレの日（前書き）

更新一時再開

まるでどこかのハン〇ー×ハン〇ーみたいと思わないでください

……

アクアたんのアレの日

「アイケン課外授業」

奈緒美先輩が俺の家にホワイトボードを持ってきて、そこにそんな文字を書き込んだ。

ちなみに、もう夏休みに突入しています。

それなのに、この女たちは人様の家に勝手に上がりこむ。迷惑極まりない奴らだ。

と、心の中では強気な俺であったりする。

「それで、何でみなさんここに？」

ちなみに、声は男のままなので、かなり違和感です。
まあアクアさん以外気付いていないと思うが。

「アイケンのこれからの予定を決めるためだ」

奈緒美先輩が比較的大声で言った。

「予定って……」

一応俺は八月の中盤から実家に帰らなくちゃいけないんだけど……

「お前の予定はナギサから聞いている。あと家のことも」

「マジですか。じゃあ俺の悲惨な家庭環境も……」

「よく分からなかったが、お前がアイケンメンバーであることには

変わりはない」

「と、いうわけで弟君♪ エッチしょ？」

「しねえよ!! どういう流れでそこに行きついた!？」

「そういう運命です。旦那様？」

どういう運命だか分からないが、羞恥の無い十代に水平チョップを食らわせたいと思ったことは確かであった。

ついでに言うと、秩序の無いアイケンにドロップキックを食らわせでもいい。

あまり放っておくと、聖子先輩と歩ちゃんがマジで俺を襲いかねないので、適度に相手をしてあげた。

……性的な意味じゃないぞ。

「話を進めていいですか？」

「いや、お前がおっぱじめたいんなら、先に済ましても構わんぞ？」

奈緒美先輩が俺に向かって意地悪な笑みを向ける。

「うん。弟君がおっぱいいじめたいんなら、先に済ましてもいいよ?」

「オイ!! なんか言葉が変わってるぞ!! 羞恥の無い十代に水平チョーーーーップ!!」

「痛いっ!!」

俺は軽く聖子先輩の首にチョップを食らわした。
が、俺の力がそれでも強すぎたみたいだ。

「す、すいません……」

「いいよ……私、弟君にされるなら、痛いのも気持ちいいから……」

「聖子先輩だけずるい！！ 私にもチョップ食らわしてください！！」

「アンタらは一体何なんだ！？」

この2名のせいで話が全く進まないのも、いつも通りだ。
やっぱりこの学校に来たのは間違いだったか……

「ところでアクアさん。さっきから何もしゃべってないんですが、
どうしたんです？」

「え？ いえ……別に……」

アクアさんはずっと何かを考え込んでいるみたいだ。

「確かに。アクアたん、らしくないぞ。私に全てを捧げてみる」

「それを言うなら話してみろでしょうが……」

俺達の軽口にも上の空。

どこか調子でも悪いのか？

「まさかアクアたん……アレの日か！？」

「アレの日？」

俺は奈緒美先輩にそんなことを尋ねる。

「お前、それをこの私に尋ねるのか!？」

「え？ 奈緒美先輩じゃいけないんですか？」

「い、いやいけないけどな……わ、私だって人並みに恥ずかしいことが……」

「え？」

奈緒美先輩がらしくなく、そっぽを向く。

「もういい。アクアたん、痛いのなら……」

「平気よ。それは先々週のことだから……」

「そうか。だが無理をするなよ。私との子供を作るときにお前の体に何かあってはたまらんからな」

「ええ……分かったわ。気を付ける」

「これは重傷だ……」

アクアさんは奈緒美先輩の冗談にも反応しない。
まさかとは思うが、本当に体調不良なのではないのだろうか？

「えーと、私はここらへんで失礼させてもらうわ。用事を思い出したの」

「え？」

アクアさんはそう言って立ち上がると、俺の家から帰っていった。

「どうしたんでしょうね、アクアさんは……」

「ちょっと心配だね、奈緒美ちゃん」

歩ちゃんと聖子先輩も心配しているようだ。

「いや、アクアたんはたまにこういうことがある。だから心配するな」

「いや、無いでしょ？ 奈緒美ちゃん？」

「……」

聖子先輩はニツコリ笑って奈緒美先輩を見る。

「別に気を遣わなくていいから奈緒美ちゃん。私たちに心配させないように……」

「聖子、お前今日から一週間、自慰行為禁止」

「ひどいよ奈緒美ちゃん！！ 私、一週間後、生きてる自信ないよ！！」

「空気読んでませんが、お茶入りましたよ」

ナギサは俺にお茶を出した。

ナギサの体のトリックが最近分かりつつあった。

どうやら、彼女は俺に関係するものには触れることができるのだ。

だから、俺の分のお茶しか入れられない。

ある意味、最強の専属メイドである。給料いらないし、食費もいら
ない。

「確かに読んでないな」

とは言いつつ、俺はナギサの入れてくれたお茶を飲んで心を落ち着
かせる。

「あ、私はそろそろバイトの時間なので帰りますね！」

「うーい」

歩ちゃんは家を出ていった。

「私たちもそろそろ夏期講習行かないとね」

「そうだな」

そして奈緒美先輩と聖子先輩も帰っていった。

そういえば、彼女たちは今年、受験だったんだ……

「さて、俺も頑張りますか」

「アクア様のことですか？」

「うーん……まあな」

俺はどうするべきか考えた。

「微力ながら、私もそれに参加させていただいてもよろしいでしょうか？」

「え……」

ナギサは恭しく頭を下げる。

何と言うか、彼女の真面目なところを久しぶり見た気がする。

「私、消えることができるじゃないですか」

「おお！」

そういえば、彼女は今まで姿を消して俺のことを見ていた……
ってことは！ 俺が夜中に見てたピーなビデオとかも……！！！！

「大丈夫です。ご主人様の性癖はほとんど理解しました」

「するなああああああ！！！」

かくして、俺とナギサの新たな冒険が始まるのである。
マジ？

アクアたんのアレの日（後書き）

これ、終わる日は来るのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8714h/>

アイケン

2010年10月11日14時48分発行